

青森市埋蔵文化財発掘調査報告書 第35集

小牧野遺跡

発掘調査報告書

平成8年度

青森市教育委員会

序

青森市教育委員会では、平成2年度から市内野沢に所在しております全国的にも類例の少ない環状列石を主体とする小牧野遺跡の発掘調査に取り組んできております。平成7年3月には当初からの目標であった国史跡の指定を受け、そして昨年、6月25日には小牧野遺跡整備基本構想策定委員会から、基本構想の提言を受けることができました。構想では、縄文時代の植生や遺構の復元など、今後、大人から子供まで広く市民に親しまれるような史跡公園づくりを進めて行くうえでの第一歩を踏み出したところでございます。

今年度は、遺跡の範囲の把握と居住区の確認を目的に調査を実施し、本書はその成果をまとめたものであります。

最後となりましたが、ここに本書を刊行することができたのは、文化庁・県教育庁文化課並びに小牧野遺跡発掘調査会委員の方々をはじめ、関係各機関・各位の御指導、さらには地元町会であります野沢町会並びに土地所有者各位のご協力によるものと、深く感謝の意を表する次第であります。

平成9年3月

青森市教育委員会

教育長 池田 敬

例 言

1. 本書は、平成8年度に発掘調査を実施した青森市大字野沢字小牧野に所在する小牧野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成2年度から継続して実施してきており、本年度は7年次にあたる。1年次から6年次をまとめた報告書（青森市教育委員会1996）は既に刊行しており、本書は2冊目にあたる。
なお、平成元年度の発掘調査は青森山田高等学校により実施されている（葛西・高橋1989）。
3. 発掘調査および本報告書作成は、国ならびに県の補助金交付を受けて実施したものある。
4. 本報告書の執筆ならびに編集は、青森市教育委員会が行い、執筆者名は文末に記してある。
5. 出土遺物で、数量的に多いものは、一部を除いて実測図ならびに観察表を割愛した。
6. 本報告書の土層注記については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄1993）に準拠した。
7. 石質の鑑定にあたっては、青森県教育センター指導主事工藤一彌氏に依頼した。
8. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
9. 出土遺物および記録図面ならびに写真関係資料は、現在、青森市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査の実施にあたっては、調査区地権者および野沢町会の多くの方々にご協力をいただき、また、発掘調査ならびに本報告書作成にあたっては、次の機関・諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）

文化庁・青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・大泉村教育委員会・函館市教育委員会・市立函館博物館・滝沢村教育委員会・近隣各町会・青木 誠・石井克己・五十嵐一治・五十嵐貴久・市川金丸・伊藤公明・井上雅考・上田 篤・上野隆博・太田国男・大塚昌彦・岡田康博・岡村道雄・小山彦逸・金山晃道・神谷裕子・河原純之・川原田満有・木村 高・木村鐵次郎・桐生正一・熊谷常正・小池伸彦・小林 淳・小林和彦・小林 克・小松隆史・小山修三・齋藤 淳・櫻田隆・佐々木高雄・佐藤智雄・佐原 眞・相馬信吉・高田和徳・高橋神奈男・田原良信・富樫泰時・徳差義男・永井 治・長沼圭一・中村公英・成田滋彦・野村 崇・林 謙作・原田昌幸・福田友之・福田裕二・古屋敷則雄・松谷泰英・三浦圭介・水田政雄・三宅徹也・武藤祐浩・山本和夫

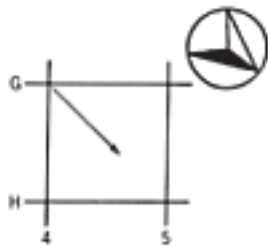
凡 例

本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーン・トーン等は以下のとおりである。

- | | |
|----------------------|------------------|
| 〔略 称〕・「大石平型石籠」 「大石平」 | ・「不定形石器」 「不定形」 |
| ・「磨 製 石 斧」 「磨 斧」 | ・「敲 磨 器 類」 「敲 磨」 |
| ・「珪 質 頁 岩」 「珪」 | ・「安 山 岩」 「安」 |
| ・「凝 灰 岩」 「凝」 | ・「緑色凝灰岩」 「緑 凝」 |

〔グリッド名〕(例) G - 4グリッド

〔遺構でのスクリーン・トーン〕



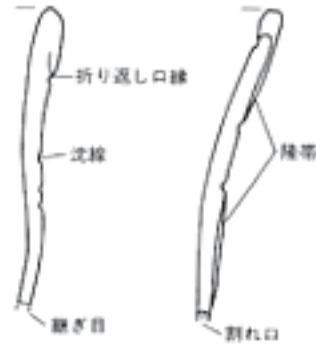
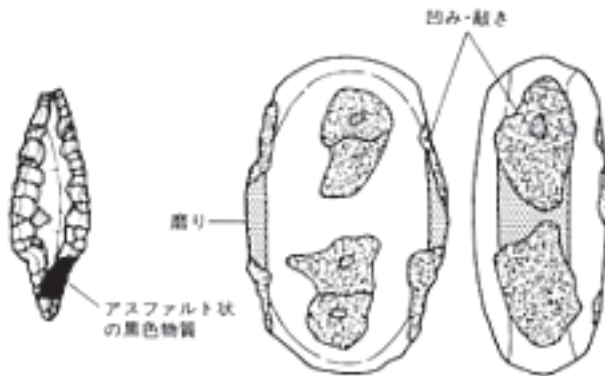
地 山



遺物集中ブロック

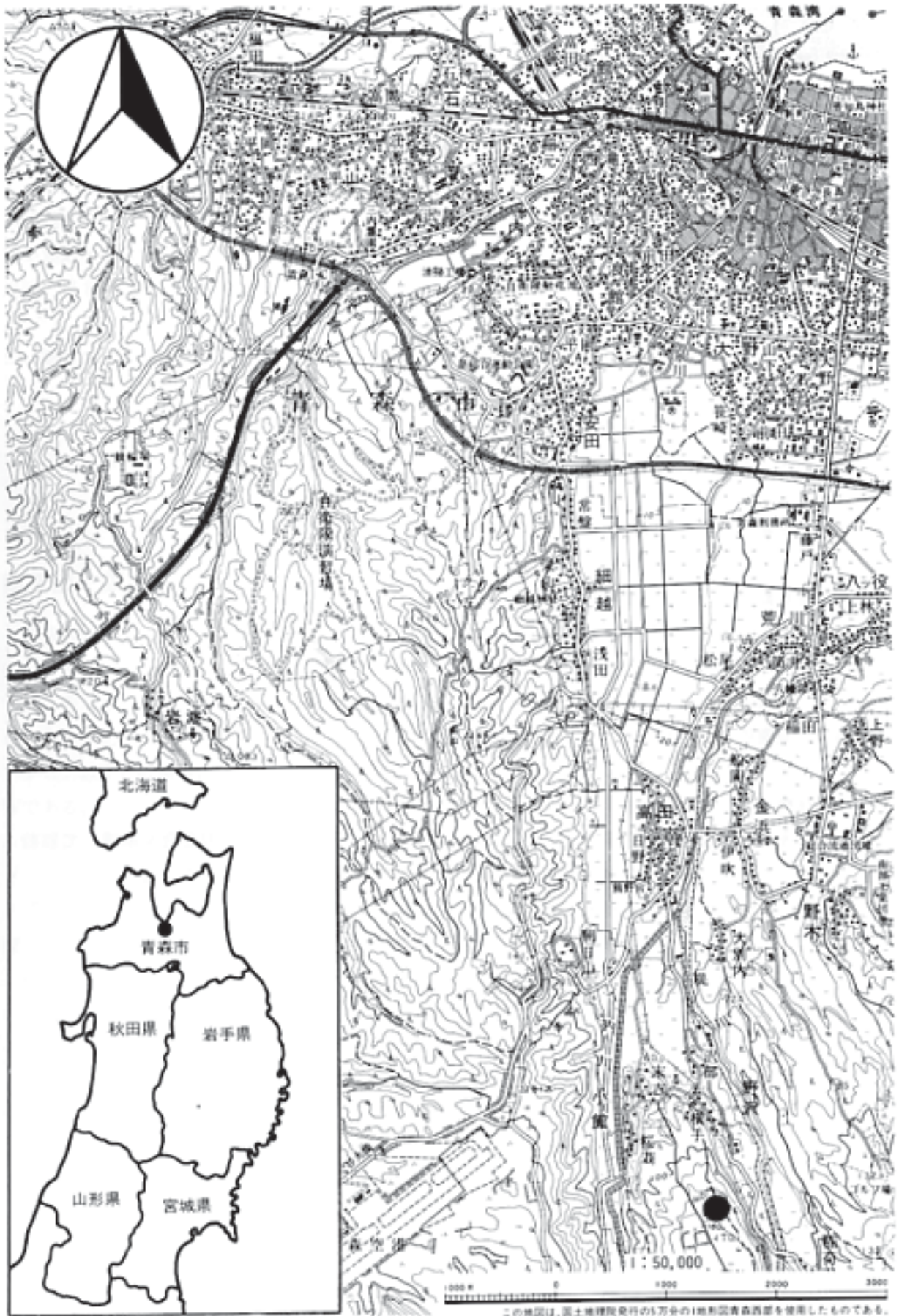
〔石器でのスクリーン・トーン〕

〔土器切断面〕



目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第 章 調査の概要	
第1節 調査要項	2
第2節 調査方法	3
第3節 調査経過	5
第 章 遺跡の環境	6
第 章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	
1.土坑	7
2.小ピット	7
3.遺物集中ブロック	10
第2節 出土遺物	
1.土器	10
2.石器	25
3.土製品・石製品	43
第 章 地下レーダー探査報告	53
第 章 分析と考察	
第1節 第5号遺物集中ブロックとその土器群について	57
第2節 刃部の作出方法と角度からみた不定形石器の機能について	60
第3節 凹みを有する礫石器について	62
第3節 遺跡の範囲の把握について	66
まとめ	
引用・参考文献	
写真図版	



第1図 小牧野遺跡（印）位置図

第 章 調査の概要

第 1 節 調査要項

1. 調査目的

小牧野遺跡は特殊な形態をもった環状列石を中心とする縄文時代後期前半の遺跡である。本遺跡は、縄文時代の精神生活や社会構造を明らかにするとともに、土地造成や多量の大型石の運搬・設置など大規模な土木工事の実態など詳しく知る上で極めて貴重な遺跡であることから、平成7年3月、国史跡となった。今後、遺跡の解明及び保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

本年度は小牧野遺跡の範囲を把握することを目的とし、環状列石の周辺部および昨年度に実施した地下レーダー探査の調査範囲を対象として発掘調査を実施する。

2. 遺跡名及び所在地 小牧野遺跡（こまきのいせき） 青森市大字野沢字小牧野 54 - 192 ほか

3. 調査主体者 青森市教育委員会

4. 事業実施期間 事前準備 平成8年4月1日～6月30日
発掘調査 7月1日～9月27日
整理作業 9月28日～平成9年3月31日

5. 調査対象面積 3,000m²

6. 調査体制

遺跡の重要性及び将来の遺跡保存の観点から調査の万全を期するため、調査会を組織して臨むことにする。なお、調査会の組織は調査開始の平成2年度から継続しているものである。

調査会の名称は「小牧野遺跡発掘調査会」とする。

調査会組織

調査会長	大高 興	青森市文化財審議会会長	(考古学)
調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	(考古学)
"	小林 達雄	国学院大学教授	(考古学)
調査員	三辻 利一	奈良教育大学教授	(分析化学)
"	小山 陽造	八戸工業高等専門学校教授	(分析化学)
"	諸戸 靖史	八戸工業大学教授	(土木工学)
"	葛西 勵	青森短期大学助教授	(考古学)
"	高橋 潤	青森山田高等学校教諭	(考古学)
"	工藤 一彌	青森県教育センター指導主事	(地質学)
"	秋元 信夫	鹿角市教育委員会生涯学習課 文化史跡整備担当主査	(考古学)

調査協力員 渡辺 久男 地元野沢町会長

事務局 青森市教育委員会

教 育 長	池 田 敬
生 涯 学 習 部 長	永 井 勇 司
社 会 教 育 課 長	山 田 章
埋蔵文化財対策室長	遠 藤 正 夫
埋蔵文化財対策室長補佐	福 士 敦
埋 蔵 文 化 財 係 長	石 岡 義 文
主 事	田 澤 淳 逸 (調査担当)
〃	小 野 貴 之
〃	木 村 淳 一 (調査担当)
〃	児 玉 大 成 (調査担当)
〃	沼宮内 陽一郎
〃	設 楽 政 健 (調査担当)

第2節 調査方法

調査区の設定にあたっては、平成元年度から7年度までに設置したグリッドを継続して使用することにし、そのグリッドを延長して設定した。各グリッドは4×4mグリッドを1単位としている。グリッド杭の表示は、東から西にA、B、C...、Aラインより東には-A、-B、-C...の順にアルファベットを、南から北へは1、2、3...の順にアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、アルファベットとアラビア数字との組み合わせで、グリッド南隅の表示によるものとした。南北方向の基準線は、N - 33° - Wである。

調査は、トレンチ法を採用し、分層発掘に重点を置いた。また、土層の堆積状況を観察するためのセクションベルトも設定した。

遺構は、各種類の確認順によって番号を付した。精査にあたっては、性格や構築時期、堆積状況の把握に重点を置き、その確認後、遺跡保存を考慮に入れ半截の状態で埋め戻した。

遺物は、遺構内のものについては、原則として位置や高さを考慮にいれた遺物分布図を作成することに努め、必要に応じて微細図も作成し、番号を付して取り上げた。遺構外のものについては、グリッド一括で取り上げた。

実測は、遺構や遺物出土状況については簡易遣り方測量を、遺物の分布については平板測量を用いた。縮尺は、遺構平面図・遺物分布図・セクション図は20分の1、微細図は10分の1を採用した。

写真撮影については、主にモノクロームとカラーリバーサルフィルムを使用した。被写体は、遺構確認面・土層・半截状況や調査状況、基本層序、遺物出土状況などである。



第2図 小牧野遺跡地形及び調査区位置図

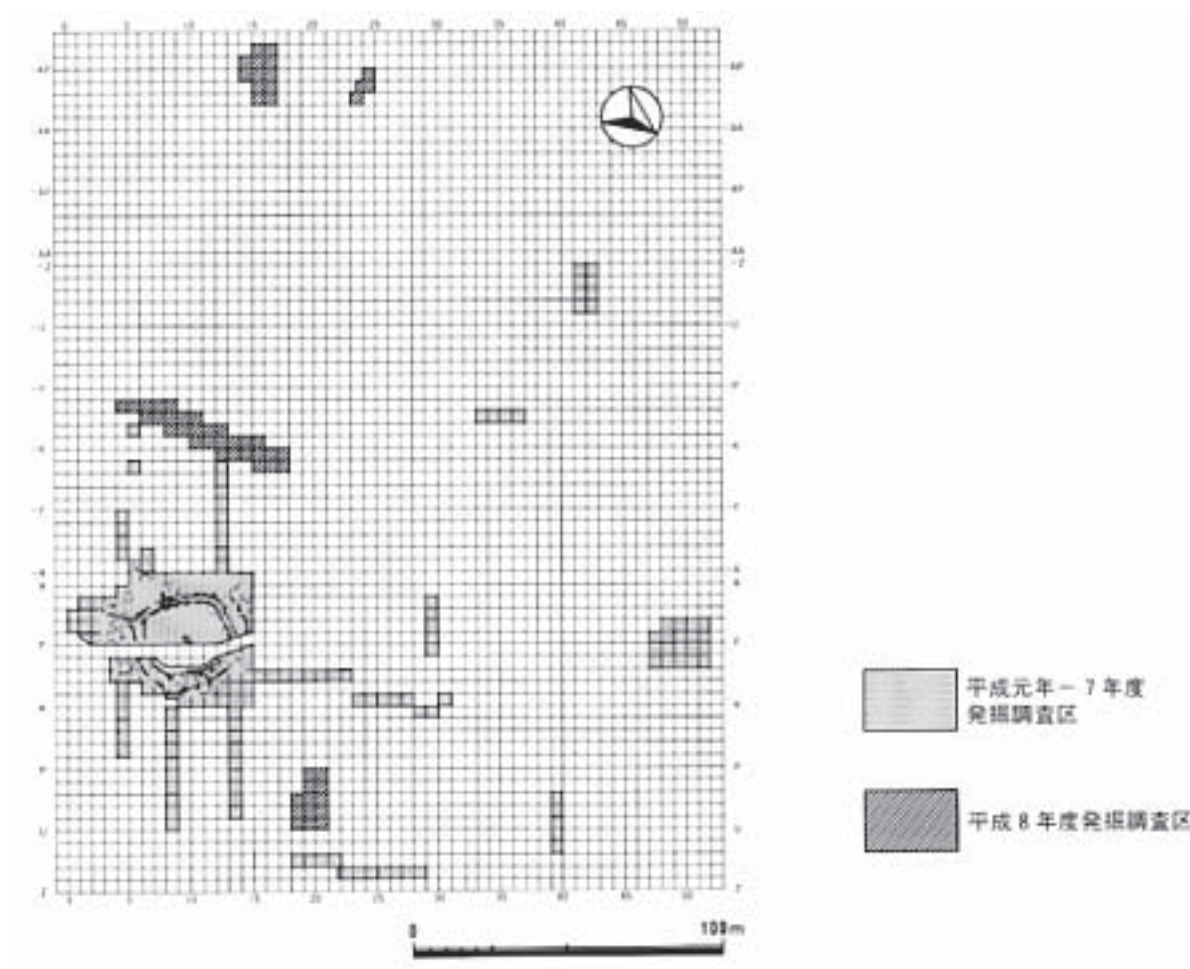
第3節 調査経過

発掘調査は、7月1日から9月27日まで実施した。以下、調査日誌に基づいてその経過を述べることにする。

- 7月 1日、発掘調査区の設定にあたり、周辺の測量及び標高移動をおこなった。
- 7月 8日、作業員へ作業内容を説明、発掘調査区の木草根等の除去作業。
- 7月12日、環状列石東側の調査区をKトレンチと称し、粗掘り作業を開始。
- 7月18日、列石西側の調査区をLトレンチと称し、粗掘り作業を開始。
- 8月 5日、次の調査区周辺に標高移動を行う。
- 8月20日、Kトレンチで遺物集中ブロック、Lトレンチで土坑を確認。
- 9月 8日、現地見学会を開催。
- 9月 9日、列石から約190mの地点の調査区をMトレンチと称し、粗掘りを開始。
- 9月18日、Mトレンチ北側の調査区をNトレンチと称し、粗掘りを開始。
- 9月27日、調査区の完掘状況の写真撮影を完了し、調査を終了した。

調査経過については、調査日誌から一部抜粋した。

(田澤 淳逸)



第3図 グリッド配置図

第 章 遺跡の環境

小牧野遺跡は、青森市の市街地から南方約10kmの野沢字小牧野に位置する縄文時代後期前葉の環状列石（ストーンサークル）を主体とする遺跡である。

青森市は、北に陸奥湾を臨み、南を八甲田連峰に接した人口約30万人の県都である。市街地を中心として、青森平野が東西約10km、南北約5kmの三角形を呈して広がっている。その平野部を、西は「入内断層」を境に比較的緩やかな丘陵が、南から東は八甲田山に連なる火山性台地が取り囲んでいる。この火山性台地は、西から入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など北流する河川によって開析されており、各河川によって挟まれた部分は、平野部に対し舌状に突き出した台地となっている。

本遺跡は、入内川と荒川によって挟まれた火山性台地上標高140m～150mに位置している。遺跡自体は、荒川側に東傾する斜面を利用しており、主体である環状列石は、この東傾斜面を切り出して造成している。

現在、遺跡の周辺は、環状列石の西側には畑地が広がり、北側・東側・南側は、スギなどの植林が行われており、大規模な開発行為は及んでいない。遺跡付近からは、北側に市街地・青森平野並びに陸奥湾、東に雲谷峠を見渡すことができ、際だった人工物は、西側にそびえる青森空港の誘導灯だけという縄文の原風景を彷彿させる遺跡である。

字名であり、遺跡名でもある「小牧野」は、この土地が、かつて牧場として利用されたことに由来しており、その名残は、環状列石内に今もなお残る嘉永7年（1854年）の銘が刻まれた「馬頭観音碑」から窺い知ることができる。また、丘陵上に大型の河原石が露出していたことなどから別称「石神平」とも呼ばれていた。

小牧野遺跡の周辺の遺跡についての詳細は、平成7年度報告（青森市教育委員会1996）に譲るが、西側の「入内断層」を挟んだ丘陵地は、比較的標高が低く、多くの遺跡が確認されている。小牧野遺跡も所在する南側から東側に広がる火山性台地に立地する遺跡は、近年の分布調査や開発行為等に伴う確認によって増加傾向にあり、60箇所登録されている。現段階で、小牧野遺跡の立地する標高140m～150mという地点は、その火山性台地に所在する遺跡においても比較的高所に属するものである。

なお、平成8年度の調査において用いた基本層序については、平成7年度報告の基本層序に準拠しており、その概要は以下に示した。

第 層	10YR 2/1	黒 色	土木草根を含む、粘性無	表土
第 層	10YR1.7/1	黒 色	土シルト質、粘性有、しまり有	A・B - 4～6グリッドでは、続縄文時代遺物包含層
第 層	10YR 2/2	黒褐色土	シルト質、粘性弱、しまり弱	上面にB-Tm、続縄文時代遺物包含層
第 層	10YR 2/3	黒褐色土	シルト質、粘性有、しまり弱	上面から縄文時代晩期の遺物、中位下位は縄文時代後期の遺物包含層
第 層	10YR 2/1	黒 色	土シルト質、粘性有、しまり弱	無遺物層
第 層	第 層・第 層との混合土		軟質、しまり弱	漸移層
第 層	10YR 5/6	黄褐色土	浮石質火山灰	

（木村 淳一）

第 章 検出遺構と出土遺物

第 1 節 検出遺構

本遺跡では、平成元年度に、環状列石の発見と共に、環状列石内から埋設土器遺構 2 基、焼土遺構 1 基、土坑 1 基、竪穴遺構 1 基が検出されている（葛西・高橋 1989）。平成 2 年度から 7 年度の調査では、この環状列石の他に、配石遺構 17 基、集石遺構 1 基、竪穴式住居跡 3 軒、土坑 152 基、小ピット 131 基、埋設土器遺構 3 基、焼土遺構 7 基、溝状遺構 1 基、遺物集中ブロック 4 箇所を検出した（青森市教育委員会 1996）。

今年度は、土坑 4 基、小ピット 4 基、遺物集中ブロック 1 箇所を検出した。なお、遺構番号は、昨年度の報告から続く番号を付した（土坑：第 153 号～、小ピット：第 132 号～、遺物集中ブロック：第 5 号～）。

1. 土坑

今年度の発掘調査では 4 基の土坑を検出した。すべて、環状列石西側の L トレンチで検出した。平面形と断面形の分類基準は昨年度の報告に準拠する。

第 153 号土坑は - N - 10 グリッドで検出した。平面形は不整形、断面形はナベ底形を呈する。堆積土は 2 層に分層した。遺物は出土していない。

第 154 号土坑は - N - 10 グリッドで検出した。未調査部分にのびる部分があるため、全体の平面形は把握できないが、不整形と推定される。断面形は、ナベ底形である。堆積土は、2 層に分層した。両壁際に堆積している第 2 層は、壁面が崩落したものと考えられ、その上部に第 1 層が堆積したものと考えられる。第 2 群 2 類土器を 2 片出土している。

第 155 号土坑は - L・ - K - 15 グリッドの境界線上で検出した。平面形は楕円形、断面形は不整形である。堆積土は 4 層に分層した。遺物は出土していない。

第 156 号土坑は、- J - 15 グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は不整形である。堆積土は 3 層に分層した。第 3 層は壁が崩落したものと考えられ、その上部に第 2 層、第 1 層が縞状に堆積している。遺物は出土していない。

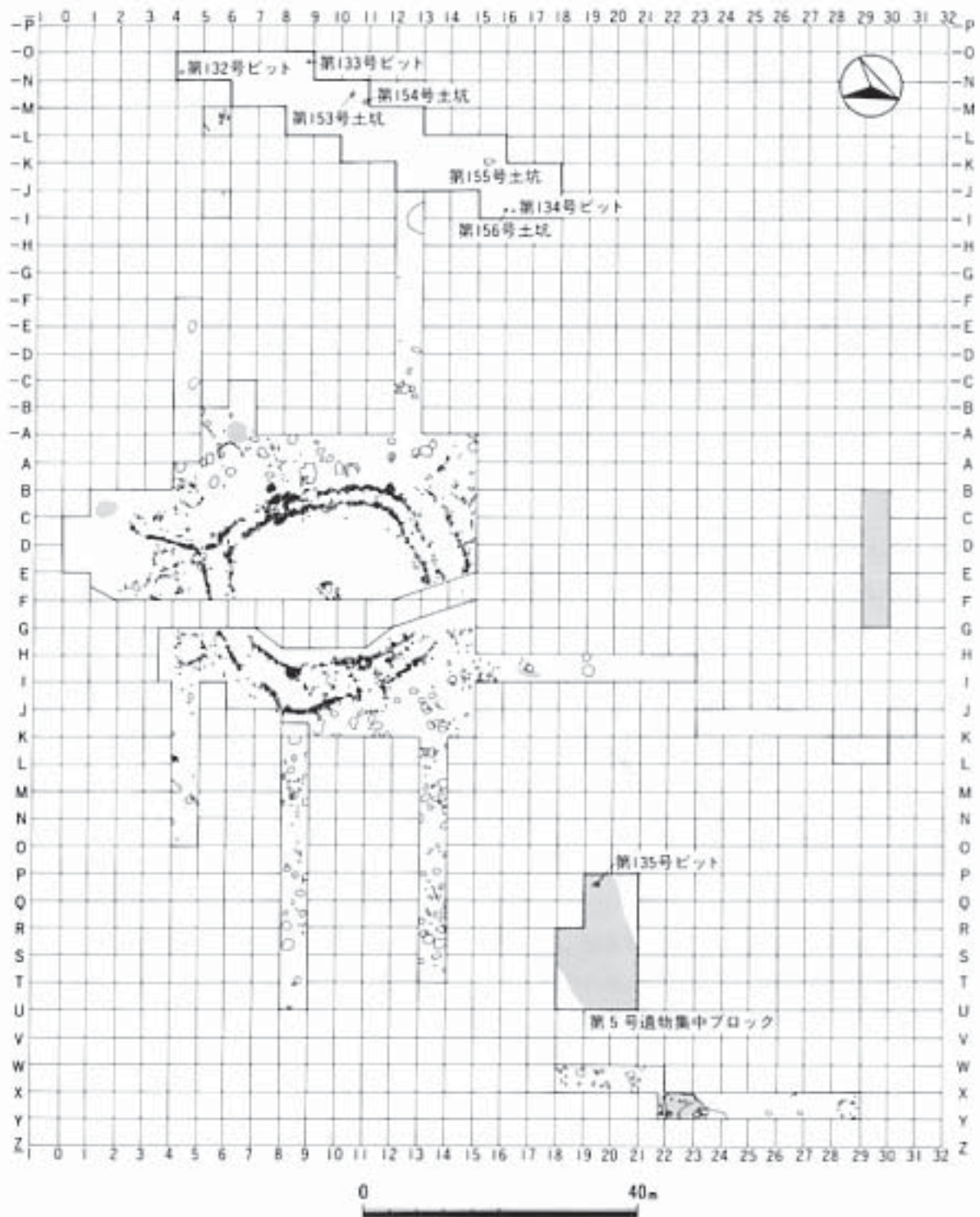
2. 小ピット

今年度の発掘調査では 4 基の小ピットを検出し、環状列石西側の L トレンチから 3 基、環状列石北東側の K トレンチから 1 基検出した。

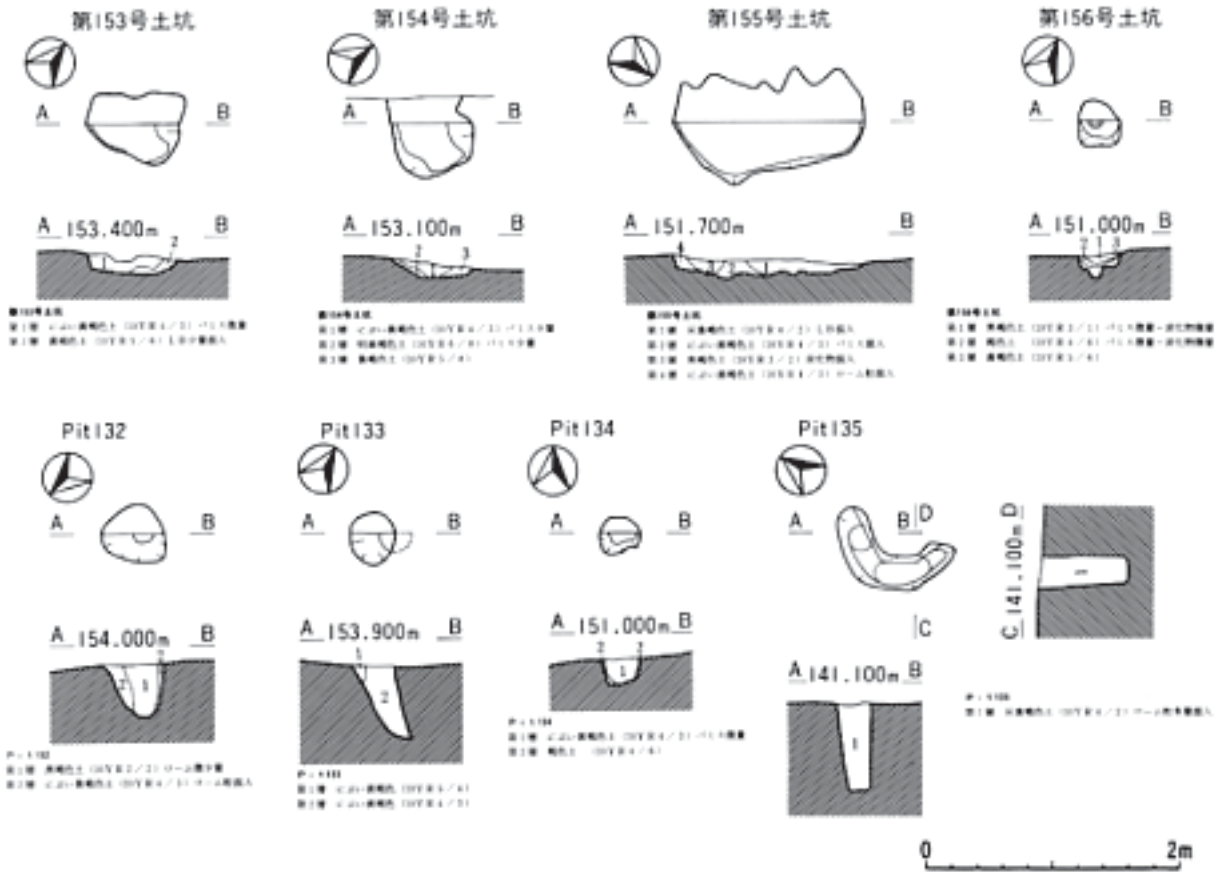
Pit - 132 は L トレンチの - 0 - 4 グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は円筒形を呈する。堆積土は 2 層に分層した。断面において、柱痕と考えられる第 1 層、その埋め土と考えられる第 2 層が確認できたことから、柱穴の可能性が高い。もっとも、このピットはトレンチ南側の壁面付近で検出されたので、L トレンチ南側の未調査部分からこれと関連するピットが検出される可能性もある。

Pit - 133 は L トレンチの - 0 - 8 グリッドで検出した。平面形は円形、断面形はほぼ円筒形を呈する。堆積土は 2 層に分層した。断面において、柱痕と考えられる第 2 層、その埋め土と考えられる第 1 層が確認できたことから、柱穴の可能性が高い。

Pit - 134 は L トレンチの - J - 16 グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は円筒形を呈してい



第4図 環状列石周辺遺構配置図



第1表 土坑観察表

番号	グリッド	形状		計測値(cm)			出土遺物
		平面形	断面形	開口部	坑底部	深さ	
153	-N-10	不整形	ナベ底	76×58	50	14	
154	-N-10	不整形	ナベ底	×64	40	16	第 群2類土器2片
155	-L-K-15	楕円形	不整形	152×80	142	20	
156	-J-15	円形	不整形	38×34	8	20	



第2表 小ピット観察表

番号	グリッド	形状		計測値(cm)			出土遺物
		平面形	断面形	開口部	坑底部	深さ	
132	-O-4	円形	円筒形	50×46	16	42	
133	-O-8	円形	円筒形	24×32	26	58	
134	-J-16	円形	円筒形	33×14	22	20	
135	P-19	a円形	円筒形	×26	18	70	
		b円形	円筒形	×26	22	72	



第154号土坑出土土器

第3表 第154号土坑出土土器観察表

番号	層位	器形	文様	分類
1	覆土	深鉢	沈線、隆帯	第 群2類
2	覆土	浅鉢	沈線	第 群2類

第5図 土坑・小ピット

る。堆積土は、2層に分層した。Pit - 132と類似した堆積状況を示していることから、柱穴であると考えられる。

Pit - 135はKトレンチのP - 19グリッドで検出した。堆積土は1層である。壁面と底面はきわめて堅緻である。平面形がU字形の深い掘り込みの底部に、断面形が円筒形を呈する凹みが2カ所見られる。この2カ所の凹みは柱が抜き取られた跡と考えられ、柱穴として使用され、柱を抜き取った後、直ちに埋めもどされたことが推定できる。

(設楽 政健)

3. 遺物集中ブロック

本調査で帯状に広がる遺物の濃密な分布を1箇所、R ~ U - 18、P ~ U - 19・20グリッドで確認した。南西から北東に向かった緩傾斜面に位置し、平成7年度検出の第2号遺物集中ブロックへ続くものと思われる。

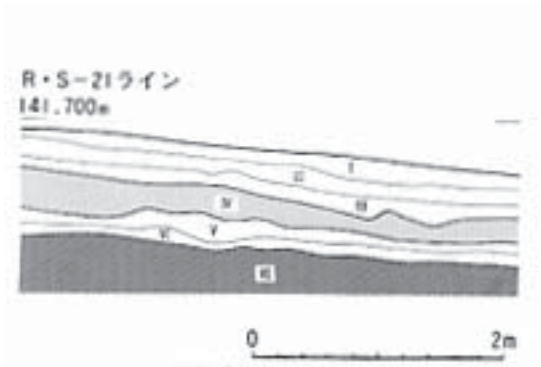
遺物は、自然堆積土である第 層の上半部から縄文時代後期の第 群土器を中心に出土し、その分布のひろがりは地形に沿って帯状を呈している。

土器の多くは、破片で出土し、その数量はダンボール箱で16箱分である。復元できたものは、42個体あった。土器は、施文文様から1類~3類に分類でき(後述)、器形が深鉢形、鉢形、浅鉢形、台付浅鉢形、壺形を呈するものが出土した。

石器は、石鏃2点、石錐5点、石匙1点、石篋8点、大石平型石篋1点、不定形石器449点、その他の剥片石器3点、石核27点、磨製石斧4点、石皿1点、石錘1点、敲磨器類45点が出土した。

土製品や石製品は、土偶4点、鐸形土製品7点、環状土製品1点、土製耳飾1点、土器片利用土製品17点、粘土魂1点、その他の土製品3点、球状石製品2点、有孔石製品8点、三角形岩版25点、円形岩版23点、その他の石製品1点が出土した。

(児玉 大成)



第6図 遺物集中ブロックセクション図

第2節 出土遺物

1. 土器

本調査で出土した土器は、段ボール箱で17箱分出土し、そのほとんどは、第5号遺物集中ブロックで出土し、縄文時代後期前葉に相当するものが主体を占めていた。時代や時期の区分は平成7年度の報告に準拠し、分類した結果、本調査では、第 群から第 群土器が出土した。

ここでは、遺構内及び遺構外から出土した土器について併せて記述していく。

第 群土器(第13図38~41)

縄文時代前期に属する土器である。口縁部に横位の隆帯が貼付されるもの(38・39)は、円筒下層b式土器に比定され、口縁部に横位の燃糸圧痕が施されるもの(40・41)は、円筒下層d₁~d₂式に比定されるものである。いずれも深鉢形土器である。

第 群土器(第7図1、第13図42)

縄文時代中期に属する土器である。口縁部に隆帯と刺突文が施されるもの(42)は、円筒上層c～d式土器に比定され、口縁突起に隆帯並びに胴部に沈線による胸骨文が施されるもの(1)は、円筒上層e式土器に比定される。いずれも深鉢形土器である。

第 群土器

縄文時代後期に属する土器である。施文文様により、1類～3類に分類した。なお、編年的には1類～3類へと変遷するものとして考えている。

1類(第7図3・4、第14図69～87)

充填あるいは磨消縄文を施し、沈線による大柄な入組文や渦巻文、方形文などを主体とするもの。深鉢形土器が主体を占めている。渦巻文が施されているもの(第14図77・78) 方形文が施されているもの(第14図75・76) 長方形文や楕円形文などが施されているもの(第7図3・4) 入組文や三角形文などが施されているもの(第7図3)などが出土している。蛭沢3群(青森市蛭沢遺跡発掘調査団1979)・沖附(2)式(成田1989)・十腰内 式土器第2段階A種(葛西1979)に相当するものである。

2類(第5図1・2、第8図7～10、第10図18～25、第11図26・27・31・32ほか)

沈線の両端が連続するものや半肉彫的技法によるもの、2～3条の沈線による渦巻文、入組文などを主体とするもの。本土器群の主体を占めるもので、深鉢形、鉢形、浅鉢形、台付浅鉢形、壺形土器が出土している。

沈線の両端が連続する渦巻文が施される深鉢形(第8図10、第14図92) 浅鉢形(第10図24) 壺形土器(第11図32) 2～3条の沈線による渦巻文が施される浅鉢形(第10図22、第16図124) 台付浅鉢形(第11図26) 壺形土器(第12図36) 半肉彫的技法による渦巻文や円形文、楕円形文などが施される深鉢形(第15図100～110) 壺形土器(第16図137) 沈線による横位のうろこ状文が施される浅鉢形土器(第16図125)などが出土している。十腰内 式土器第2段階B種(葛西1979)・十腰内 A式(成田1989)に相当するものである。

3類(第9図11～14、第12図37、第15図117・118、第16図130ほか)

沈線、櫛歯状沈線、充填磨消縄文、横位に展開する入組文や渦巻文、S字状文、山形文などを主体とするもの。なお、本類土器は平成7年度報告の2類土器fに比定されるものである。

深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形土器が出土している。沈線による渦巻文が施される深鉢形土器(第9図12) 櫛歯状沈線による渦巻文が施される深鉢形土器(第9図11) 沈線と櫛歯状沈線によるS字状文が施される深鉢形(第9図13) 浅鉢形土器(第16図130) 櫛歯状沈線によるS字状文が施される鉢形土器(第9図14) 沈線と磨消縄文によるS字状文が施される壺形土器(第12図37)が出土している。十腰内 式土器第3段階(葛西1979)・十腰内 B式(成田1989)に相当するものである。

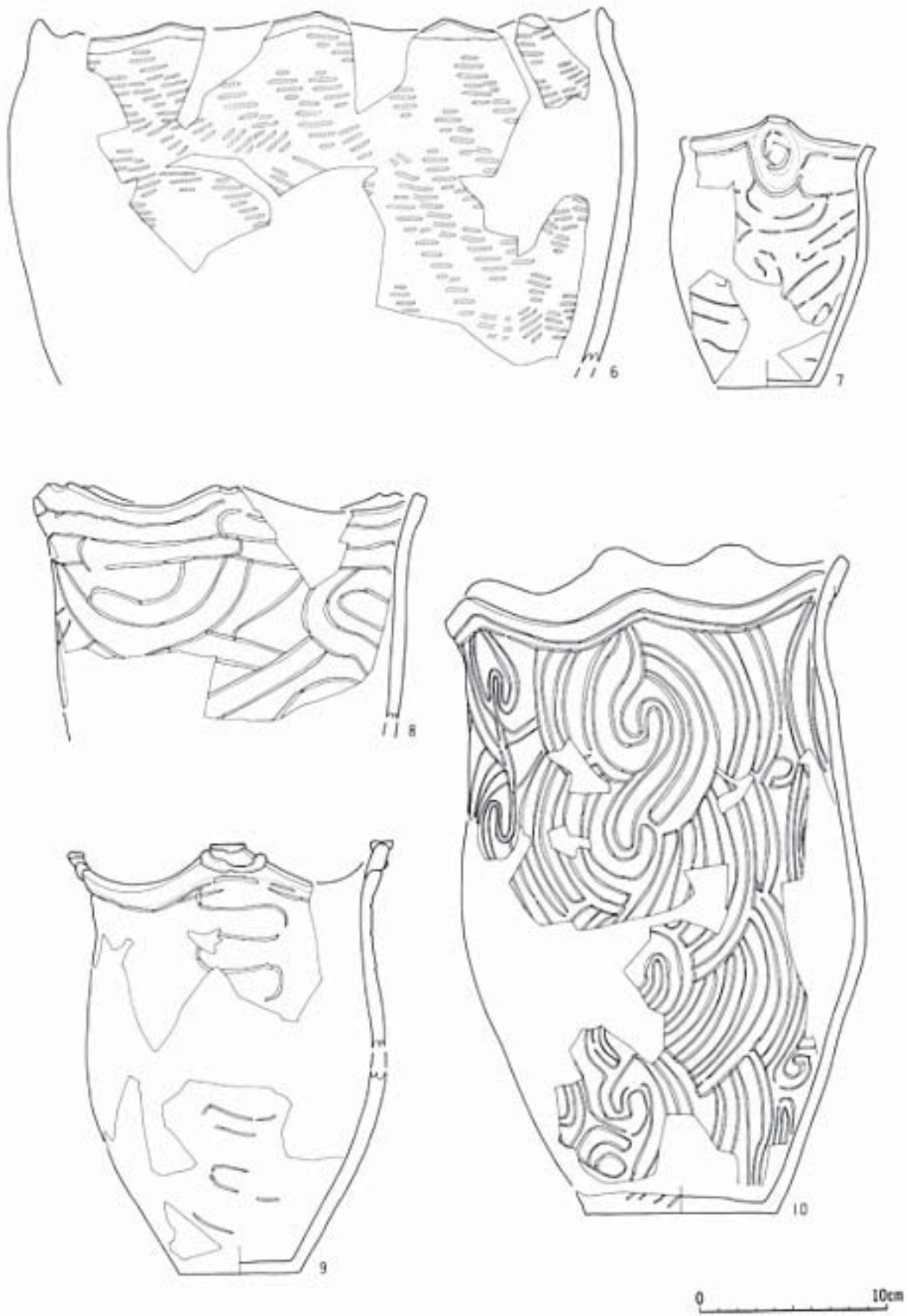
1類～3類以外のもの

深鉢形土器が主体を占めている。無文のもの(第7図2、第13図51～53) 縄文地のみなもの(第7図5、第8図6、第13図48・49) 条痕文が施されるもの(第13図51～53) 網目状撚糸文が施されるもの(第13図56～63) 格子目状沈線が施されるもの(第13図64～68) 櫛歯状沈線文が施されるもの(第9図15)などが出土している。1～3類のいずれかの時期に帰属できるものと考えられる。

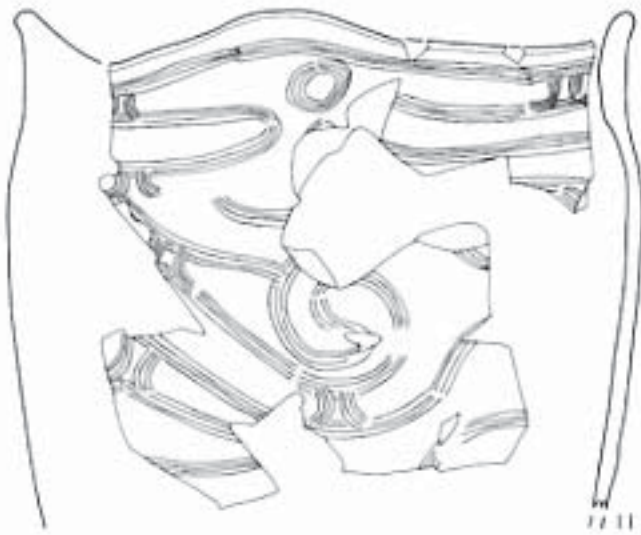
(児玉 大成)



第7図 第5号遺物集中ブロック出土土器(1)



第8図 第5号遺物集中ブロック出土土器(2)



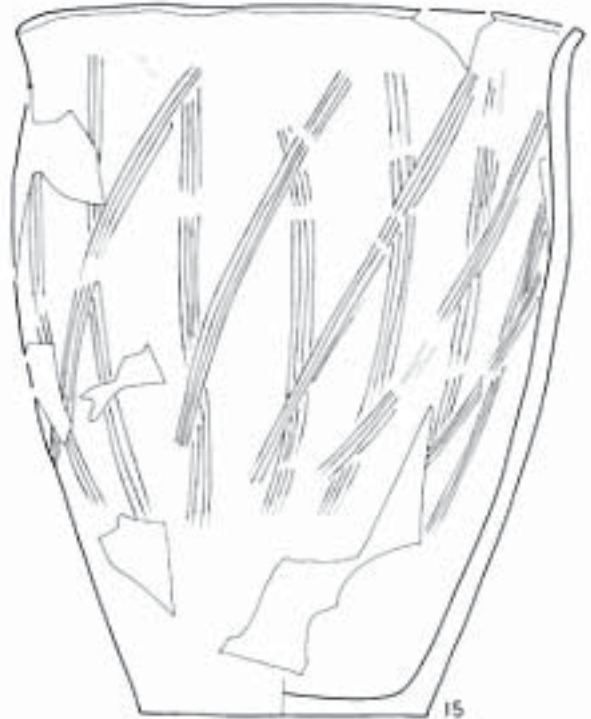
11



12



13

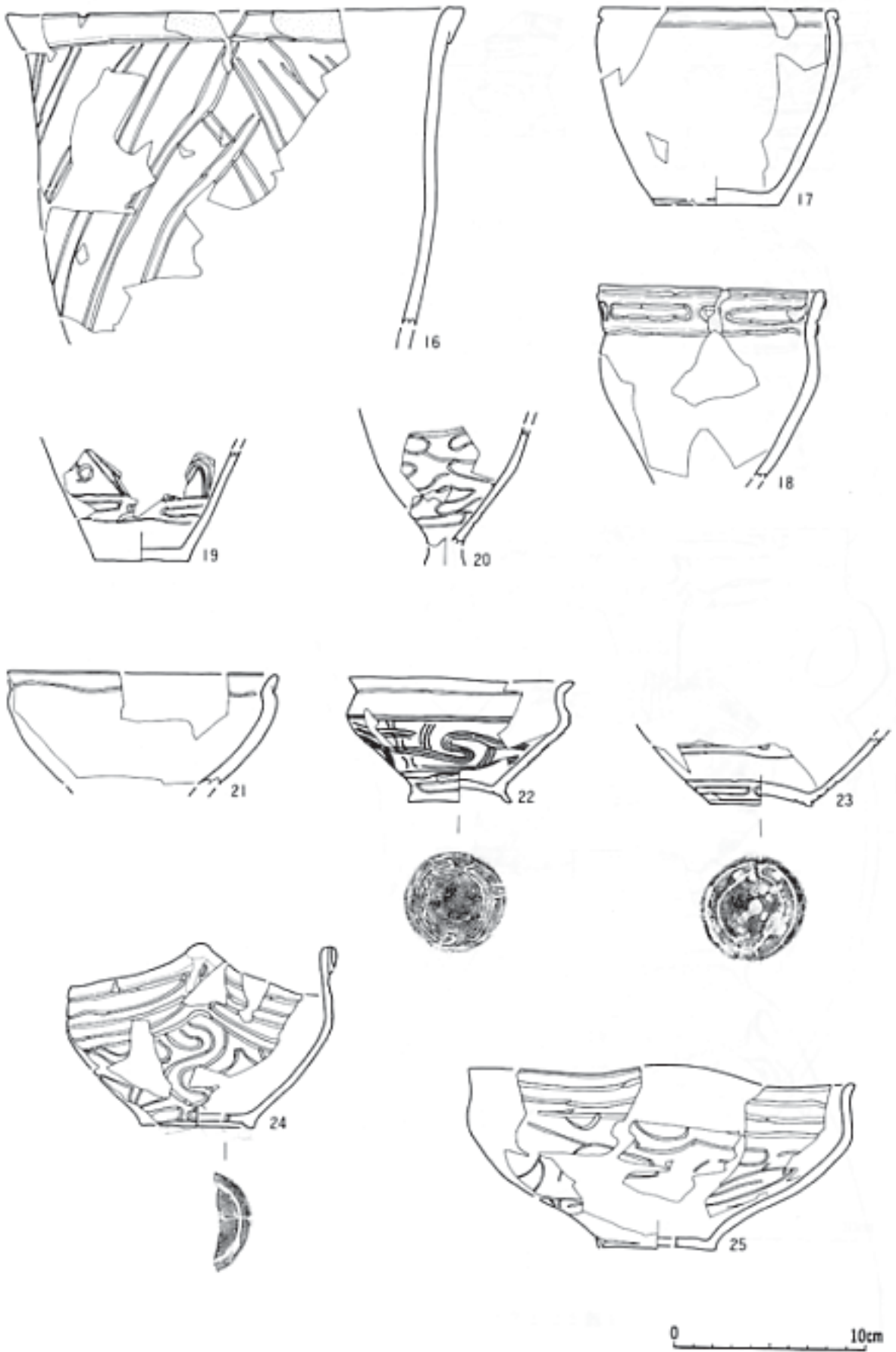


15

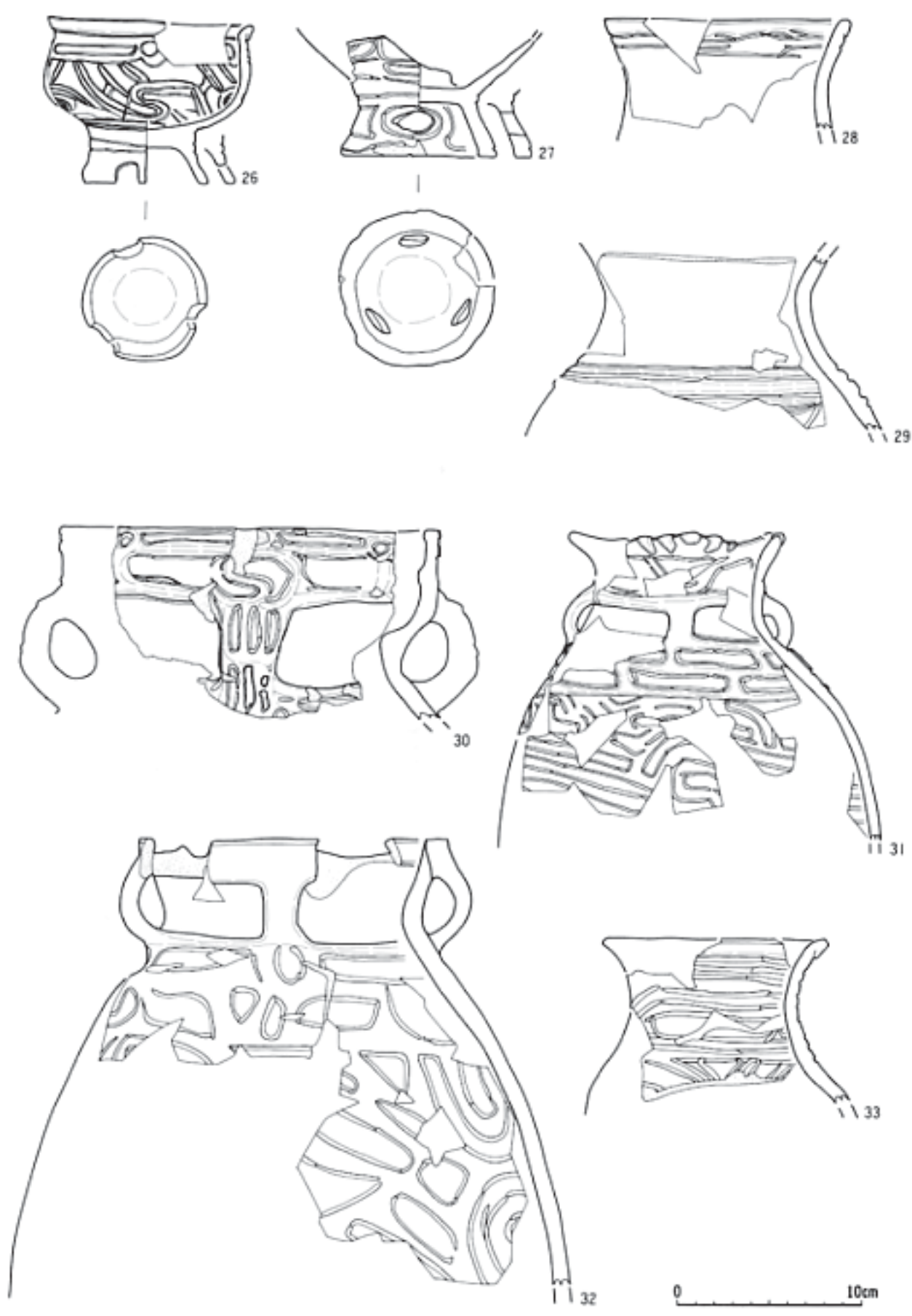


14

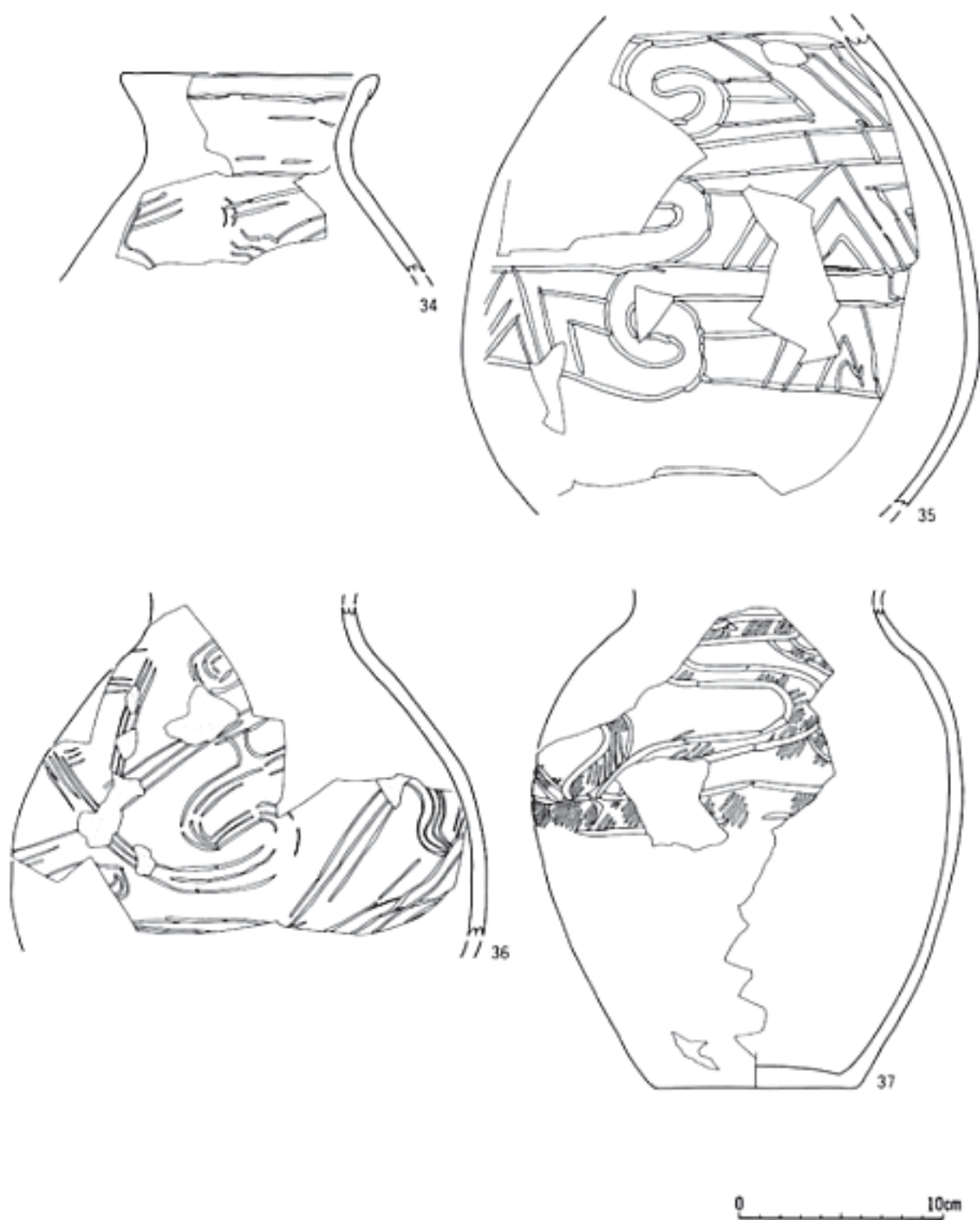
第9図 第5号遺物集中ブロック出土土器(3)



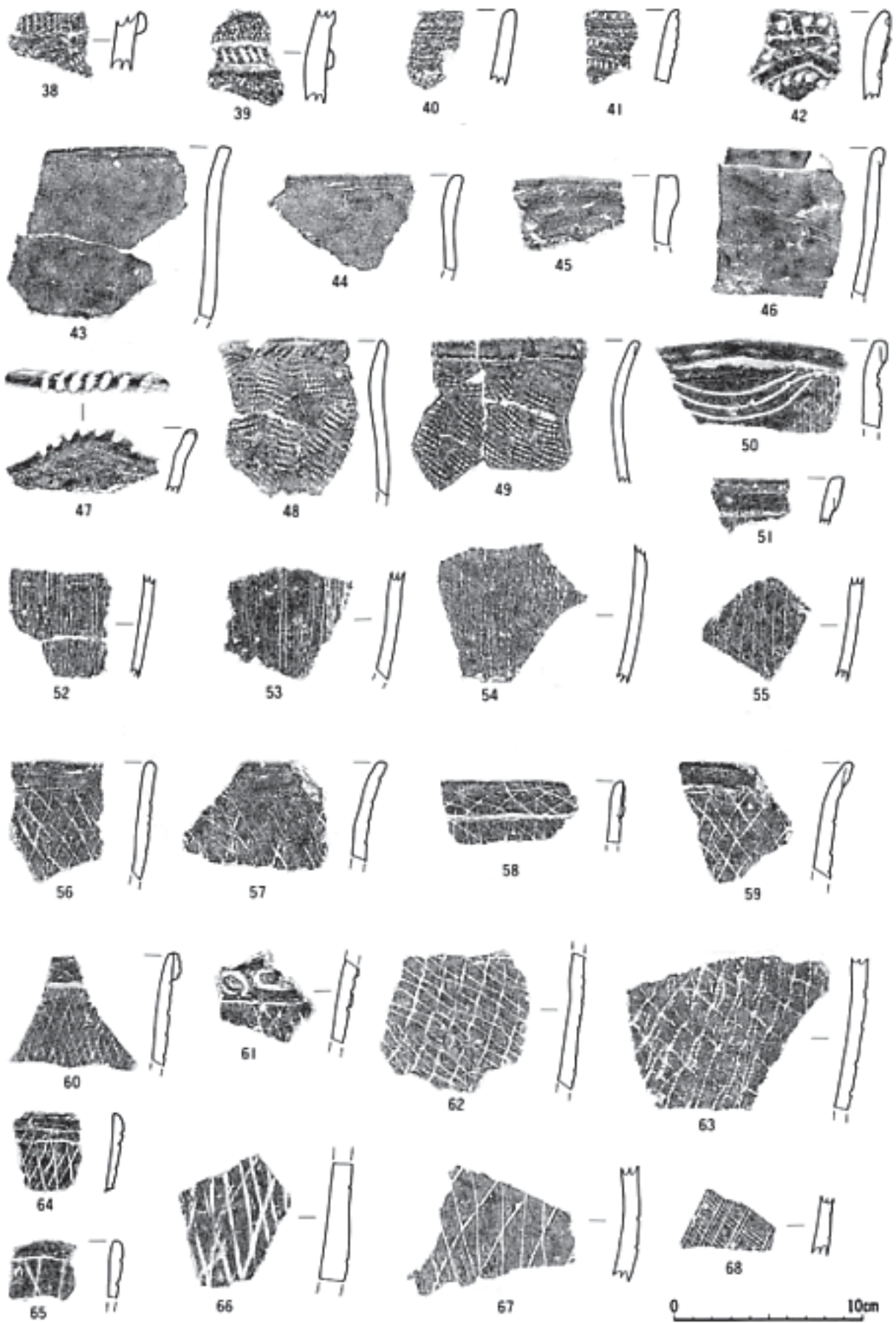
第10図 第5号遺物集中ブロック出土土器(4)



第11図 第5号遺物集中ブロック出土土器(5)



第12図 第5号遺物集中ブロック出土土器(6)



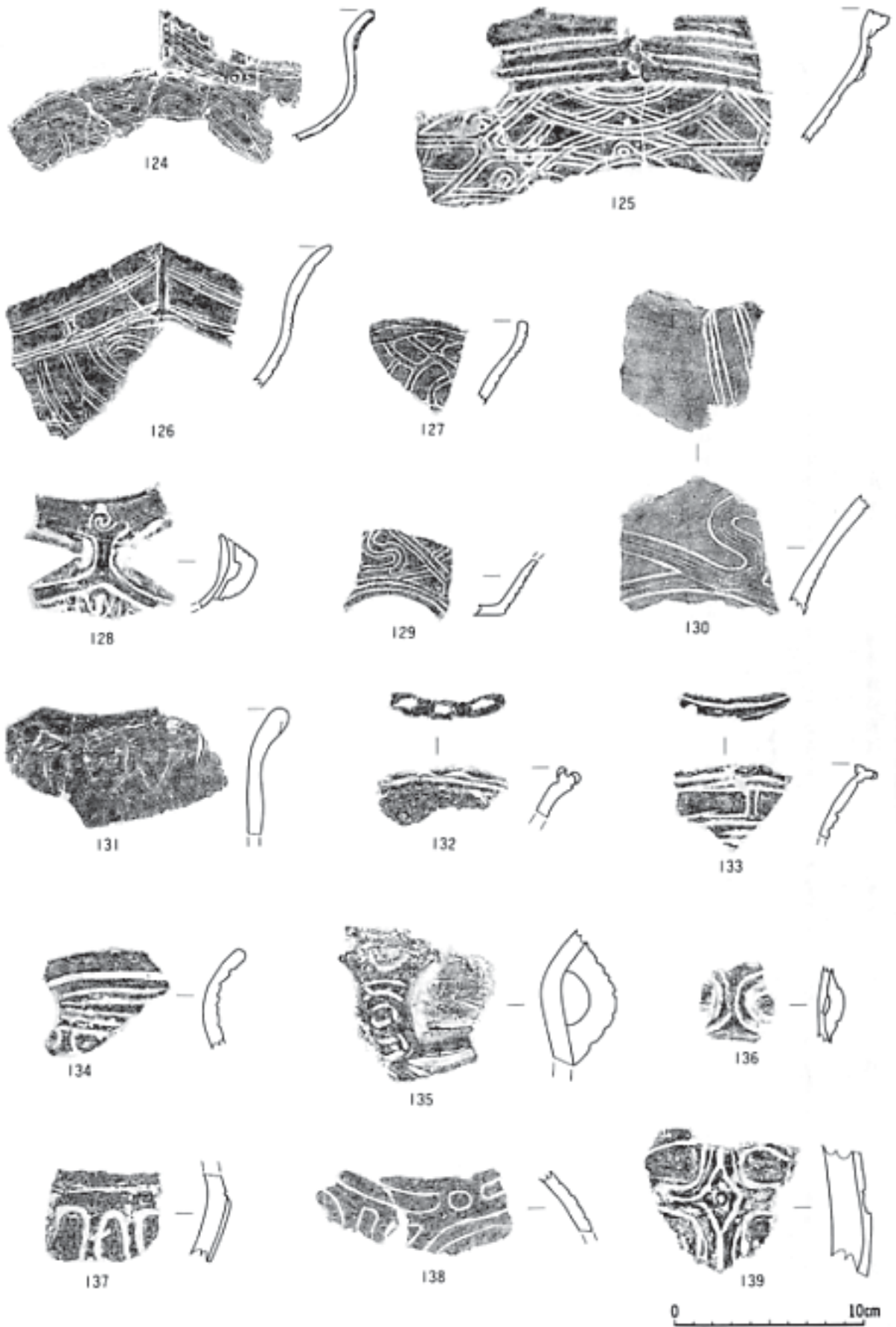
第13図 第5号遺物集中ブロック出土土器(7)



第 14 図 第 5 号遺物集中ブロック出土土器(8)



第15図 第5号遺物集中ブロック出土土器(9)



第16図 第5号遺物集中ブロック出土土器(10)

第4表 第5号遺物集中ブロック出土土器観察表(1)

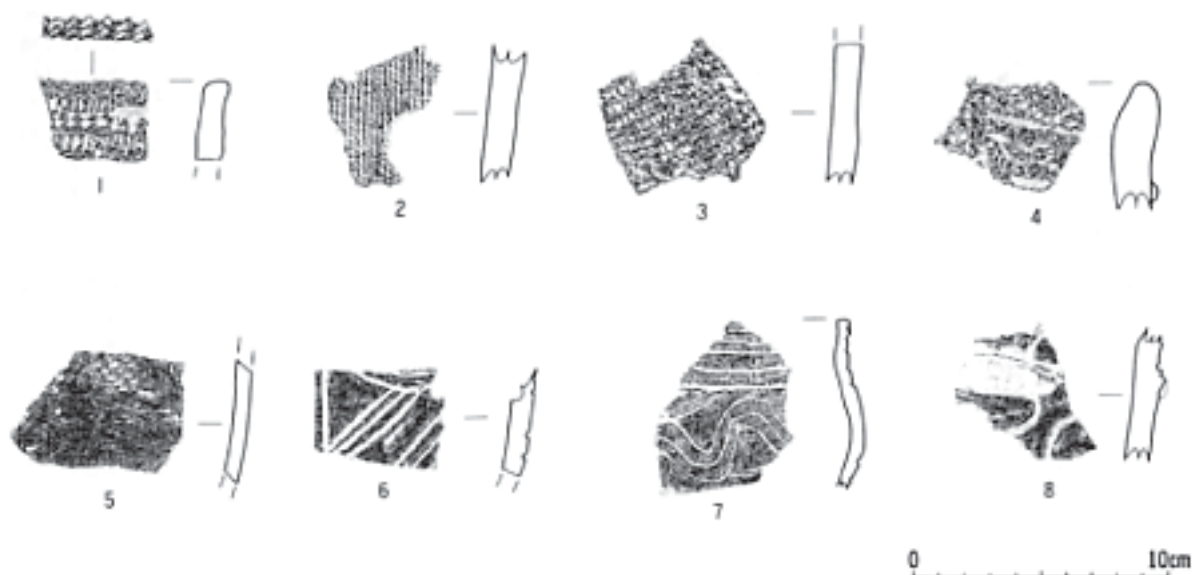
番号	出土地点	器形	文様	分類
1	S-19	深鉢	口縁隆帯、沈線（胸骨文）、LR縄文	第群
2	P-19	深鉢	無文	第群
3	T-19	深鉢	沈線（輪ゴム状）、充填・磨消縄文（RL縄文）	第群1類
4	T-20	深鉢	沈線（輪ゴム状）、充填・磨消縄文（LR縄文）	第群1類
5	S-20	深鉢	R縄文	第群
6	R-18	深鉢	LR縄文	第群
7	T-20	深鉢	沈線（輪ゴム状）	第群2類
8	R-18	深鉢	沈線（渦巻文）	第群2類
9	P-19	深鉢	沈線（蛇行）	第群2類
10	T-20	深鉢	沈線（渦巻文）	第群2類
11	S-19	深鉢	沈線（櫛歯状）	第群3類
12	T-20	深鉢	沈線（渦巻文）	第群3類
13	R-18	深鉢	沈線（入組文、櫛歯状）	第群3類
14	S-19	鉢	沈線（櫛歯状）	第群3類
15	S-19	深鉢	沈線（格子目文、櫛歯状）	第群
16	P-20	深鉢	沈線（斜行）	第群
17	P-20	鉢	沈線（平行）	第群
18	R-18	鉢	沈線（円形、楕円形文）	第群1類
19	S-18	鉢	沈線（円形、楕円形文、山形文）	第群2類
20	P-20	鉢	沈線（入組文）	第群2類
21	S-19	浅鉢	沈線（平行）	第群
22	S-18	浅鉢	沈線（平行、入組、楕円形文）、底部（沈線・輪ゴム状）	第群2類
23	S-19	浅鉢	沈線（円形、楕円形文）、底部（沈線・輪ゴム状）	第群2類
24	S-18	浅鉢	口縁部縦位穿孔、沈線（円形、楕円形、渦巻文）、底部（沈線）	第群2類
25	P-19	浅鉢	沈線	第群2類
26	S-19	台付浅鉢	沈線（円形、楕円形、渦巻文）	第群2類
27	S-19	台付浅鉢	沈線（長方形文）、台部（透かし）	第群2類
28	T-20	壺	沈線	第群
29	S-19	壺	沈線（平行）	第群
30	P-20	壺	沈線（円形、楕円形文）、橋状把手	第群2類
31	S-18	壺	沈線（入組、長方形文）、半肉彫の技法、橋状把手	第群2類
32	S-18	壺	沈線（円形、渦巻文、輪ゴム状）、橋状把手	第群2類
33	T-20	壺	沈線（平行、逆三角形）	第群
34	S-19	壺	沈線	第群
35	R-19	壺	沈線（渦巻、重山形文）	第群
36	S-19	壺	沈線（入組文）	第群2類
37	T-20	壺	沈線、充填・磨消縄文（LR縄文）	第群3類
38	T-20	深鉢	隆帯、L撚糸文、RL縄文	第群
39	T-20	深鉢	隆帯（刺突）、LR縄文	第群
40	R-20	深鉢	R撚糸文、刺突	第群
41	T-20	深鉢	L撚糸文	第群
42	R-18	深鉢	隆帯、刺突	第群
43	R-18	深鉢	無文	第群
44	Q-20	深鉢	無文	第群
45	Q-20	深鉢	無文	第群
46	R-18	深鉢	無文	第群
47	R-18	深鉢	無文、口唇部刻目	第群
48	R-18	深鉢	LR縄文	第群
49	R-18	深鉢	LR縄文	第群
50	R-19	深鉢	沈線（弧状文）、条痕文	第群
51	S-19	深鉢	条痕文	第群
52	T-20	深鉢	条痕文	第群
53	R-18	深鉢	条痕文	第群
54	P-20	深鉢	L撚糸文	第群
55	P-20	深鉢	L撚糸文	第群
56	T-20	深鉢	網目状撚糸文、L	第群

第5表 第5号遺物集中ブロック出土土器観察表(2)

番号	出土地点	器形	文様	分類
57	P-19	深鉢	口縁隆帯、沈線（胸骨文）、LR縄文	第群
58	S-19	深鉢	無文	第群
59	S-18	深鉢	沈線（輪ゴム状）、充填・磨消縄文（RL縄文）	第群
60	P-20	深鉢	沈線（輪ゴム状）、充填・磨消縄文（LR縄文）	第群
61	S-19	深鉢	R縄文	第群
62	R-19	深鉢	LR縄文	第群
63	T-20	深鉢	沈線（輪ゴム状）	第群
64	P-19	深鉢	沈線（渦巻文）	第群
65	R-18	深鉢	沈線（蛇行）	第群
66	Q-20	深鉢	沈線（渦巻文）	第群
67	Q-20	深鉢	沈線（櫛歯状）	第群
68	S-19	深鉢	沈線（渦巻文）	第群
69	P-19	深鉢	沈線（入組文、櫛歯状）	第群1類
70	S-18	深鉢	沈線（櫛歯状）	第群1類
71	S-19	深鉢	沈線（格子目文、櫛歯状）	第群1類
72	S-19	深鉢	沈線（斜行）	第群1類
73	T-19	深鉢	沈線（平行）	第群1類
74	S-18	深鉢	沈線（円形、楕円形文）	第群1類
75	R-19	深鉢	沈線（円形、楕円形文、山形文）	第群1類
76	T-20	深鉢	沈線（入組文）	第群1類
77	R-20	深鉢	沈線（平行）	第群1類
78	Q-20	深鉢	沈線（平行、入組、楕円形文）、底部（沈線・輪ゴム状）	第群1類
79	S-19	深鉢	沈線（円形、楕円形文）、底部（沈線・輪ゴム状）	第群1類
80	T-19	深鉢	口縁部縦位穿孔、沈線（円形、楕円形、渦巻文）、底部（沈線）	第群1類
81	S-18	深鉢	沈線	第群1類
82	S-19	深鉢	沈線（円形、楕円形、渦巻文）	第群1類
83	S-20	深鉢	沈線（長方形文）、台部（透かし）	第群1類
84	S-19	深鉢	沈線	第群1類
85	T-20	深鉢	沈線（平行）	第群1類
86	S-20	深鉢	沈線（円形、楕円形文）、橋状把手	第群1類
87	P-19	深鉢	沈線（入組、長方形文）、半肉彫の技法、橋状把手	第群1類
88	T-20	深鉢	沈線（円形、渦巻文、輪ゴム状）、橋状把手	第群2類
89	R-18	深鉢	沈線（平行、逆三角形）	第群2類
90	P-19	深鉢	沈線	第群2類
91	T-20	深鉢	沈線（渦巻、重山形文）	第群2類
92	S-19	深鉢	沈線（入組文）	第群2類
93	R-18	深鉢	沈線、充填・磨消縄文（LR縄文）	第群2類
94	T-20	深鉢	隆帯、L撚糸文、RL縄文	第群2類
95	S-19	鉢	隆帯（刺突）、LR縄文	第群2類
96	R-18	深鉢	R撚糸文、刺突	第群2類
97	R-18	深鉢	L撚糸文	第群2類
98	R-18	深鉢	隆帯、刺突	第群2類
99	P-19	深鉢	無文	第群2類
100	S-19	深鉢	無文	第群2類
101	R-20	深鉢	無文	第群2類
102	P-20	深鉢	無文	第群2類
103	P-19	深鉢	無文、口唇部刻目	第群2類
104	Q-20	深鉢	LR縄文	第群2類
105	R-88	深鉢	LR縄文	第群2類
106	R-20	深鉢	沈線（弧状文）、条痕文	第群2類
107	T-20	深鉢	条痕文	第群2類
108	R-19	深鉢	条痕文	第群2類
109	R-18	深鉢	条痕文	第群2類
110	S-19	深鉢	L撚糸文	第群2類
111	S-18	深鉢	L撚糸文	第群
112	R-19	深鉢	網目状撚糸文、L	第群

第6表 第5号遺物集中ブロック出土土器観察表(3)

番号	出土地点	器形	文様	分類
113	Q-19	深鉢	沈線、半肉彫の技法(刺突)	第群
114	R-19	深鉢	沈線、半肉彫の技法(刺突)	第群
115	Q-19	深鉢	沈線、半肉彫の技法(刺突)	第群
116	T-20	深鉢	沈線、刺突	第群
117	R-18	深鉢	沈線、充填・磨消縄文(RL)	第群3類
118	T-20	深鉢	沈線、充填・磨消縄文(LR)	第群3類
119	S-19	浅鉢	沈線(渦巻文)、隆帯、刺突	第群2類
120	P-19	浅鉢	沈線	第群2類
121	R-18	浅鉢	沈線	第群2類
122	R-19	浅鉢	沈線(円形文)、刺突	第群2類
123	T-20	浅鉢	沈線(輪ゴム状)	第群2類
124	S-19	浅鉢	沈線(渦巻文)、隆帯、刺突	第群2類
125	S-18	浅鉢	沈線(うろこ状文)、隆帯	第群2類
126	R-18	浅鉢	沈線、隆帯	第群2類
127	Q-20	浅鉢	沈線(うろこ状文)	第群2類
128	R-18	浅鉢	沈線、刺突、橋状把手、貫通孔	第群
129	P-20	浅鉢	沈線(渦巻文)	第群
130	R-18	浅鉢	沈線(渦巻文)、櫛歯状沈線、内面 沈線	第群3類
131	R-18	壺	無文	第群
132	S-19	壺	沈線、隆帯	第群
133	S-18	壺	沈線、隆帯	第群
134	T-20	壺	沈線	第群
135	S-20	壺	沈線、橋状把手	第群2類
136	S-19	壺	沈線、橋状把手	第群2類
137	S-18	壺	沈線(輪ゴム状)、隆帯	第群
138	R-18	壺	沈線(円形文、輪ゴム状)	第群
139	R-19	壺	沈線(菱形文)、隆帯	第群



第17図 遺構外出土遺物

第7表 遺構外出土土器観察表

番号	出土地点・層位	器形	文様	分類
1	-N-10・	深鉢	縄文圧痕、RL	第群
2	-O-4・	深鉢	撚糸回転文、L	第群
3	-M-8・	深鉢	LR縄文、陵絡文	第群
4	-L-10・	深鉢	隆帯、RL縄文	第群
5	-O-6・	深鉢	RL縄文	第群
6	-J-16・	深鉢	沈線、(斜行)	第群
7	-J-15・	鉢	沈線(S字文)	第群
8	-J-15・	壺	沈線	第群

2. 石器

発掘調査で出土した石器は石鏃7点、石錐6点、石匙5点、石篋9点、大石平型石篋4点、不定形石器798点、その他の剥片石器3点、石核45点、磨製石斧4点、ミニチュア磨製石斧1点、石皿3点、石錘1点、敲磨器類65点であり、総点数952点である。平成7年度報告（青森市教育委員会1996）では、A類石鏃、B類石槍、C類石錐、D類石匙、E類石篋、F類大石平型石篋、G類靴型石器、H類異形石器、I類スクレイパー類、J類ピエス・エスキーユ、K類石核、L類磨製石斧、M類ミニチュア磨製石斧、N類打製石斧、O類石皿、P類石錘、Q類敲磨器類に分類している。本報告書では、今年度の調査で出土しなかったB類、G類、H類、J類、N類を除き、平成7年度の報告の分類に従った。ただし、I類のスクレイパー類については、名称を不定形石器とし、平成7年度の報告とは異なる視点で細分を試みた。

ここでは、遺構内及び遺構外から出土した石器について併せて記述していく。

A類 石鏃（第18図1、2、第24図1～5）

左右対称またはそれに近い三角形を呈する薄手の石器である。

第5号遺物集中ブロック（以下、集中ブロック）から2点、遺構外から5点、総出土点数7点である。平成7年度の報告では、基部の形態からa～gの7つに分類しており、今年度の調査で出土した石鏃7点の内訳は、a類の凸基有茎のもの2点、b類の平基有茎のもの3点、d類の凹基無茎のもの1点、基部欠損により不明のもの1点であった。

集中ブロック出土の2点のうち第18図1は、凸基有茎鏃である。両面ともに細部調整は周縁部にのみ施されている。基部に、柄に装着するためにつけられたと考えられるアスファルト状の黒色物質が付着している。第18図2は基部を欠損しており、形状は不明である。

遺構外から出土した5点のうち、第24図1は凸基有茎鏃、第24図2、3、4は平基有茎鏃、第24図5は凹基無茎鏃であり、いずれも両面がていねいに調整されている。石質は、すべて珪質頁岩である。

C類 石錐（第18図3～7、第24図6）

錐部と考えられる部位をもち、その断面が三角形もしくは四角形を呈し、先端部に使用痕と思われる摩滅がみられるもの。

集中ブロックから5点、遺構外から1点、総出土点数6点である。

- | | |
|------------------|----|
| a つまみを作り出しているもの | 0点 |
| b 棒状のもの | 2点 |
| c 剥片の一部を利用しているもの | 4点 |

集中ブロック出土の第18図3はb、第18図4、5、6、7はcに分類した。遺構外出土の第24図6はbに分類した。第18図3と第24図6は、棒状を呈しており、両面が連続的な剥離によって調整されている。Cに分類した4点は、いずれも剥片の一部分を錐部に加工したものである。また錐部につづく両側縁が連続的な剥離によって調整されており、刃部として利用されていたと考えられる。石質はすべて珪質頁岩である。

D類 石匙（第18図8、第24図7、8）

つまみと考えられる部分をもち、両面または片面に調整が施され、側縁に刃部調整がみられる石器である。

集中ブロックから1点、遺構外から4点、総出土点数5点である。

- | | |
|--------------|----|
| a 縦型と考えられるもの | 3点 |
| b 横型と考えられるもの | 2点 |

集中ブロック出土の第18図8は縦型で、背面のつまみ部分には原礫面が残存する。細部調整は、背面はつまみ部分以外の周縁部全体に施されており、腹面は左側縁上部と下部にのみ細部調整が施されている。

遺構外出土の第24図7は、縦型で背面の両側縁に急斜度な刃部が作出されており、腹面は両側縁の一部にのみ細部調整が施されている。第24図8は、横型で、背面に急斜度な刃部が作出されており、つまみの上部、長軸を結ぶ一辺に原礫面を残している。腹面は、つまみ部分と、長軸を結ぶ原礫面が残存する一辺に細部調整が施されている。したがって、両側縁以外に、原礫面が残存する辺も使用していたことが推測される。石質はすべて珪質頁岩である。

E類 石篋（第19図9～14、第20図15、16、第25図9）

分銅形もしくはそれに近い形状で、長軸を結んだ一辺に両面又は片面調整の刃部をもつもので定形的なもの。

集中ブロックから8点、遺構外から1点、総出土点数9点である。

- | | |
|--------------------|----|
| a 分銅型で刃部が弧を描くもの | 3点 |
| b 分銅型で刃部が直線的なもの | 1点 |
| c 分銅型ではなく刃部が弧を描くもの | 2点 |
| d 分銅型ではなく刃部が直線的なもの | 2点 |
| その他 | 1点 |

集中ブロックから出土した8点のうち、第19図9、10、11はa、第19図12はb、第19図13はc、第19図14、第20図15はdに分類し、遺構外出土の第25図9はcに分類した。第19図9は細部調整が周縁部に限られ、背面、腹面ともに上端部と下端部に連続的な剥離によって、二つの刃部が作出されている。両者ともに両刃である。第19図10は、片刃で、背面全体に調整が施されており、腹面にはほとんど調整が施されていない。第19図11は、片刃である。背面は調整がほぼ両側縁に限られ、腹面は、周縁部全体に細部調整が施されている。bに分類した第19図12は、背面、腹面ともに全面に細部調整が施されており、片刃である。第19図13は、背面は左側縁部と下端部に細部調整が施され、右側縁部は原礫面の急傾斜をほぼそのまま利用している。腹面は折れの部分以外の周縁部全体に細部調整が施されている。片刃である。第19図14は、上部を欠損しており、背面は左側縁上部の原礫面を残存する部分以外に細部調整が施されている。腹面は、周縁部全体に細部調整が施されている。第20図15は、全体的に厚みがあり、背面、腹面ともに全体に細部調整が施されている。第20図16は、刃部を欠損しており、分類することができなかったが、残存部の形状から分銅型を呈するものと推定される。

遺構外出土の第25図9は、背面、腹面ともに周縁部に細部調整が施されている。背面の刃部付近を欠損しているが、残存する腹面の刃部の形状からcに分類した。石質はすべて珪質頁岩である。

F類 大石平型石篋（第20図17、第25図10）

大石平遺跡発掘調査報告書（青森県教育委員会1987）の中で仮称された石器で、つまみ状の頭部、あるいは柄と考えられる部分を有する小型の石器である。

集中ブロックから1点、遺構外から1点、総出土点数2点である。

集中ブロック出土の第20図17は、両側に抉りを入れることによってつまみ状の頭部が作出されており、背面に連続的な剥離によって急斜度な刃部が作出されている。腹面のつまみ部分には、一枚の剥離によつ

て調整がみられ、柄のようなものに装着するためのものと考えられる。

遺構外から出土した第25図10は、両側に抉りを入れることによってつまみが作出されており、裏面は、つまみ部分以外には細部調整が施されていない。背面には連続的な調整によって急斜度な刃部が作出されている。背面中央部に原礫面を残していることから、原礫の湾曲を利用して、急斜度な刃部を作出したのと考えられる。石質はすべて珪質頁岩である。

I類 不定形石器（第20図18～21、第21図22～25、第25図11～14、第26図15～18）

本遺跡から出土した石器の中でもっとも出土点数の多い石器である。平成7年度の報告では、刃部調整の形状から、a 刃部の先端が鋭角のもの、b 刃部の先端が丸みを帯びるもの、c 刃部が直線的なもの、d その他の4つに分類されているが、本項では、刃部の角度と調整の範囲に着目し、まず、連続的な剥離が一侧縁の長さの1/2以上に施されているものと、1/2以下に施されているものに大別し、さらに前者を急斜度な刃部が作出されているものと、緩斜度な刃部が作出されているものに細別した。

詳しい分類基準や方法については、考察を参照されたい。

類 連続的な剥離が一侧縁の長さの1/2以上にわたって施されているもの

a 急斜度な刃部が作出されているもの 115点

b 緩斜度な刃部が作出されているもの 202点

c 急斜度な刃部と緩斜度な刃部の両方を持ち合わせているもの 11点

類 連続的な調整が一侧縁の1/2以下のもの 417点

集中ブロックから、aが68点、bが121点、cが9点、dが251点出土した。遺構外から、aが47点、bが81点、cが2点、dが166点出土した。総出土点数745点である。

集中ブロック出土の第20図18、19はaに分類した。18は、背面には連続的な剥離によって、急斜度な刃部が作出されているが、腹面にはほとんど細部調整が施されていない。19は背面の一侧縁に連続的な剥離によって急斜度な刃部が作出されており、それ以外の部分は原礫面である。腹面にはほとんど細部調整が施されていない。第20図20、21はbに分類した。20は、両面の一侧縁に連続的な剥離がみられ、緩斜度な刃部が作出されている。21は、背面には、全く細部調整が施されておらず、腹面の一侧縁に連続的な剥離によって緩斜度な刃部が作出されている。第21図22、23はcに分類した。22は背面の右側縁部に連続的な剥離によって急斜度な刃部が作出され、左側縁下部に連続的な剥離によって緩斜度な刃部が作出されている。腹面には全く細部調整が施されていない。23は、台形状を呈しており、背面の右側縁部に連続的な剥離によって緩斜度な刃部が作出され、腹面の刃部に対応する部分には使用によって生じたと考えられる微細剥離がみられる。腹面の下底部には連続的な剥離によって、急斜度な刃部が作出されている。背面の刃部と対応する部分に使用によって生じたと考えられる微細剥離がみられる。第21図24、25はdに分類した。24は、背面の両側縁の一部分に細部調整がみられる。腹面には、背面の刃部と対応する部分に微細剥離がみられる。25は、背面には細部調整が施されておらず、腹面の側縁の一部分に細部調整がみられる。

遺構外から出土した第25図11、12はaに分類した。11は、背面の周縁に急斜度な刃部を作出している。素材剥片の急斜度な側面を利用したものと考えられる。12は、ほぼ台形状を呈しており、腹面の下底部に連続的な剥離によって急斜度な刃部が作出されている。背面にはほとんど細部調整が施されていない。第25図13、14はbに分類した。13は、縦長の剥片で、背面の一侧縁に連続的な剥離によって、緩斜度な刃部が作出されている。14は、半円に近い形状を呈しており、背面の左側縁部に連続的な剥離によって、緩斜度な刃部が作出されている。腹面にはほとんど細部調整が施されていない。第26図15、

16は cに分類した。15と16は、背面の二側縁に連続的な剥離によって、一方の側縁に緩斜度な刃部、もう一方の側縁に急斜度な刃部が作出されている。腹面には、細部調整が施されていない。第26図17、18はに分類した。17は、二側縁に部分的に細部調整が施され、その二側縁には、使用によって生じたと考えられる微細剥離がみられる。18は、腹面の一側縁に部分的な細部調整が施されている。素材剥片の急傾斜な側縁に部分的な剥離が施され、急斜度な刃部が作出されている。もう一方の側縁には部分的に剥離が施され、鋸歯状の刃部が作出されている。石質はすべて珪質頁岩である。

その他の剥片石器（第21図26、27、第22図28）

何らかの形をもとめて製作され、どの類型にも属しない石器である。不定形石器とは区別し、その他の剥片石器とした。

集中ブロックから3点が出土した。

第21図26は、背面は周縁部全体に細部調整が施され、腹面はつまみ部分にのみ細部調整が施されている。背面、腹面ともに連続的な剥離によってつまみ状の基部が作出され、その基部の両側縁は鋭角な刃部となっている。つまみ部分以外の周縁部には、連続的な剥離によって、急斜度な刃部が作出されている。背面の右側縁部は、つまみ部分の細部調整が長軸の約2/3まで施され、それが外側にやや湾曲し、急斜度な刃部と接する部分が尖っている。石質は珪質頁岩である。第21図27は、背面は連続的な剥離によって、細部調整が施されており、挟りをいれることによって石匙のつまみに似た部分を作成している。

腹面は、細部調整がほとんど施されていない。石質は、珪質頁岩である。第22図28は、背面は原礫面を残しており、細部調整は一側縁と下端部に限られる。腹面には細部調整が施されていない。層理が二カ所みられる。石質はすべて珪質頁岩である。

第21図26は、「つまみ状の頭部、あるいは柄と考えられる部分を有する」という点で大石平型石籠に類似しているが、定型的な石籠に比べて小型の石器であるという点、背面の右側縁部が尖っている点を考慮するとさらに検討が必要であろう。第21図27は、つまみ部分を考慮すると石匙の類型にあてはめることも可能であると考えられるが、ほぼ同じくらいの大きさの石匙に比べると全体的に厚みがあり、意図的につまみを作成したというよりも、細部調整の結果による偶発的なものと考えられることから、石匙には分類しなかった。第22図28は層理が二カ所みられることから、調整が困難であったことが予想され、何らかの形を求めたが、製作途中で断念したものと考えられる。

K類 石核

剥片を採取した後の残核とみられるもの。

集中ブロック出土のもの27点、遺構外出土のもの18点、総出土点数45点である。

石質については集中ブロックから出土した27点のうち、流紋岩が1点のほかは、すべて珪質頁岩である。遺構外から出土した18点のうち、頁岩は4点、珪質頁岩は14点である。

L類 磨製石斧（第22図29～31、第26図19）

分銅型もしくはそれに近い形状を呈し、全面もしくはほぼ全面に磨き調整が施されているもの。

集中ブロックから3点、遺構外から1点、総出土点数4点である。4点すべて欠損品である。集中ブロック出土の第22図29は、刃部を欠損している。側面に敲打痕がみられることから、折れた磨製石斧を敲石として使用されたものと考えられる。石質は安山岩である。30は刃部を欠損しており、上端部と、片面に敲打痕がみられる。石質は閃緑岩である。31は、刃部の一部分と基部の片面を欠損している。刃部の欠損は使用の結果によるものと考えられる。片面に敲打による凹みがみられる。石質は粘板岩である。

遺構外出土の第26図19は、基部を欠損している。刃部と折れ面の周縁に擦り痕がみられる。石質は安山岩である。

M類 ミニチュア磨製石斧（第22図32）

磨製石斧に比べて著しく小型のもので、調整方法は磨製石斧とほぼ同様のもの。

集中ブロックから1点が出土した。

第22図32は刃部の一部分と、基部を欠損している。石質は輝緑凝灰岩である。

（設楽 政健）

O類 石皿（第23図33、第27図20、21）

機能面と考えられる皿状の面を持ち、その縁に土手状の隆起帯を作出し、器形全体を敲打や擦りによって調整しているもの。

集中ブロック出土のもの1点、遺構外出土のもの2点、総出土点数3点である。

集中ブロックから出土した第23図33は、欠損品であり、機能面が二面存在する。側面部にも擦りが行われている。石質は、凝灰岩である。

遺構外出土の第27図20は、欠損品である。片面を機能面としており、もう一方の面には、破片中心部付近に「クボミ」がある。石皿が破片化の後、「クボミ」ができたものと推定される為、破損もしくは破碎ののち凹石として転用したものと考えられる。石質は凝灰岩である。

また、21は、R - 19グリッド、S - 19グリッドから出土した接合資料であり、5破片からなる。片面を機能面としており、縁の部分には、隆起帯が巡っている。破片は、ほとんどが層理面にそった形で割れているが、層理面に対して直行して割れている部分もある。石質は凝灰岩である。

P類 石錘（第23図34）

扁平で丸い自然礫の対をなす両辺を敲打もしくは打ち欠きにより抉りを作成しているもの。

集中ブロックから1点出土した。第23図34は、対をなす両辺を打ち欠きにより抉りを作成している。石質は、昨年度までの調査から出土している全ての石錘の石質と同様に安山岩である。

Q類 敲磨器類（第23図35～45、第28図22～32）

自然礫の稜または面に敲打痕・磨痕・クボミ等の加工痕が見られるもの。

集中ブロック出土のもの45点、遺構外出土のもの20点、総出土点数65点である。石質は、昨年度までの調査で出土した敲磨器類同様安山岩、石英安山岩が主体を占めている。

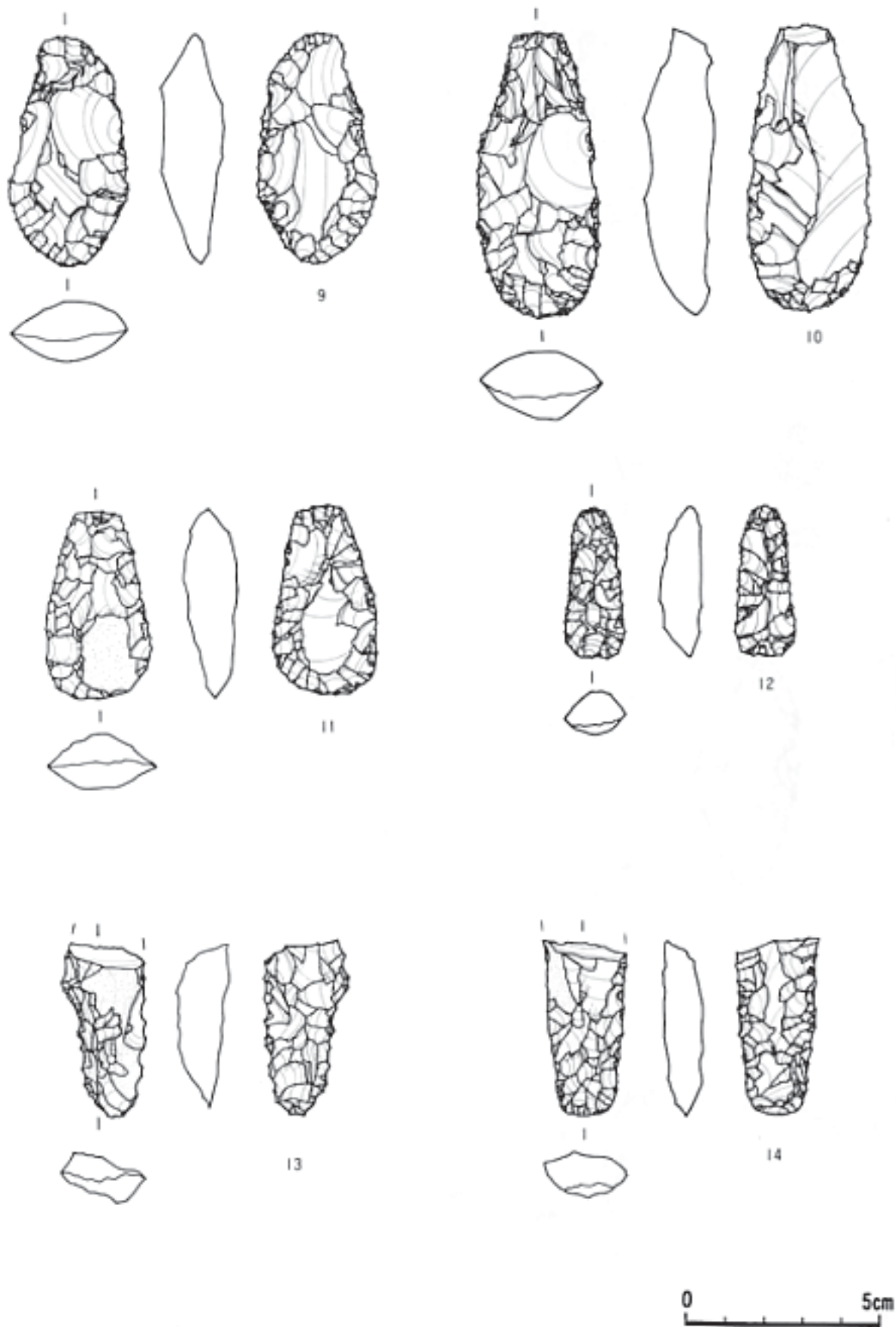
集中ブロック出土のもの45点の内訳は、「クボミ」が見られるもの6点（第23図35・36・37ほか）、「クボミ・磨痕」が見られるもの3点（第23図38・39）、「クボミ・敲打痕」が見られるもの6点（第23図40ほか）、「磨痕」が見られるもの5点（第23図41・42ほか）、「敲打痕」が見られるもの16点（第23図43ほか）、「磨痕・敲打痕」が見られるもの9点（第23図44・45ほか）である。

また、遺構外出土の20点の内訳は、「クボミ」が見られるもの3点（第28図22・23ほか）、「クボミ・磨痕」が見られるもの3点（第28図24・25・26）、「クボミ・敲打痕」が見られるもの2点（第28図27ほか）、「クボミ・磨痕・敲打痕」が見られるもの3点（第28図28・29ほか）、「磨痕」が見られるもの2点（第28図30ほか）、「敲打痕」が見られるもの1点（第28図31）、「磨痕・敲打痕」が見られるもの6点（第28図32ほか）である。

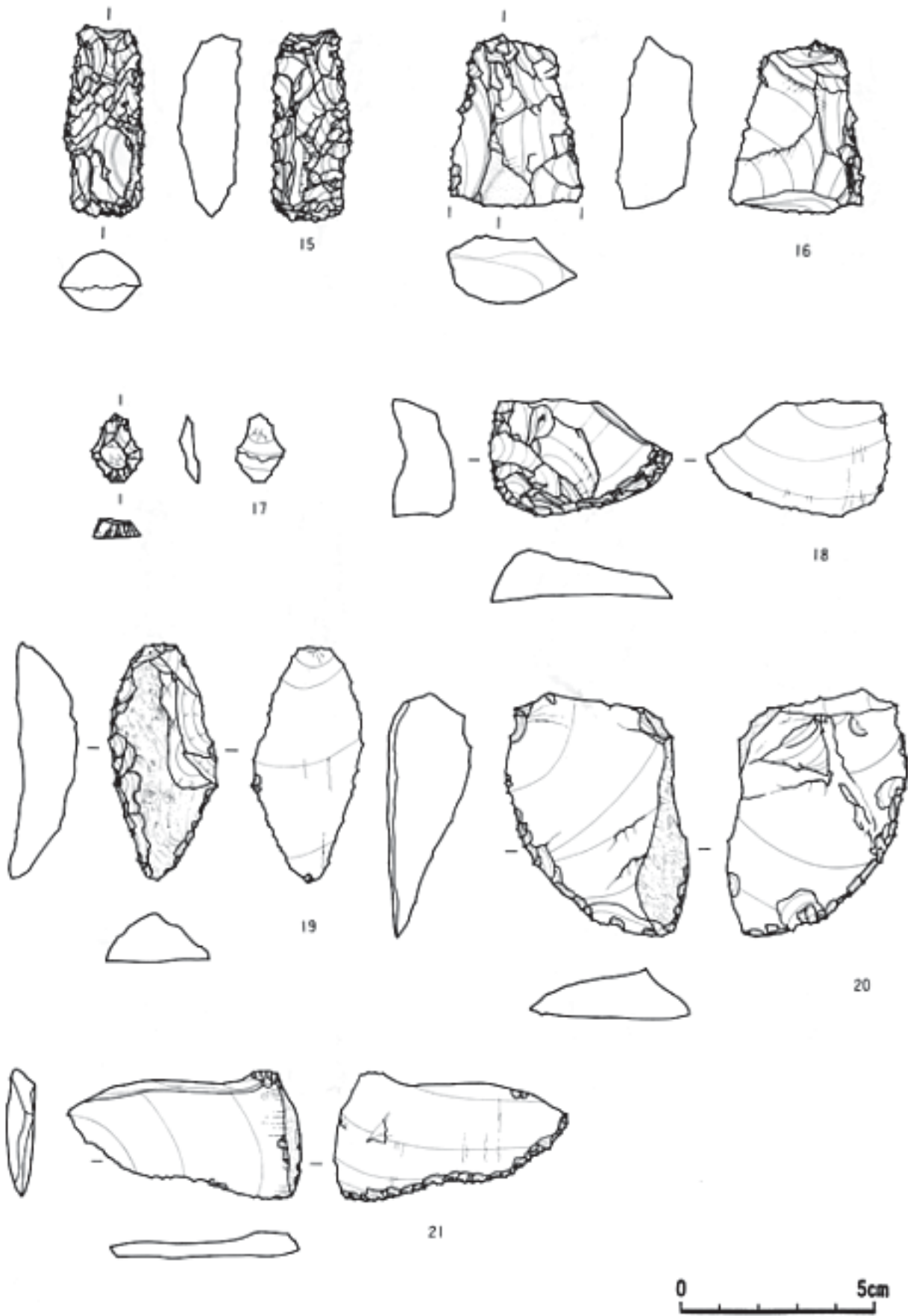
（木村 淳一）



第18図 第5号遺物集中ブロック出土石器(1)



第19図 第5号遺物集中ブロック出土石器(2)



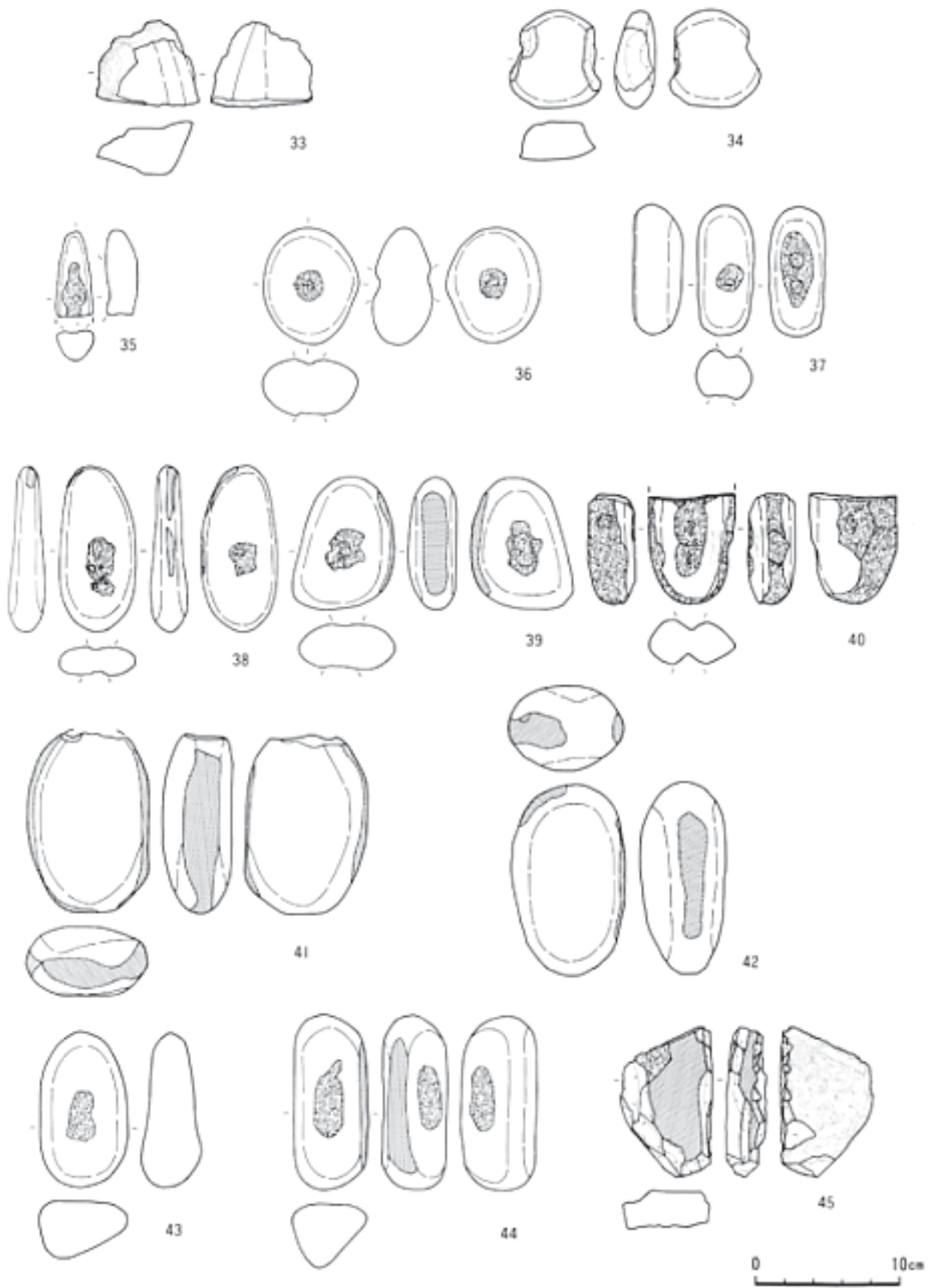
第20図 第5号遺物集中ブロック出土石器(3)



第21図 第5号遺物集中ブロック出土石器(4)



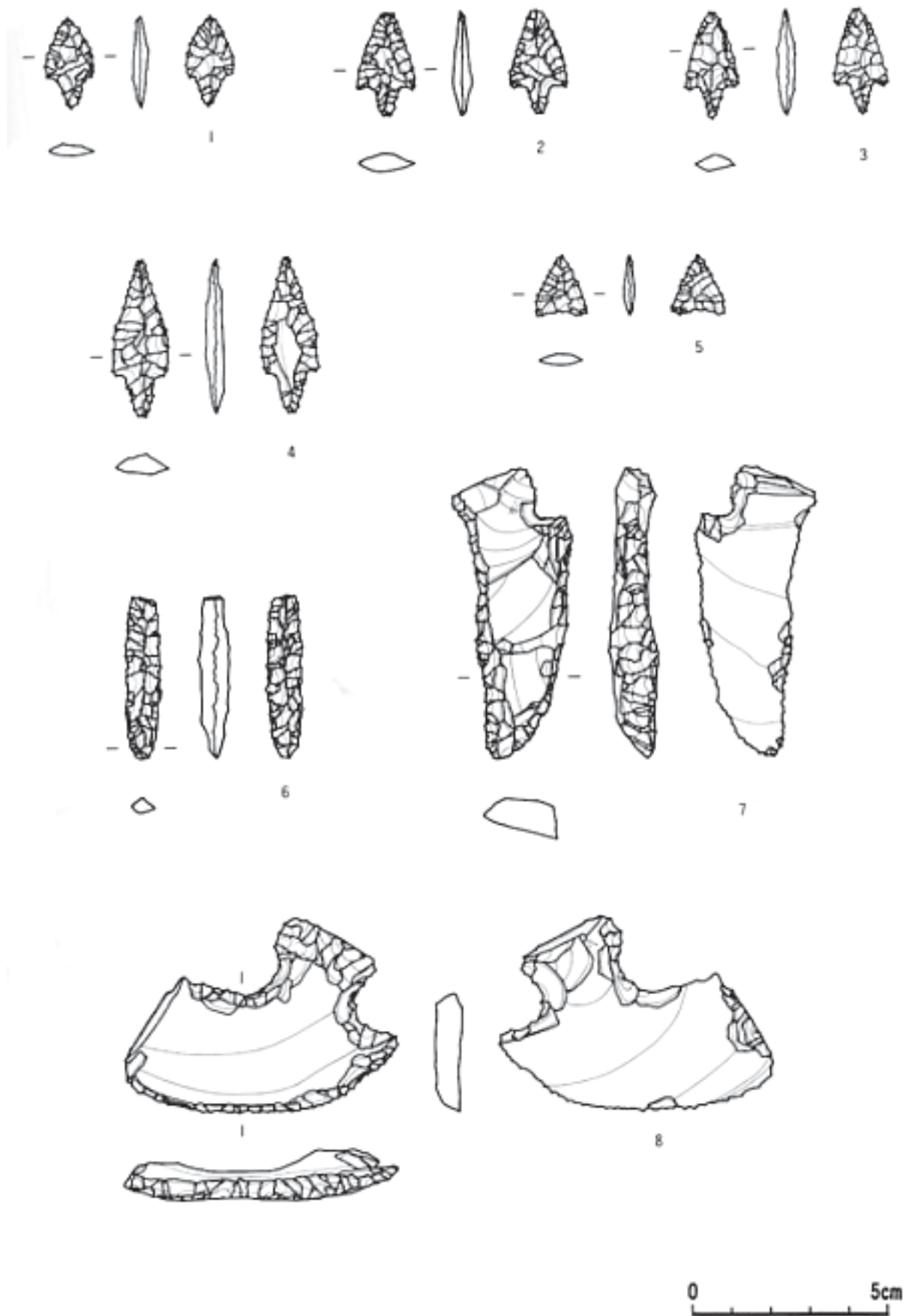
第22図 第5号遺物集中ブロック出土石器(5)



第23図 第5号遺物集中ブロック出土石器(6)

第8表 第5号遺物集中ブロック出土石器観察表

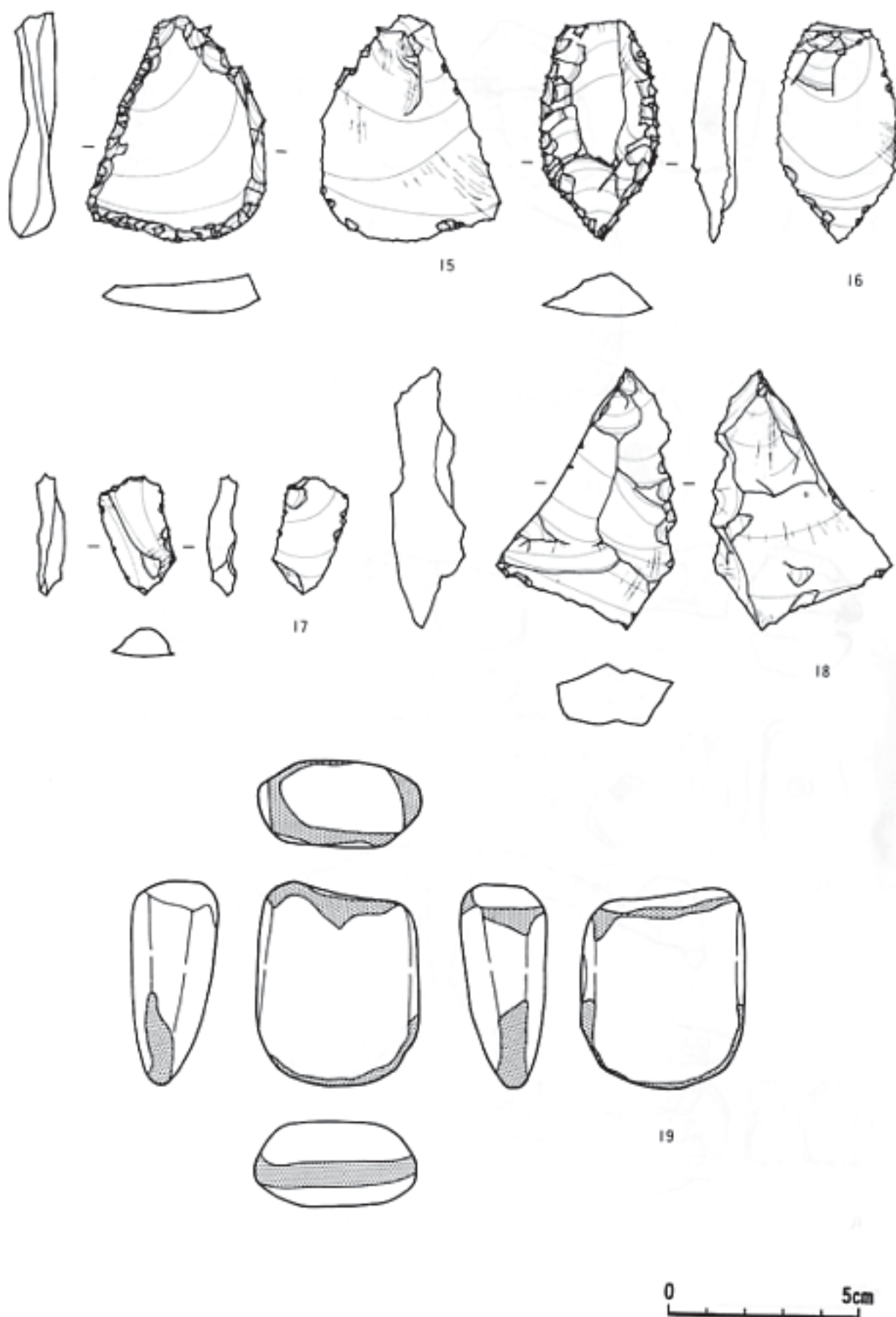
番号	出土地点	最大計測値				石質	分類	備考
		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
1	S-18	48.0	16.0	5.5	3.7	珪	石鏃	凹有り、ピッチ
2	"	21.5	15.0	4.0	1.1	"	"	欠損品
3	R-19	47.0	11.0	8.0	3.6	"	石錐	
4	S-19	41.0	42.0	21.0	17.0	"	"	
5	P-19	44.0	17.0	11.0	5.5	"	"	
6	T-20	43.0	49.0	13.0	12.5	"	"	
7	S-20	38.0	33.0	11.0	7.9	"	"	
8	T-20	39.0	25.5	5.5	4.4	"	石匙	縦型
9	R-19	60.0	31.0	16.0	24.2	"	石篋	両刃
10	S-19	74.0	32.0	18.0	40.6	"	"	片刃
11	S-20	49.5	27.0	14.0	17.9	"	"	"
12	Q-20	39.5	15.5	10.5	6.4	"	"	"
13	R-18	45.5	22.0	13.5	13.6	"	"	"
14	"	(46.0)	(21.5)	(9.5)	(11.2)	"	"	"
15	S-19	51.5	21.0	16.0	18.9	"	"	両刃
16	T-20	(46.0)	(35.5)	(20.0)	(28.2)	"	"	
17	S-18	18.0	12.5	5.0	0.9	"	大石平	
18	P-20	(31.0)	(48.5)	16.5	(23.3)	"	不定形	a
19	T-20	63.0	29.0	16.0	19.7	"	"	"
20	R-18	66.0	48.5	22.0	49.6	"	"	b
21	P-19	34.0	60.0	7.0	13.5	"	"	"
22	R-18	61.5	48.0	14.0	38.3	"	"	c
23	Q-19	39.0	46.0	10.0	21.2	"	"	"
24	S-19	55.0	45.0	10.0	25.2	"	"	
25	T-20	67.0	47.0	12.5	33.1	"	"	"
26	Q-19	54.0	32.0	12.0	10.2	"	その他	
27	T-19	36.0	17.0	9.0	3.7	"	"	
28	P-19	46.0	24.0	14.5	9.3	"	"	
29	S-20	77.0	42.0	31.5	139.7	安	磨斧	敲打痕あり
30	T-19	70.0	40.5	32.0	138.7	閃緑岩	"	"
31	S-18	83.0	33.0	15.5	53.6	粘板岩	"	敲打による凹み
32	S-19	(45.0)	18.0	11.0	15.4	輝緑	ニニ磨斧	
33	T-19	(61.0)	(71.0)	42.0	152.0	凝	石皿	
34	R-19	69.5	63.5	27.0	176.0	安	石錘	
35	T-20	(60.0)	(26.0)	22.0	44.0	"	敲磨	クボミ
36	T-20	83.0	67.0	40.0	264.0	"	"	クボミ
37	R-19	93.0	41.0	35.0	134.0	凝	"	クボミ
38	Q-19	118.0	54.0	25.0	174.0	"	"	クボミ・スリ
39	S-18	93.5	72.0	33.5	342.0	安	"	クボミ・スリ
40	Q-20	(78.0)	(61.0)	33.0	168.0	凝	"	クボミ・タタキ
41	T-20	(127.0)	85.0	49.0	742.0	安	"	スリ
42	R-20	135.0	80.0	57.5	812.0	"	"	スリ
43	P-20	110.0	62.0	41.0	396.0	"	"	タタキ
44	R-19	124.0	53.0	45.0	474.0	"	"	タタキ・スリ
45	T-18	(106.0)	(65.0)	28.0	232.0	緑凝	"	タタキ・スリ



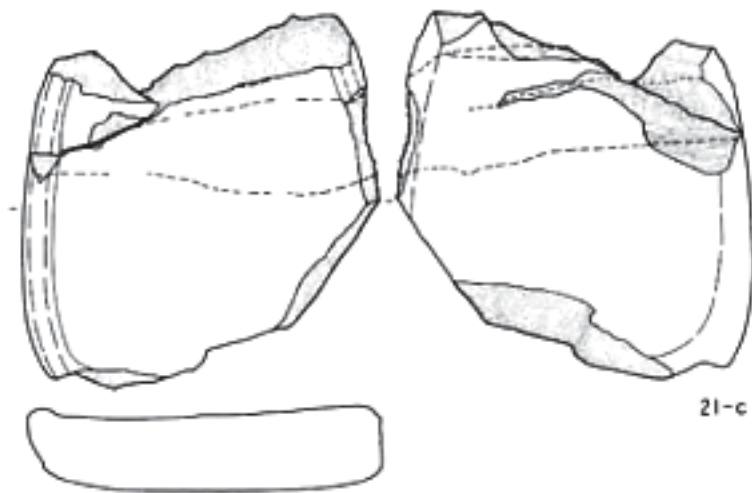
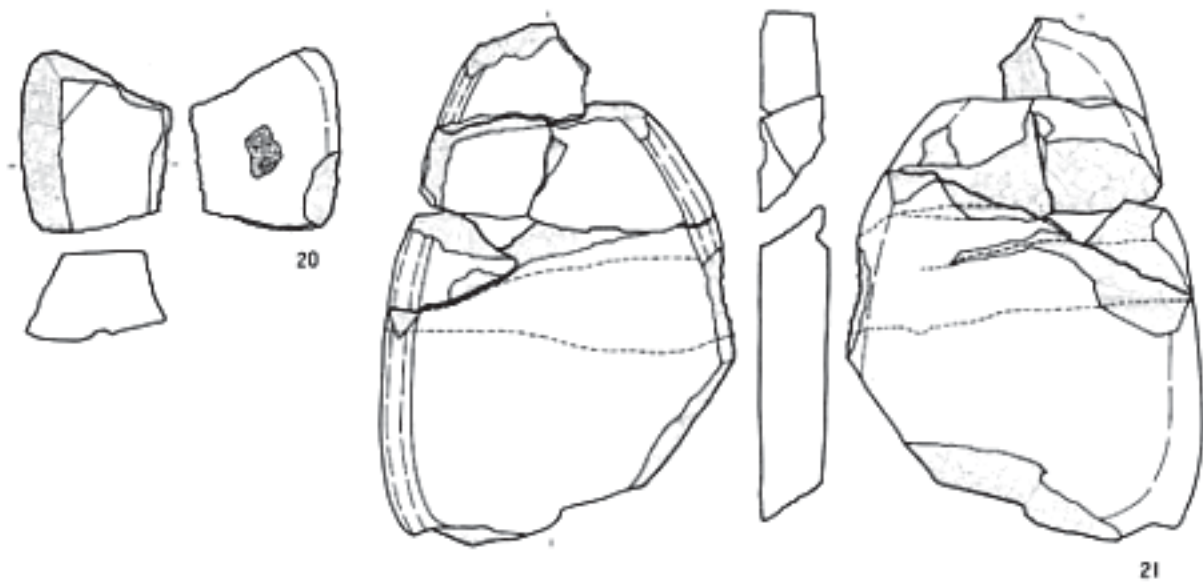
第24図 遺構外出土石器(1)



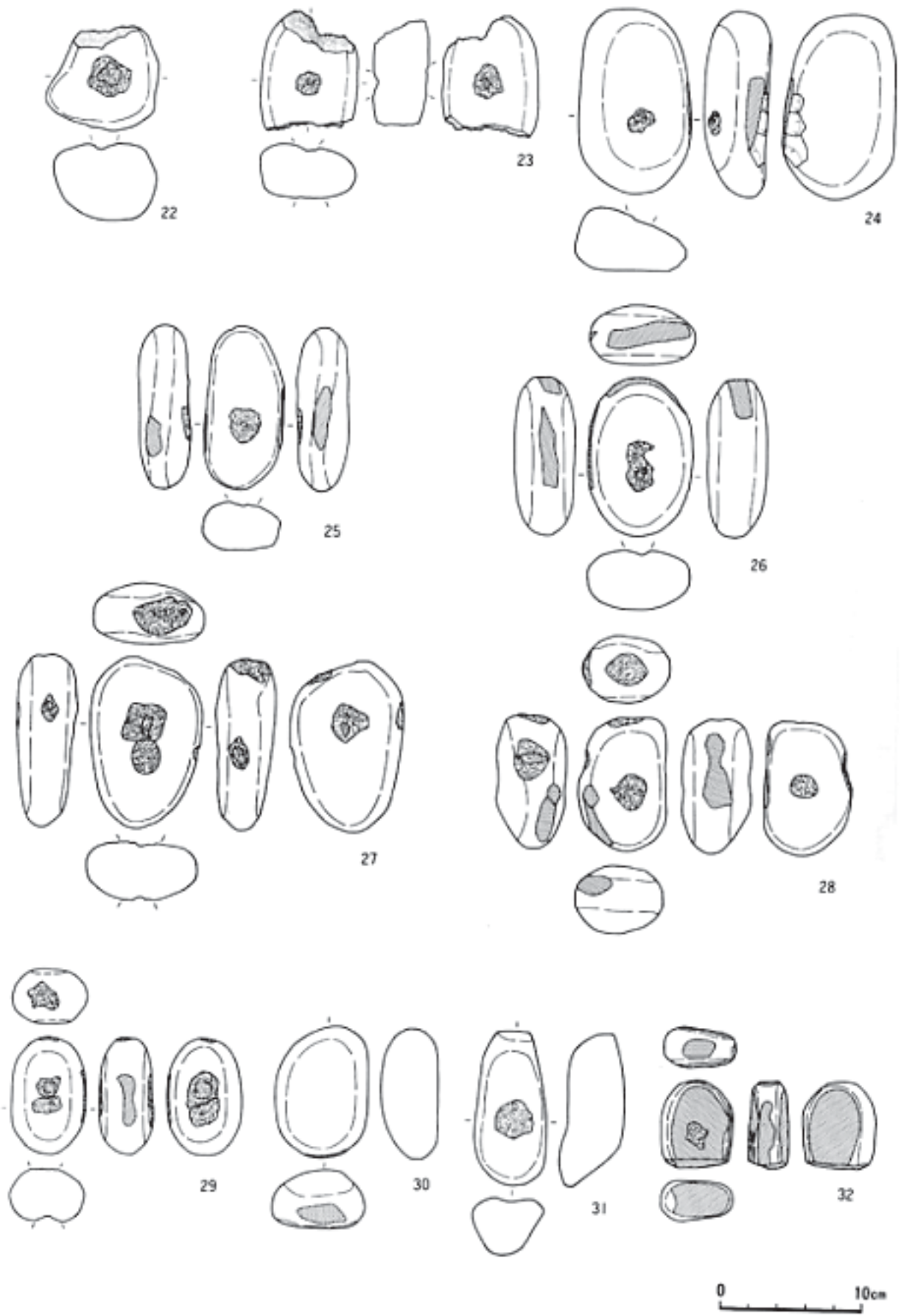
第 25 図 遺構外出土石器(2)



第 26 圖 遺構外出土石器 (3)



第 27 図 遺構外出土石器(4)



第 28 図 遺構外出土石器(5)

第9表 遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
1	LT-K-15		24.0	12.5	4.0	0.8	珪	石鏃	凸基有茎
2	Q-19Q		(27.0)	15.0	5.0	1.4	"	"	平基有茎
3	"	風倒木	28.0	14.0	4.5	0.9	"	"	"
4	LT-J-16		41.0	14.0	5.0	2.4	"	"	"
5	LT-N-6	"	15.5	13.0	3.0	0.4	"	"	凸基無茎
6	LT-J-16	"	43.0	9.0	8.0	3.1	"	石錐	
7	S-19		76.5	31.0	12.5	22.5	"	石匙	縦型
8	"	"	52.0	72.0	13.0	31.1	"	"	横型
9	T-20	"	47.0	15.5	10.5	6.6	"	石篋	刃
10	R-20	"	32.0	17.5	10.0	4.3	"	大石平	
11	R-19	"	44.0	22.0	6.0	7.4	"	不定形	a
12	Q-19	"	38.0	58.0	14.5	25.8	"	"	"
13	LT-O-6		88.0	48.5	10.0	38.0	"	"	b
14	R-19		50.5	29.5	11.0	16.6	"	"	"
15	S-18	"	61.0	48.0	10.0	23.0	"	"	c
16	T-20	"	59.5	32.0	14.0	19.8	"	"	"
17	R-18	"	30.0	17.0	7.0	3.3	"	"	
18	T-19	"	71.0	47.5	16.0	36.8	"	"	"
19	S-19	"	(52.0)	(43.1)	(23.0)	90.0	安	磨斧	
20	T-19	"	(96.0)	(78.0)	52.0	392.0	凝	石皿	裏面にクボミ
21	S-R-19	"	(268.0)	(178.0)	46.0	1892.0	"	"	接合資料
a	S-19	"	(53.0)	(82.0)	31.0	110.0	"	"	接合資料破片
b	S-R-19	"	(70.0)	(156.0)	40.0	296.0	"	"	接合資料破片
c	S-19	"	(197.0)	(178.0)	46.0	1486.0	"	"	接合資料破片
22	P-19	"	(76.0)	80.0	59.0	416.0	安	敲磨	クボミ
23	R-19	"	(86.0)	70.0	40.0	312.0	"	"	クボミ
24	P-19	"	133.0	80.0	47.0	726.0	"	"	クボミ・スリ
25	Q-20	"	118.0	57.0	38.0	364.0	"	"	クボミ・スリ
26	S-19	"	114.0	76.0	43.0	556.0	"	"	クボミ・スリ
27	R-19	"	124.0	80.5	43.5	554.0	"	"	クボミ・タタキ
28	S-19	"	97.5	63.0	51.5	384.0	"	"	クボミ・タタキ・スリ
29	"	"	84.0	53.5	39.0	268.0	"	"	クボミ・タタキ・スリ
30	P-20	"	94.0	66.0	41.0	388.0	"	"	スリ
31	T-20	"	(110.0)	51.0	46.0	362.0	"	"	タタキ
32	R-19	"	62.0	52.5	29.0	114.0	"	"	タタキ・スリ

3. 土製品・石製品

本調査で出土した土製品・石製品は、第5号遺物集中ブロック（以下、集中ブロック）及び遺構外から出土し、そのほとんどが、縄文時代後期第 群土器に伴うものである。

ここでは、遺構内及び遺構外から出土した土製品・石製品について併せて記述することにした。

なお、各種類の定義については、平成7年度の報告（以下、昨年度報告 青森市教育委員会 1996）に準拠する。

a. 土製品

本調査で出土した土製品の種類と数量を下表にまとめ、記述していく。

第10表 土製品数量一覧表

種類	土偶	鐸形 土製品	環状 土製品	耳飾	有孔 土製品	土器片利用土製品		粘土塊	その他 の土製品	計
						三角形	円形			
第5号遺物 集中ブロック	4	7	1	1	0	1	16	1	3	34
遺 構 外	0	0	0	1	1	0	3	0	0	4
計	4	7	1	1	1	1	19	1	3	38

土偶（第29図1～4）

人間の形態を模倣、もしくは抽象化して製作された土製品である。集中ブロックで、4個体分の土偶が出土している。出土した土偶は、肩～胴部の資料（第29図1）は、胴部が逆三角形の板状に製作され、肩部から脇の下にかけて斜位の貫通孔が、胸部には、乳房を表現する突起が施されている。文様は、正面中央に縦位の沈線が施され、また両面に横位の沈線が施されている。胴部の資料のうち、1点は、臍を表現する突起を有するもの（2）で、正面から背面にかけて格子目状の沈線が施されている。もう1点（3）は、乳房や臍を表現する装飾がみられず、正面及び背面は判断しえなかった。片方の面は、数条の縦位沈線と横位の連鎖状沈線、もう片方は斜位の平行沈線と縦位の連鎖状沈線が施されている。足部の資料（4）は、そのつま先に6本の短い刻み目が施され、刻み目の両端内側から凸部を数えると5本になり指を表現したものである。足部の大きさから、これまで本遺跡で出土した土偶と比較して大型の土偶になるものと予想される。

鐸形土製品（第29図5～11）

鐸や鐘等の形状を呈している土製品である。集中ブロックから7点出土している。突起の形状や貫通孔からみた昨年度報告の分類に基づくと、a類・突起の短軸方向に開口部と平行に穿孔しているもの（第29図1・8）、b類・突起の長軸方向に開口部と平行に穿孔しているもの（7）、c類・突起が円形で開口部と平行に穿孔しているもの（6）との3種類がみられる。

文様を有するものについては、沈線の両端が連結する渦巻文が施されるもの（7）は、第 群2類土器に、沈線による山形文が施されるもの（6）や刺突及び斜行沈線が施されるもの（9）は、第 群3類土器の文様モチーフに近似している。

開口部については、その平面形が円形のものや楕円形のものとの2種類がみられ、突起の穿孔との関係をもてみると、a類及びc類は円形、b類は楕円形を呈しており、昨年度報告の同製品をみても同じ

ような傾向がみられた。

環状土製品（第29図12）

環状に作られた土製品である。集中ブロックから1点出土している。3分の1程残存しており、偏平な形状を呈している。文様は、周縁及び中心から側縁へと延びる直角な方向に刺突が施されている。おそらく、この刺突は全周及び十字状に列するものと思われる。

耳飾（第29図13）

耳飾として想定される土製品である。集中ブロックから1点出土している。径約1.3cmの耳飾で、形状は平面形が円形で、断面形が椎骨状を呈し、中央に貫通孔を有している。

有孔土製品（第33図1）

棒状の工具によって穿孔された、貫通孔を有する土製品である。遺構外から1点出土している。形状は偏平で、平面形が楕円形を呈しており、その長軸方向に穿孔されている。

土器片利用土製品（第30図18～33、第33図2～4）

土器の破片を打ち欠いたり研磨して、三角形ならびに円形等に形作られた土製品である。三角形を呈するものが集中ブロックから1点、円形を呈するものが集中ブロックから16点、遺構外から3点出土している。資料のほとんどが周縁を打ち欠いて形作られている。一部に研磨が施されているものが1点、全周に研磨が施されるものが1点みられた。

粘土塊（第29図14）

焼成を受けた不定形の粘土の塊である。集中ブロックから1点出土している。形状は不定で、指で絞られたような痕跡を残している。

その他の土製品（第29図15～17）

集中ブロックから3点出土している。第29図15は、平面形がほぼ四角形を呈し、その頂角が突出している偏平な土製品である。16は、二又の突起状を呈しており、LR縄文が施されている。17は、棒状で先端に折り返しがみられる。

b. 石製品

本調査で出土した石製品の種類と数量を下表にまとめ、記述していく。

第11表 石製品数量一覧表

種類	球状石製品	有孔石製品	三角形岩版	円形岩版	その他の石製品	計
第5号遺物 集中ブロック	2	8	25	23	1	59
遺構外	0	0	10	13	0	23
計	2	8	35	36	1	82

球状石製品（第30図34・35）

球状に整形している石製品である。集中ブロックから2点出土している。いずれも、研磨によって整形されている。

有孔石製品（第30図36～38、第31図39～43）

孔を有する石製品である。集中ブロックから8点出土している。形状は様々で、碗状や球状を呈するものや偏平で円形や楕円形を呈するものなどがある。碗状を呈するもの（第30図37）は、その内面から

外面へ向けて穿孔されている。球状を呈しているもののうち、貫通孔が分岐しているもの(38)は、この2カ所の孔を指でふさいで息を吹くと音を発する。

偏平なもの(第31図39～43)については、上下あるいは左右のどちらかに片寄って穿孔される傾向がみられ、垂飾品として考えられる。

三角形岩版(第31図44～59、第33図5～10)

平面形が、三角形ならびに三角形に近い岩版である。集中ブロックから25点、遺構外から10点出土している。ほとんどの資料の裏面が平滑的に研磨され、表面が球状を呈しているものが多い。

岩版は、文様からみた昨年度報告の分類に基づくと、a類・無文のもの(第31図44～50、第33図5ほか)が21点、b類・左縁辺部に弧状線が位置するもの(第31図51)が1点、c類・右縁辺部に弧状線が位置するもの(第31図53ほか)が3点、d類・弧状線が左右対称に位置するもの(第33図6・7)が2点、i類・左右縁辺部に弧状線とその間に右傾の斜位直線が位置するもの(第31図54～56)が3点、j類・右縁辺部に重弧状線、左縁辺部に弧状線が位置するもの(第31図57、第33図9)が2点、k類・ブーメラン状の刻線を施すもの(第31図58)が1点、その他分類不能及び不明のもの(第31図59、第33図10)が2点出土している。また、j類のうち1点は、その文様施文後に格子目状の刻線が施されている(第33図9)。

破損状況については、欠損もしくは剥離しているものが多く、亀裂にタール状の黒色物質が埋め込まれているもの(第31図58)もみられる。

円形岩版(第32図60～75、第33図11～19)

平面形が、円形を呈する岩版である。集中ブロックから23点、遺構外から13点出土している。加工状況により昨年度報告の分類に基づくと、a類・表裏両面に平滑的な研磨が施され、断面形が長方形及び台形に近い形状を呈するもの(第32図60～65、第33図11～13)が14点、b類・表裏両面に平滑的な研磨が施され、側面が丸みを帯びているもの(第32図66～72、第33図14～19)が19点、c類・表裏両面に平滑的な研磨が施され、周縁の全てを打ち欠きによって整形されているもの(第31図73)が1点、f類の表面を球状、裏面を平滑的に研磨されているもの(第31図74・75)が2点出土している。そのうち、f類の1点は、表面に渦巻状の刻線が施されている(第31図75)。

その他の石製品(第33図20)

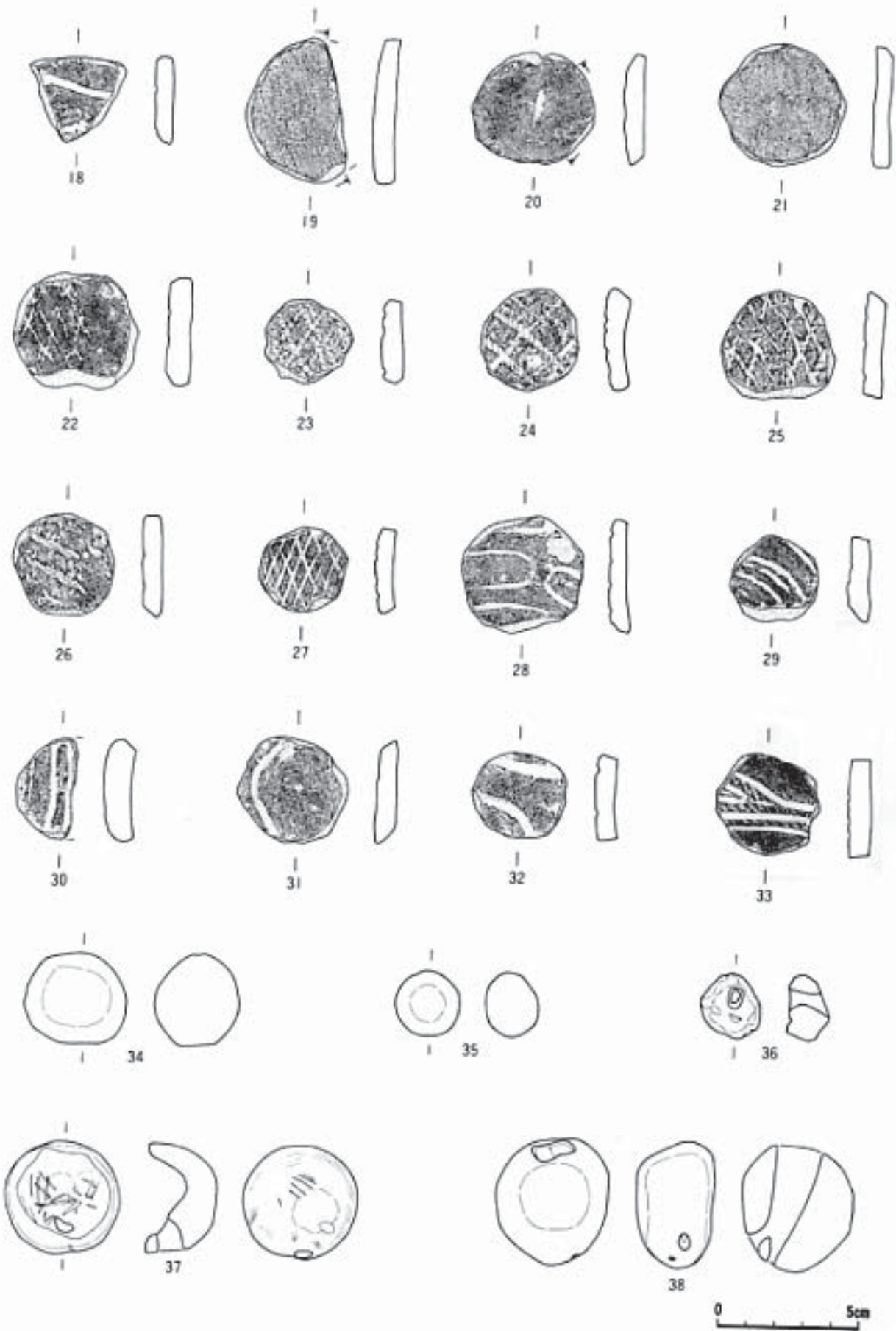
遺構外から1点出土している。先端が尖った平面楕円形の礫で、丸みを帯びた面に研磨が施されている。本製品は頁岩製で、瑪瑙質の層理がみられる。

(児玉 大成)

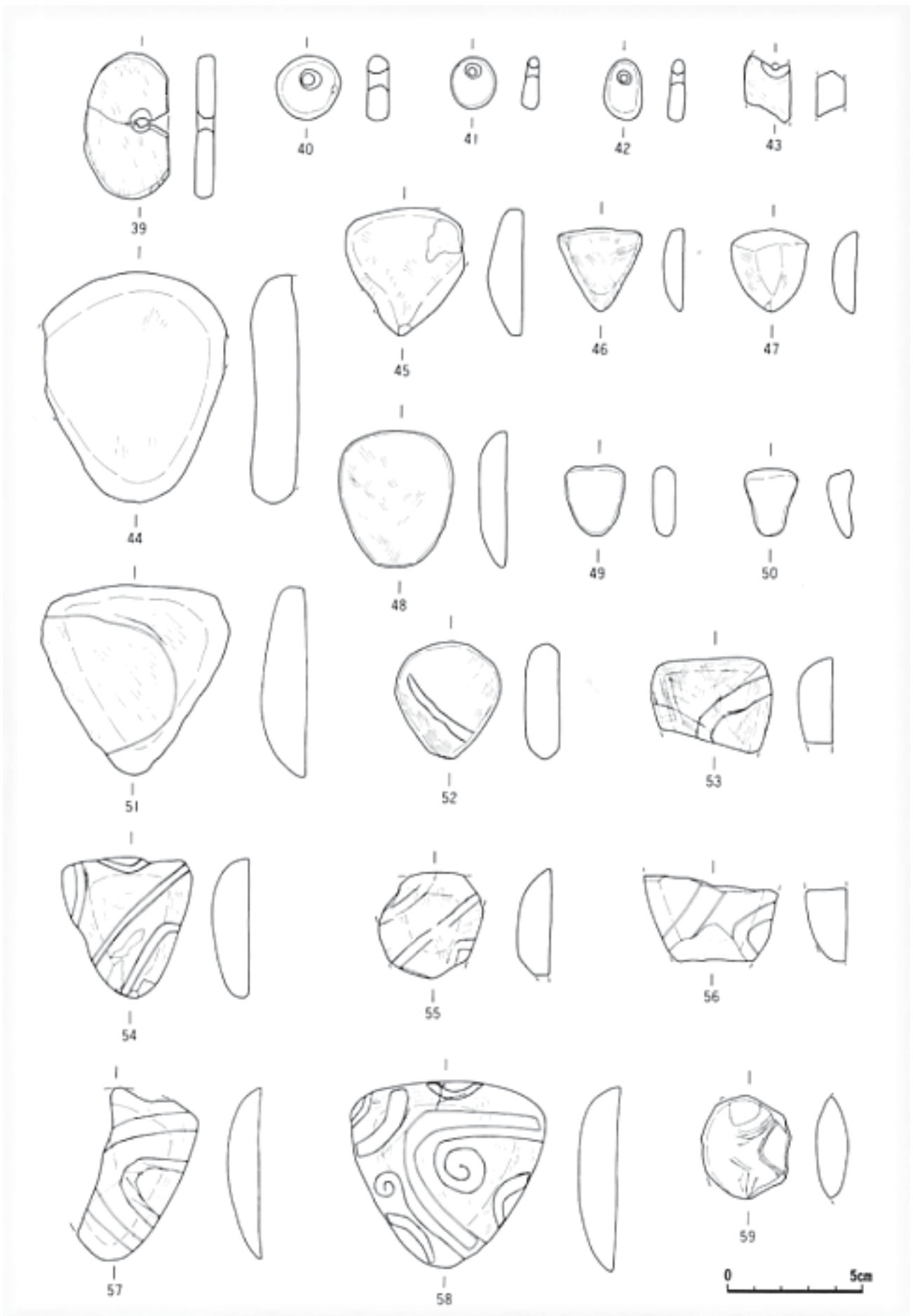


0 5cm

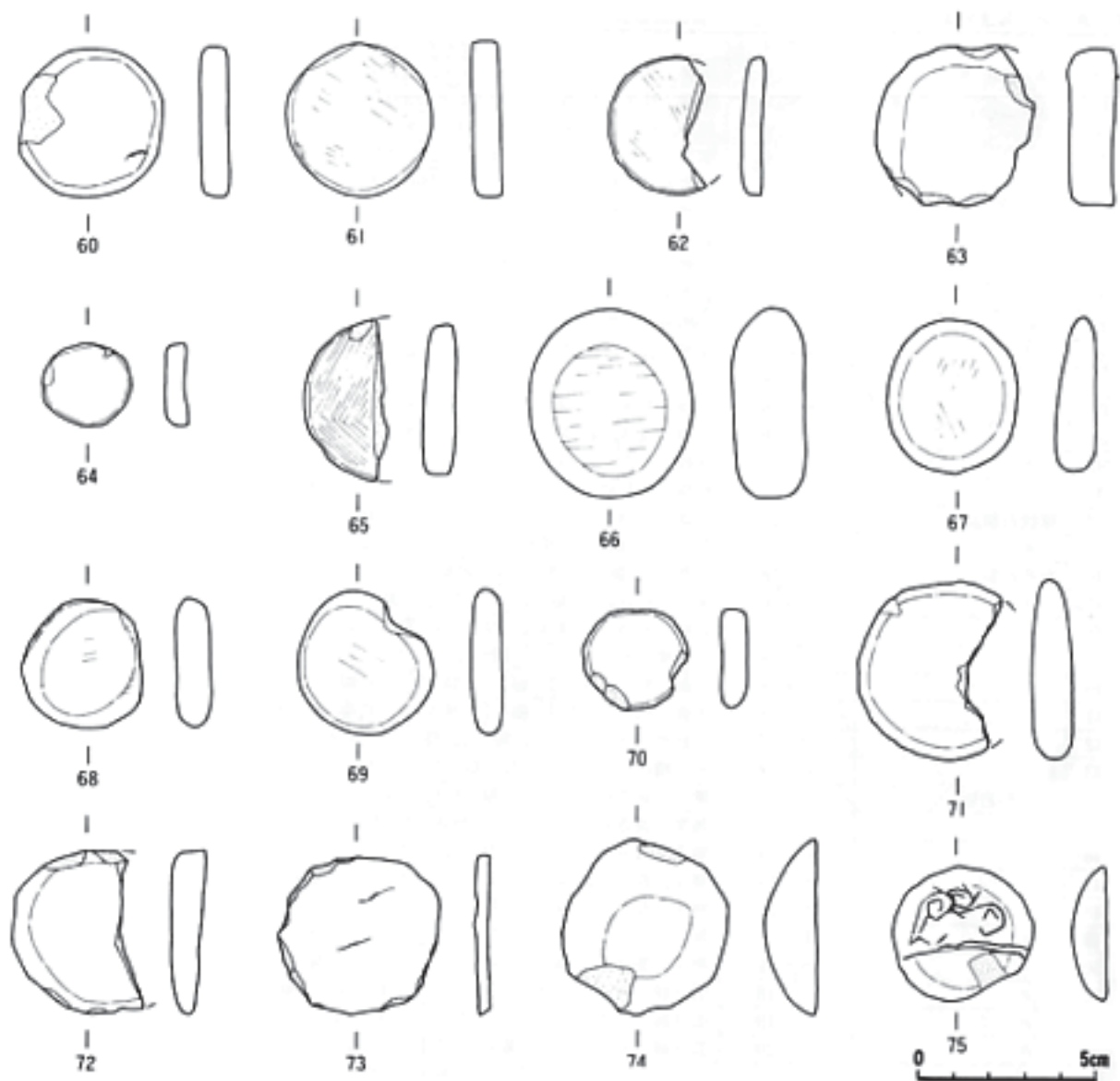
第29図 第5号遺物集中ブロック出土土製品・石製品(1)



第30図 第5号遺物集中ブロック出土土製品・石製品(2)



第31図 第5号遺物集中ブロック出土土製品・石製品(3)



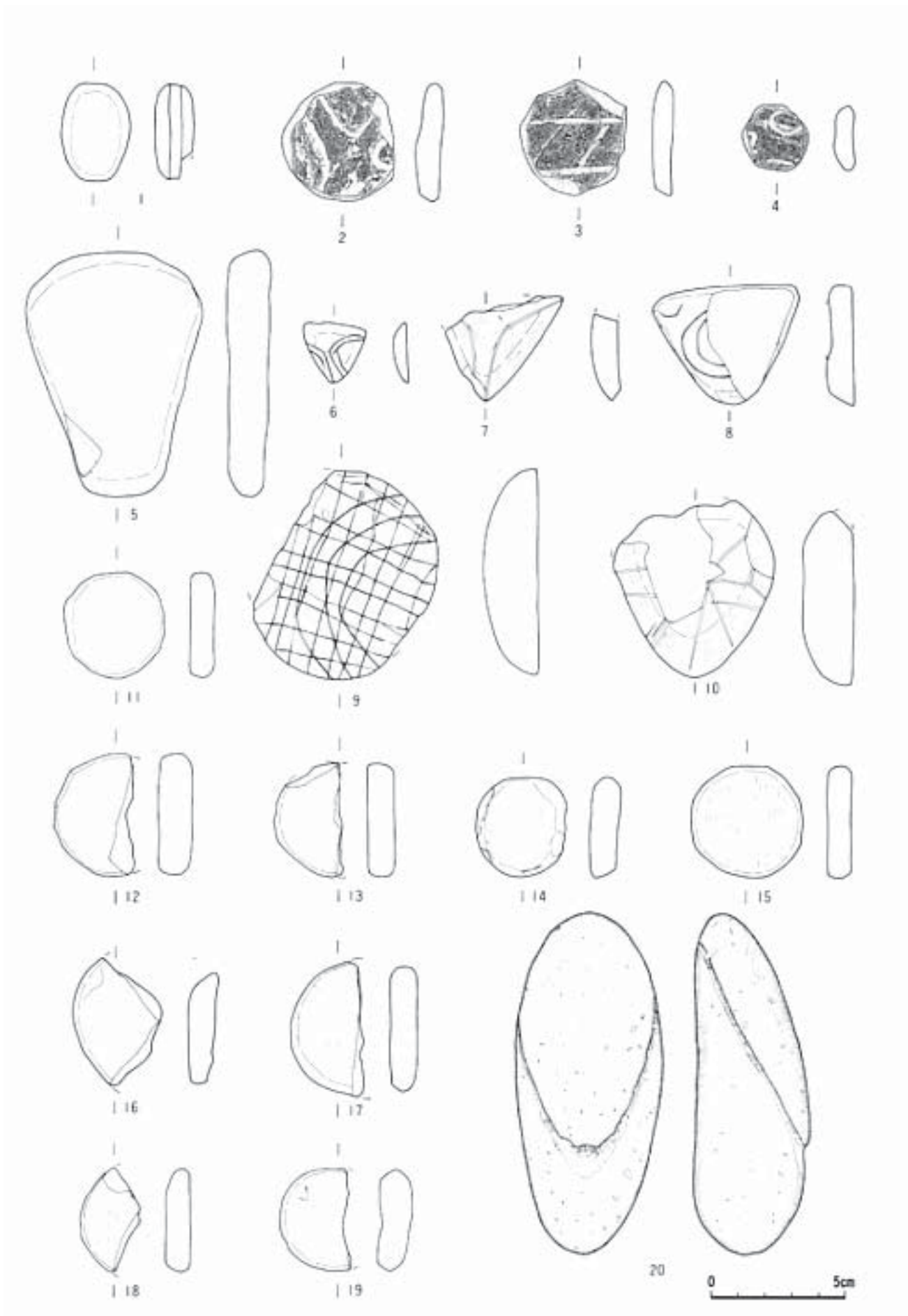
第 32 図 第 5 号遺物集中ブロック出土土製品・石製品(4)

第 12 表 第 5 号遺物集中ブロック出土土製品・石製品観察表(1)

番号	種 類	出土地点	特徴・計測値 (cm・g) 等
1	土偶	R-18	肩部貫通孔、沈線、重さ17.6
2	"	S-19	臍状突起、格子状沈線、重さ26.2
3	"	R-19	連鎖状沈線、重さ20.9
4	"	R-19	足部、刻目(6点)、重さ15.1
5	鐙形土製品	R-18	無文、開口部円形、内面煤付着、高さ4.2、開口径3.0×3.1、最大径2.9、重さ19.4
6	"	R-18	山形・V字状沈線、開口部円形、高さ4.2、開口径3.5×3.6、最大径3.3、重さ18.6
7	"	R-18	渦巻状沈線、高さ(4.1)、開口径(3.0)×(4.0)、最大径3.1、重さ19.6
8	"	P-20	高さ(2.0)、重さ1.6
9	"	R-18	刺突列、高さ(1.5)、重さ1.7
10	"	P-20	無文、高さ(3.7)、重さ3.0
11	"	S-19	無文、高さ(3.9)、重さ7.8
12	環状土製品	Q-20	沈線、刺突列、幅1.6、厚さ0.7、重さ3.9
13	耳飾	S-19	長さ1.3、幅1.3、厚さ0.9、孔幅0.2、重さ1.4
14	粘土塊	R-20	指頭圧痕、厚さ2.2、重さ20.2
15	その他の土製品	T-18	長さ2.1、幅1.7、厚さ0.6、重さ4.0
16	"	S-18	LR縄文、長さ(1.9)、幅3.4、厚さ0.8、重さ5.0
17	"	R-18	長さ3.3、幅1.0、厚さ0.9、重さ3.8

第13表 第5号遺物集中ブロック出土土製品(2)

番号	種類	出土地点	特徴・計測値 (cm・g) 等
18	土器片利用土製品 (三角形)	S-19	沈線、長さ3.0、幅3.1、厚さ0.6、重さ6.7
19	" (円形)	P-20	無文、長さ5.2、幅3.3、厚さ0.7、重さ16.9
20	"	R-19	無文、長さ3.2、幅4.3、厚さ0.6、重さ13.5
21	"	R-18	無文、長さ4.3、幅4.2、厚さ0.6、重さ14.2
22	"	R-18	L燃糸文 (格子状)、長さ4.0、幅4.3、厚さ0.9、重さ19.8
23	"	Q-19	L燃糸文 (格子状)、長さ2.9、幅2.9、厚さ0.7、重さ7.6
24	"	S-20	R燃糸文 (格子状)、長さ3.6、幅3.4、厚さ0.8、重さ12.5
25	"	P-20	R燃糸文 (格子状)、長さ3.8、幅3.8、厚さ0.6、重さ12.8
26	"	S-20	L燃糸文 (格子状)、長さ3.6、幅3.4、厚さ0.7、重さ10.4
27	"	S-18	L燃糸文 (格子状)、長さ3.0、幅2.9、厚さ0.6、重さ6.8
28	"	R-18	沈線、長さ3.9、幅4.2、厚さ0.7、重さ14.3
29	"	R-18	沈線、長さ2.7、幅3.1、厚さ0.7、重さ8.6
30	"	S-18	沈線、長さ3.5、幅(1.9)、厚さ0.9、重さ7.4
31	"	S-19	沈線、長さ3.4、幅3.7、厚さ0.6、重さ11.3
32	"	R-20	沈線、長さ3.0、幅3.1、厚さ0.7、重さ8.1
33	"	S-19	沈線、RL縄文、長さ3.5、幅3.4、厚さ0.7、重さ12.2
34	球状石製品	P-20	長さ3.6、幅3.2、厚さ3.1、重さ39.5、凝灰岩
35	"	P-20	長さ2.3、幅2.3、厚さ1.9、重さ10.0、凝灰岩
36	有孔石製品	R-18	長さ2.3、幅2.0、厚さ1.6、孔幅1.0、重さ5.5、凝灰岩
37	"	T-20	碗状、長さ4.1、幅4.1、厚さ2.3、孔幅1.1、重さ33.1、泥岩
38	"	S-19	球状、長さ4.1、幅4.1、厚さ2.8、孔最大幅1.7、重さ53.8、凝灰岩
39	"	R-18	平面楕円形、長さ5.6、幅3.1、厚さ0.6、孔幅0.9、重さ17.7、緑色凝灰岩
40	"	R-18	平面円形、長さ2.3、幅2.4、厚さ0.7、孔幅0.2、重さ5.5、凝灰岩
41	"	S-18	平面円形、長さ1.9、幅1.7、厚さ1.1、孔幅0.5、重さ1.8、凝灰岩
42	"	R-18	平面楕円形、長さ2.2、幅1.4、厚さ0.5、孔幅0.4、重さ2.3、緑色凝灰岩
43	"	R-18	平面楕円形、長さ(1.6)、幅1.7、厚さ1.1、孔幅0.9、重さ4.4、緑色凝灰岩
44	三角形岩版	T-20	無文、長さ8.6、幅6.8、厚さ1.6、重さ115.0、泥岩
45	"	S-19	無文、長さ4.6、幅(4.1)、厚さ1.5、重さ24.4、凝灰岩
46	"	Q-19	無文、長さ3.1、幅2.7、厚さ0.7、重さ6.2、泥岩
47	"	S-19	無文、長さ2.9、幅2.4、厚さ0.8、重さ6.3、凝灰岩
48	"	S-20	無文、長さ5.1、幅4.2、厚さ0.9、重さ24.2、凝灰岩
49	"	R-12	無文、長さ2.6、幅2.1、厚さ0.7、重さ5.2、凝灰岩
50	"	S-19	無文、長さ2.5、幅1.9、厚さ0.7、重さ2.5、凝灰岩
51	"	S-18	弧状線、長さ7.1、幅6.7、厚さ1.1、重さ80.8、凝灰岩
52	"	R-19	弧状線、長さ4.2、幅3.8、厚さ1.2、重さ25.9、凝灰岩
53	"	S-20	弧状線、長さ(3.2)、幅4.5、厚さ1.2、重さ23.0、凝灰岩
54	"	S-18	斜位直線、弧状線、長さ4.6、幅4.0、厚さ1.3、重さ31.7、凝灰岩
55	"	S-19	斜位直線、弧状線、長さ(4.1)、幅(3.4)、厚さ1.3、重さ16.4、泥岩
56	"	S-18	斜位直線、弧状線、長さ(2.9)、幅4.7、厚さ1.6、重さ24.9、凝灰岩
57	"	R-18	重弧状線、長さ6.4、幅3.0、厚さ1.3、重さ31.2、凝灰岩
58	"	R-18	ブーメラン状、渦巻状刻線、長さ7.0、幅6.9、厚さ1.5、重さ81.6、凝灰岩
59	"	P-19	弧状線、長さ(30.6)、幅(3.3)、厚さ(1.1)、重さ(12.7)、凝灰岩
60	円形岩版	P-19	無文、長さ4.3、幅3.9、厚さ1.0、重さ19.5、凝灰岩
61	"	T-20	無文、長さ4.2、幅4.2、厚さ0.7、重さ8.4、凝灰岩
62	"	S-20	無文、長さ3.9、幅(2.4)、厚さ0.6、重さ8.8、緑色凝灰岩
63	"	S-19	無文、長さ(4.4)、幅(4.3)、厚さ1.3、重さ28.5、緑色凝灰岩
64	"	P-20	無文、長さ2.3、幅2.4、厚さ0.6、重さ3.6、緑色凝灰岩
65	"	R-19	無文、長さ4.3、幅2.3、厚さ0.8、重さ12.0、緑色凝灰岩
66	"	S-19	無文、長さ5.3、幅4.6、厚さ2.0、重さ52.0、凝灰岩
67	"	P-19	無文、長さ4.3、幅3.7、厚さ1.1、重さ24.1、凝灰岩
68	"	S-18	無文、長さ3.6、幅3.4、厚さ0.9、重さ16.2、凝灰岩
69	"	R-19	無文、長さ4.0、幅3.7、厚さ1.0、重さ19.0、緑色凝灰岩
70	"	R-20	無文、長さ2.9、幅2.8、厚さ0.6、重さ7.1、凝灰岩
71	"	S-20	無文、長さ5.1、幅(3.1)、厚さ1.1、重さ23.7、緑色凝灰岩
72	"	P-20	無文、長さ4.6、幅(2.9)、厚さ0.9、重さ15.2、緑色凝灰岩
73	"	S-19	無文、長さ4.4、幅4.3、厚さ0.5、重さ17.9、凝灰岩
74	"	S-18	無文、長さ4.7、幅4.6、厚さ1.4、重さ27.5、緑色凝灰岩
75	"	T-19	無文、長さ3.6、幅3.9、厚さ1.0、重さ13.4、凝灰岩



第33図 遺構外出土製品・石製品

第 14 表 遺構外出土土製品・石製品観察表

番号	種 類	出土地点・層位	特徴・計測値 (cm・g) 等
1	有孔土製品	S-19・	長さ3.6、幅2.6、厚さ1.5、重さ14.2
2	土器片利用土製品 (円形)	R-18・	隆起帯、沈線、長さ4.3、幅4.4、厚さ1.0、重さ21.0
3	"	R-20・ 風倒木	格子状沈線、長さ3.9、幅3.8、厚さ0.6、重さ12.0
4	"	R-18・	沈線、長さ2.2、幅2.1、厚さ0.7、重さ4.9
5	三角形岩版	S-18・	無文、長さ9.2、幅6.5、厚さ1.7、重さ128.4、凝灰岩
6	"	R-18・	弧状線、長さ2.2、幅2.2、厚さ0.6、重さ2.9、凝灰岩
7	"	T-19・	弧状線、長さ(3.5)、幅(3.4)、厚さ1.3、重さ16.2、泥岩
8	"	S-18・	弧状線、長さ4.5、幅4.7、厚さ0.9、重さ23.1、凝灰岩
9	"	M-9・	弧状線、格子状刻線、長さ7.8、幅(4.2)、厚さ2.1、重さ108.8、泥岩
10	"	S-19・	刻線、長さ(6.5)、幅5.6、厚さ1.6、重さ45.9、泥岩
11	円形岩版	J-17・	無文、長さ3.7、幅3.9、厚さ0.8、重さ16.7、泥岩
12	"	J-17・	無文、長さ3.9、幅(2.7)、厚さ1.2、重さ19.2、泥岩
13	"	J-15・	破損後赤色顔料塗布、長さ4.2、幅(2.4)、厚さ0.9、重さ12.5、泥岩
14	"	T-19・	無文、長さ3.7、幅3.4、厚さ1.2、重さ19.0、泥岩
15	"	S-18・	無文、長さ4.3、幅4.2、厚さ0.9、重さ25.4、凝灰岩
16	"	T-18・	無文、長さ4.6、幅(3.2)、厚さ1.1、重さ16.7、凝灰岩
17	"	T-20・	無文、長さ5.0、幅(2.6)、厚さ1.1、重さ20.2、凝灰岩
18	"	K-17・	無文、長さ3.7、幅(2.2)、厚さ0.8、重さ7.5、泥岩
19	"	J-16・	無文、長さ3.8、幅(2.3)、厚さ1.0、重さ7.3、泥岩
20	その他の土製品	O-6・	擦痕、長さ12.8、幅5.6、厚さ4.1、重さ383.8、頁岩

第 章 地下レーダー探査報告

1. 調査の概要

- (1) 調査期間 平成8年12月5日～平成9年2月28日
- (2) 調査内容 地下レーダー探査 面積約34,900m² 総測線長9,726m
- (3) 調査目的

小牧野遺跡は、縄文時代後期前半の環状列石を主体とする遺跡である。この環状列石周辺からは、関連する配石遺構や土坑などが検出されているが、現在のところ、全容は明らかになっていない。

本遺跡では既に平成7年11月～平成8年2月にかけて、環状列石の西側における約10,000m²において地下レーダー探査を実施しており、その結果は平成7年度の報告に掲げてある（青森市教育委員会1996）。今年度の発掘調査において、その探査区域を部分的に対比検討した結果、探査の推定と概ね整合していることを確認した。

今回の目的は、環状列石南側及び北西～北東側を対象に地下レーダー探査を実施し、地下浅部の地盤状況を調べることによって、環状列石周辺の遺構の分布状況を推定し、遺跡の範囲を確定する際の基礎的資料を得ることである。

- (4) 調査担当 応用地質株式会社

2. 調査の方法

本調査において実施した地下レーダー探査は、地表から地中に向けて電磁波を放射し、その反射波を捉えることにより、地下に埋蔵されている遺構や遺物等を非破壊的に探査する方法である。竪穴式住居跡や土坑などの遺構は旧地表面における反射面のくぼみとして、また配石遺構などの異質物が地盤中に埋蔵されている場合には局所的な反射体として記録上にあらわれる。測定にあたり、環状列石南側の探査区域をa区、北西側をb区、北東側をc区と呼称し、5～10m間隔の平行な測線を基本とし、現地の状況に応じてこれと直交する測線を10m間隔で設定した。測線長は、a区：6,167m、b区：3,309m、c区：250mで合計9,726mとなっている（第34図上）。

3. 探査結果

(1) 基本層序との対比

今年度実施した昨年度探査区域内での発掘調査と、レーダー探査の記録と基本層序との対比を試みることができた。本遺跡の基本層序は次のような状況である。

層位	特徴
第～層	耕作土・腐植土・黒色土
第層	漸移層
第層 月見野火山灰	砂質ローム
大谷火山灰	粘土質ローム

地下レーダーの測定記録では、ほぼ全測線に共通して深さ数10cm～約1mまでのところに調査範囲に広く連続する明瞭な反射像を検出した。この反射像は、一部に比較的規模の大きな溝状のくぼみの領域を含みながら緩やかに起伏しつつ調査区の全域に広がっている。この反射像の広がりは前掲の基本層序と対比すると、その深さから判断して地山ローム層(第 層)上部付近の土質変化に起因するものとみられる。さらに、それより浅部では第 層と 層との間漸移層(第 層)もしくは地山ローム層(第 層)の最上面の層位付近からのものとみられる地盤状況の変化を示す各種の反射像を検出した。

(2) 測定記録の判読

今回の測定記録では、上述したローム層上部付近からのものとみられる比較的明瞭な反射像が、場所によって強くみられる部分や起伏がみられる点では特徴的であったといえる。特に、くぼみ状の反射像が何本かの測線に連続的に並列して認められることから、溝状の落ち込みになると推定されるものが数箇所を確認された。さらに浅部では、第 層と地山ローム(第 層)上部との境界付近に相当すると考えられる層位での、周囲とは異なった土質領域や攪乱地盤の存在、さらに石やくぼみなどの埋蔵物の可能性を示唆する異常反射を検出した。一般的に、こうした旧地表面や地盤変化の特徴は、地下レーダーの記録上におおよそ次の反応となつてあらわれる。

地盤の特徴	レーダー記録上の典型的な反応
土層境界面	濃い縞模様の連続
硬質の地盤・盛土	強く濃い縞模様の連続
異なる土質	縞模様の相対的な変化
攪乱	縞模様の乱れ
石・金属	下方向に彗星のように尾を曳く形の独立した縞模様
穴・窪み	縞模様の窪み、または縞模様の局所的断裂、相対的な変化など

以上のような判読に基づき、さらに現地の地形状況を考慮することによって地盤状況の解釈・推定をおこなった(第35図)。

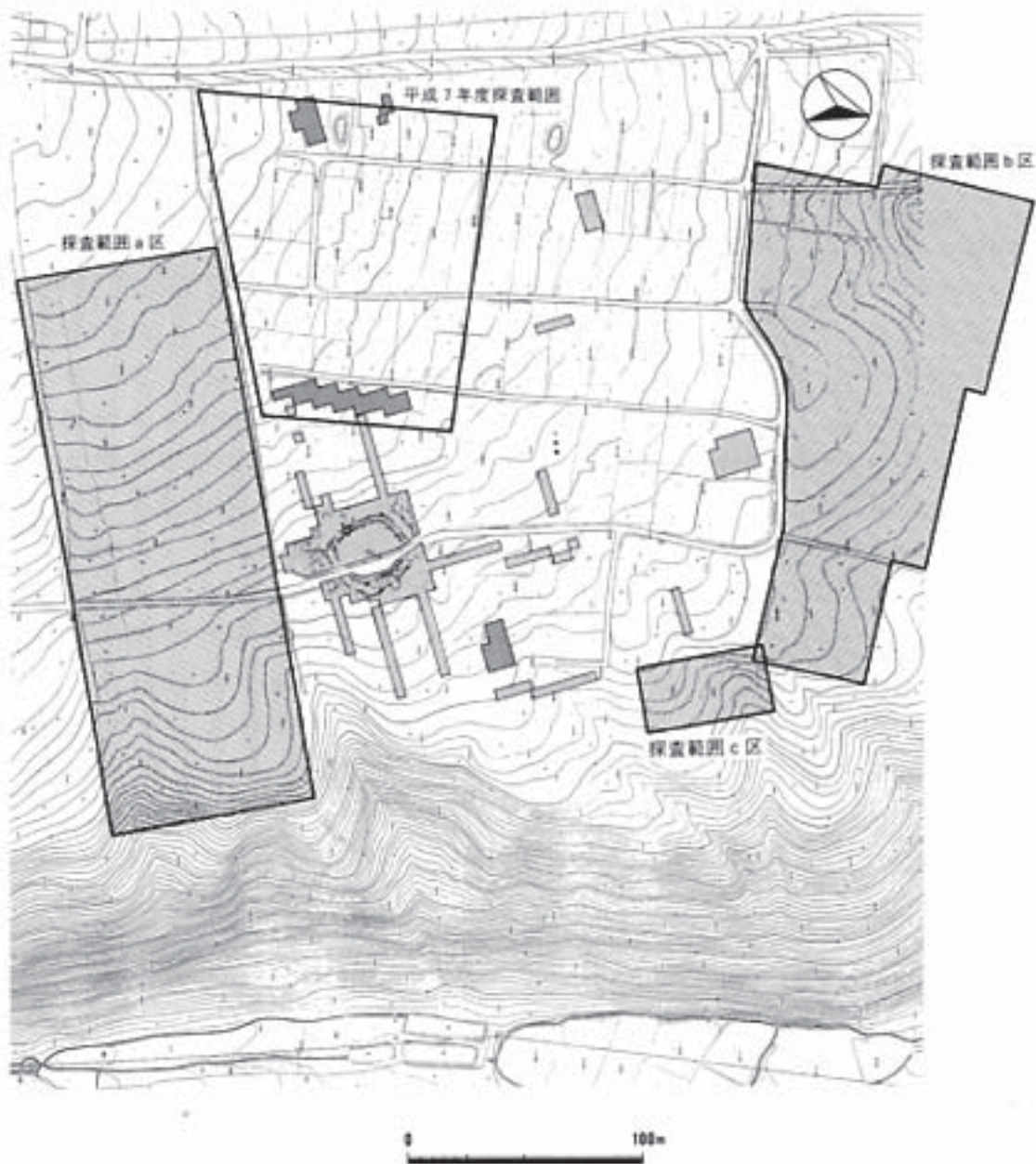
a区では、周囲に比べてやや硬質の地盤、もしくはやや異なる土質の堆積しているような地盤の埋蔵を示唆する比較的強い反射像の範囲が、帯状ないしはブロック状に認められる。自然地盤の変化を映したものと推定されるが、盛土状の遺構や竪穴状の遺構の可能性も想定される。

b区では、周囲に比べてやや異なる土質の堆積を呈するような径数mの浅いくぼみ状の反射像領域が点在している。自然地盤の変化を映したものの、あるいは竪穴式住居跡や竪穴状の遺構の可能性も想定される。

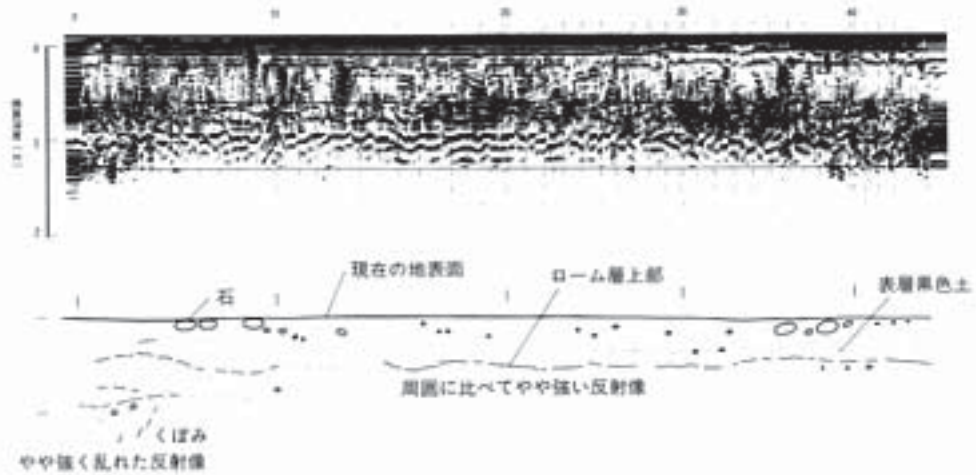
c区では、硬質の地盤、もしくはやや異なる土質の堆積が帯状に広がっており、遺物集中ブロックや盛土状の遺構の可能性も想定される。

また、a～c区の各調査区に共通して、長さ数十m、幅約数m～20m前後、地表面からの深さ約1～2m前後の溝状のくぼみが走っている。自然に形成された旧地形と考えられるが、溝状の遺構としても推定される。

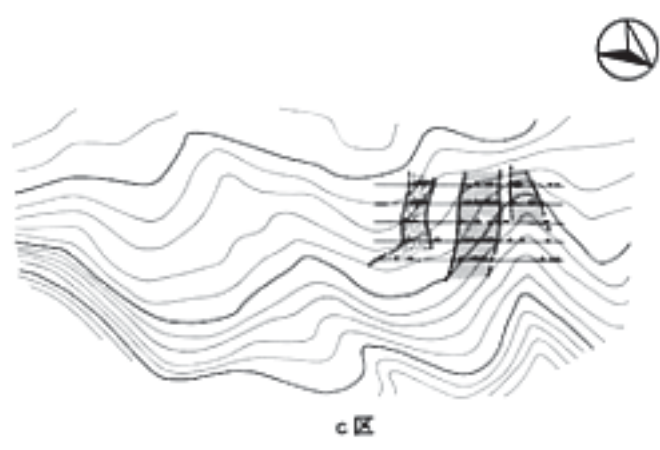
(応用地質株式会社探査工学研究所歴史環境部 軽部 文雄、児玉大成)



環状列石横断道路でのテスト測定(参考)



第34図 地下レーダー探索位置図(上)及び測定記録解釈例



- 凡例：
- 浅いくぼみ、もしくは穴
 - 石、または硬い地盤
 - くぼみ
 - ▨ 溝状のくぼみ
 - ▩ 溝状のくぼみ、もしくはやや異なる土質の堆積
 - ∩ やや強く乱れた反射像
 - ⊞ 比較的強い反射像の領域
(硬質の地盤、もしくはやや異なる土質の堆積)
 - 仮の範囲想定線



第35図 地下レーダー探査結果

第 章 分析と考察

第 1 節 第 5 号遺物集中ブロックとその土器群について

今年度の調査では、検出した第 5 号遺物集中ブロックから、ほかの遺構や遺構外と比較して土器や石器、土製品・石製品が多量に出土した。それらの出土総数に対する割合では、土器が圧倒的に多く、ダンボール箱で 16 箱分を出土している。今回の調査では、第 5 号遺物集中ブロックを対象に、出土した遺物に対し適宜番号を付し、遺物分布図ならびにその垂直分布図の作成に努めた。本項では、多量に出土している土器をとりあげ、その分布について考察を進めることとする。

本遺跡における「遺物集中ブロック」とは、発掘調査区域内で、土器や石器などの遺物が視覚的に濃密に分布している範囲を指す。平成 7 年度までの調査では 4 箇所（第 1 ～ 4 号遺物集中ブロック）、本調査では 1 箇所（第 5 号遺物集中ブロック）を検出した。この 5 箇所の遺物集中ブロックは必ずしも同一時期・性格ではない。環状列石から北へ 130m 程離れた地点で検出した第 1 号遺物集中ブロックは、縄文時代後期初頭の第 1 群 1 類土器を主体とする捨て場跡、列石から北東へ 80m 程離れた地点の第 2 号遺物集中ブロックは、縄文時代後期前葉の第 2 群 2 類土器を主体とする捨て場跡、列石南側付近の第 3 号、第 4 号遺物集中ブロックは続縄文時代の石器を中心とする石器製作跡で、今回検出した第 5 号遺物集中ブロックは、列石から北東へ 60m 程の地点、標高約 141m 付近に位置しており、縄文時代後期前葉の第 2・3 類土器を主体とする捨て場跡として考えられる。地形的にみると、平坦地から沢地になる傾斜面上端部に位置し、そこから沢地手前の緩傾斜面に位置している第 2 号遺物集中ブロックへ続くものと思われる。

第 5 号遺物集中ブロック（以下、集中ブロック）の土器の平面的な広がりを見てみると、視覚的におよそ 4 つの小ブロックに分けることができ、それを a ～ d ブロックと称することにす。各小ブロックの様相は次のとおりである。

a ブロックは、トレンチ西側に位置し、集中ブロックの中でも遺物が特に濃密に分布する箇所である。

b ブロックは、トレンチ中央に位置し、集中ブロックの中でも接合資料が少なく、接合しえなかった破片が多く分布する箇所である。

c ブロックは、トレンチ南東側に位置し、隣接する b・d ブロックとは若干離れている。

d ブロックは、トレンチ北東側に位置し、a ブロックの次に遺物が濃密に分布する箇所である。

出土した土器（第 7 ～ 16 図）は、第 1 群土器が主体を占め既に第 2 章第 2 節で分類している。第 1 類土器では破片が数点（38 ～ 41 ほか）、第 2 群土器では復元品 1 点（1）、破片が数点（42 ほか）、第 3 群土器では復元品 2 点（3、4）、破片数十点（69 ～ 87 ほか）、2 類では復元品 16 点（7 ～ 10、18 ～ 27、31、32）、破片が数百点（88 ～ 110、119 ～ 127、135、136 ほか）、3 類では復元品 5 点（11 ～ 14、37）、破片が数十点（117、118、130 ほか）、1 ～ 3 類以外のもの（その分類から外れたもの）では、復元品が数点（2、5、6、15 ほか）、破片が数百点（43 ～ 68 ほか）出土した。そして、これら復元できた土器を中心に、出土位置や接合関係をみてみたい。第 1 群土器は、1 が d ブロックから出土している。第 2 群土器 1 類は、3 が a と d ブロックから、4 が d ブロックから出土している。2 類土器は、8・10・20・25・30 が a ブロックから、23 が b ブロックから、7・31・32 が c ブロックから、9・26・27・36 が d ブロックから、

3類土器は、11がaとdブロックから、12・14・37がdブロックから出土している。

破片とあわせてみると、第 群土器は、個体数がわずかであるため、対象から除外するとして、第 群1類はdブロックから、2類はa～cブロックから、3類土器はdブロックから多く出土している傾向がみられる。

さらに、文様要素によってたどってみると、a～cブロックでは、2類の文様要素の一つである沈線の両端が連結するものや、それが渦巻状を呈し施されるものが多く出土しており、これらの文様手法は、半肉彫的技法によるものも多い。dブロックでは1類の文様要素である充填あるいは磨消縄文を施した沈線による大柄な入組文、方形文などが施されるものが出土し、2類の文様要素の一つである2～3条の沈線による渦巻文が施されるもの、3類の沈線、櫛歯状沈線、充填・磨消縄文により横位に展開する入組文や渦巻文、S字状文、山形文などが施されるものも出土している。特に、このdブロックでは、2類の沈線が連結する渦巻文よりも、2～3条の沈線によって描かれた渦巻文の方が多くみられた。次に土器の垂直分布から層位的重複についてみてみたい。なお、垂直分布は、cブロックの標高が他の小ブロックと比べて高位にあるため、a、b、dブロックを対象とした。a・bブロックでは有意な層位的重複は認められず、ほぼ同一時期に形成されたものと推定できる。dブロックでは土器の分布が概ね2層を呈しており、その上層からは2類・3類が、下層からは1類が多く出土する傾向がみられ、有意な層位的重複が認められた。

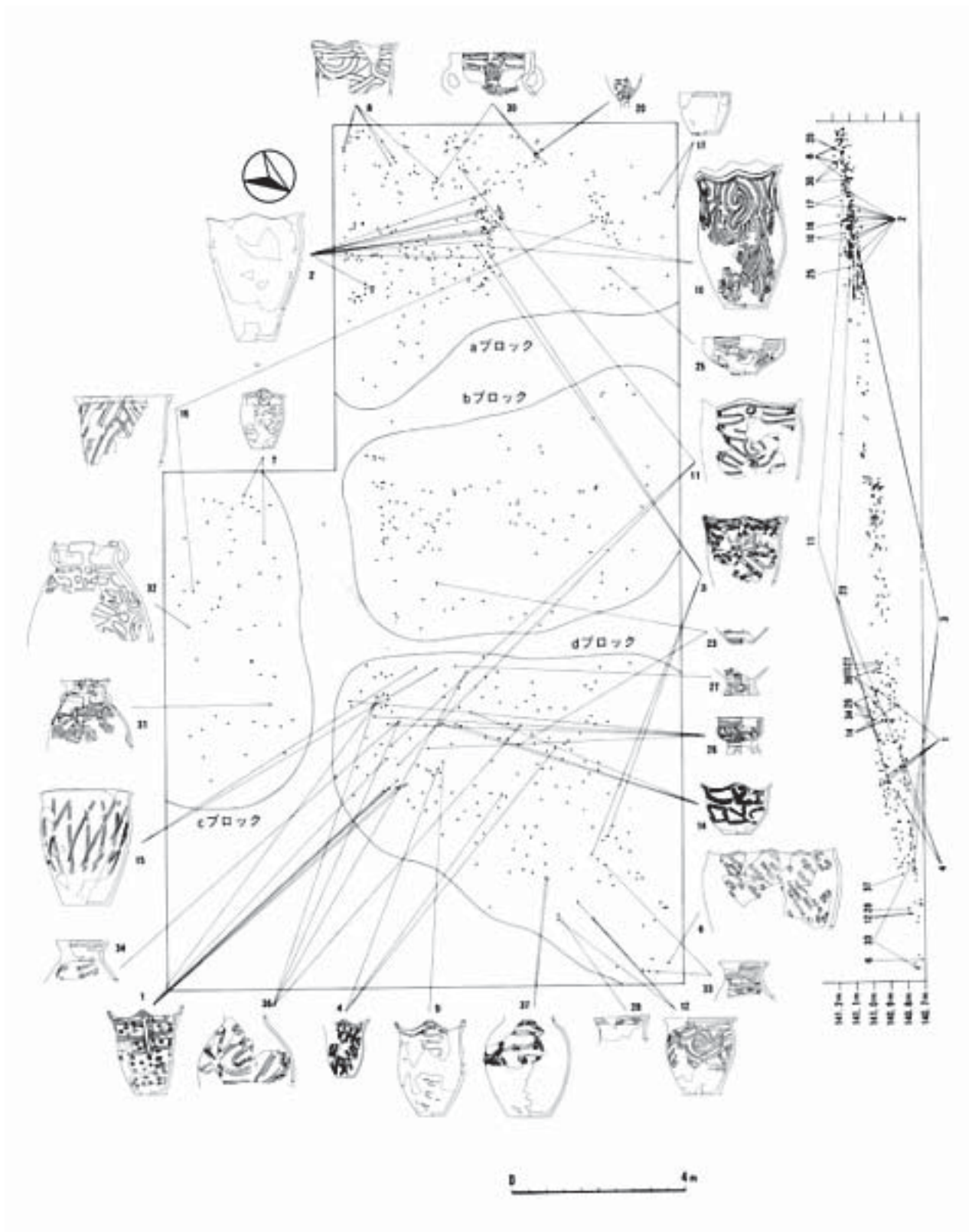
以上のことから、第5号遺物集中ブロックは、a～cの三つの小ブロックと、dブロックが二層すなわち二つの小ブロックに分けることができ、下層をd1ブロック、上層d2ブロックと称し、時期的には、d1ブロック(1類) a～cブロック(2類) d2ブロック(2・3類)の遷移で形成されたと推定できる。また、土器文様の変遷を推察すると、「充填・磨消縄文を施した沈線による大柄な入組文、方形文など(1類)」

— 「沈線の両端が連結するもの、それが渦巻状を呈し施されるもの、半肉彫的技法によるもの(2類)」
「2～3条の沈線による渦巻文が施されるもの(2類)」 「沈線、櫛歯状沈線、充填・磨消縄文により横位に展開する入組文や渦巻文、S字状文などが施されるもの(3類)」の過程を想定することができ、の土器は の土器と共存する可能性が強い。1～3類以外の土器も、2や16、17は2類土器、6や15は3類土器に帰属できるものと考えられる。

なお、第 群土器である1は、垂直分布ではcブロック上層のほぼ上面に位置しており、cブロック形成期に攪乱を受けたものと思われる。

今後、このような遺物集中ブロックや遺構との関連を分析することにより、遺跡の構造や性格を具体的に明らかにしていきたい。

(児玉 大成)



第36図 第5号遺物集中ブロックにおける土器の分布

第2節 刃部の作出方法と角度からみた不定形石器の機能について

今年度の発掘調査では、745点の不定形石器が出土している。不定形石器は、定形石器のいずれにも分類できない剥片石器を指す名称で、その名称が示すとおり、平面形状はそれぞれの石器によって異なっており、「形が定まらない石器」である。本遺跡ではこのような不定形石器の出土量が、定形石器に比べて多く、数量から判断する限り、当時の人々の生活においてかなり重要な役割を果たしていた道具であったと考えられる。不定形石器は全体の平面形状から細分することは困難であるが、刃部の作出方法に着目すると、連続的な剥離によって刃部が作出されているものと、調整がほとんど加えられておらず、剥片の鋭利な側縁を利用したものに分けることができ、刃部の角度に着目すると、大まかにみて急斜度な刃部をもつものと緩斜度な刃部をもつものに分けることができる。急斜度な刃部は、搔器的な機能をもつと考えられる刃部、緩斜度な刃部は、削器的な機能をもつと考えられる刃部としてとらえることができる。このように、刃部の作出方法と刃部の角度に注目し、区分してみると、ある程度分類が可能であると想定される。したがって、不定形石器の製作においては、その平面形状は特に重要視されていなかったことが推測でき、むしろ、形状よりも1側縁における調整の範囲や刃部の角度が重要視されていた可能性がある。

以上のような観点から、本項では今年度本遺跡で出土した不定形石器について、1側縁における調整の範囲と刃部の角度に着目し、次のように分類した。

類 連続的な剥離が一側縁の長さの1/2以上にわたって施されているもの

- a 急斜度な刃部(40°以上)が作出されているもの
- b 緩斜度な刃部(40°未満)が作出されているもの
- c 急斜度な刃部と緩斜度な刃部を両方持ち合わせているもの

類 連続的な剥離による調整が一側縁の1/2のもの・微細剥離が認められるもの

aと急斜度な刃部をもつ 類の石器を搔器的な機能を意識して製作されたもの、 bと緩斜度な刃部をもつ 類を削器的な機能を意識して製作されたものとしてとらえ、両者の数量の割合から、どちらの機能をもつ不定形石器が多いのかを調べることによって、ある道具の数量の多さはその道具を使って行われた作業の多さを表しているのではないかという観点から、環状列石を利用していた人々がどちらの機能をもつ石器を使用する作業を多く行っていたのかについて推測を試みた。なお、刃部の角度については、分類の前に、搔器的な機能をもつと考えられるものと削器的な機能をもつと考えられるものを何点か任意に選び出し、その刃部の角度を測定したところ、前者は40°以上、後者は40°未満のものが多く、

	第5号遺物集中ブロック	遺構外	計
a	68点	47点	115点
b	121点	81点	202点
c	9点	2点	11点
	251点	166点	417点

表1 各類型ごと数量

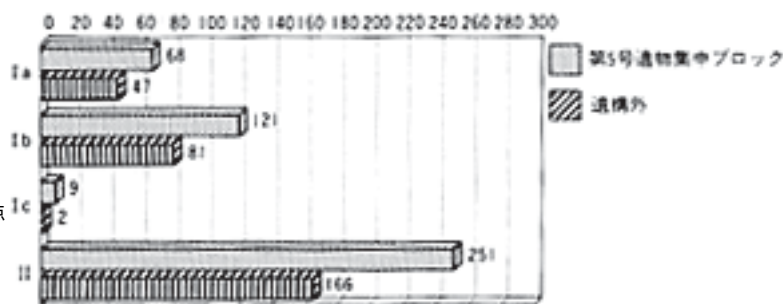


図1 各類型ごと数量のグラフ

第37図 不定形石器各類型ごと数量

	第5号遺物集中ブロック	遺構外
40° 以上のもの	88点	59点
40° 未満のもの	163点	107点

表2 40° 以上と40° 未満の各数量

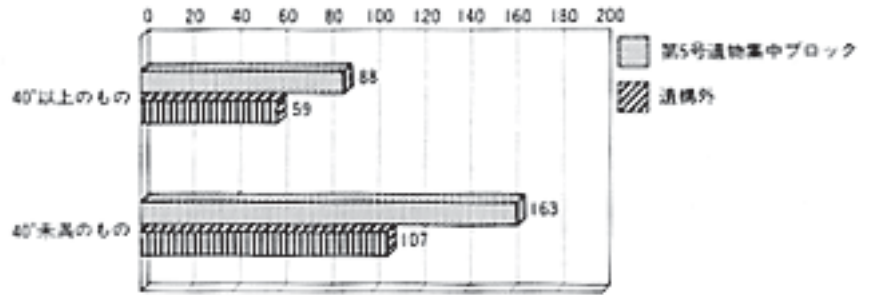


図2 各類型ごとの数量(類)のグラフ

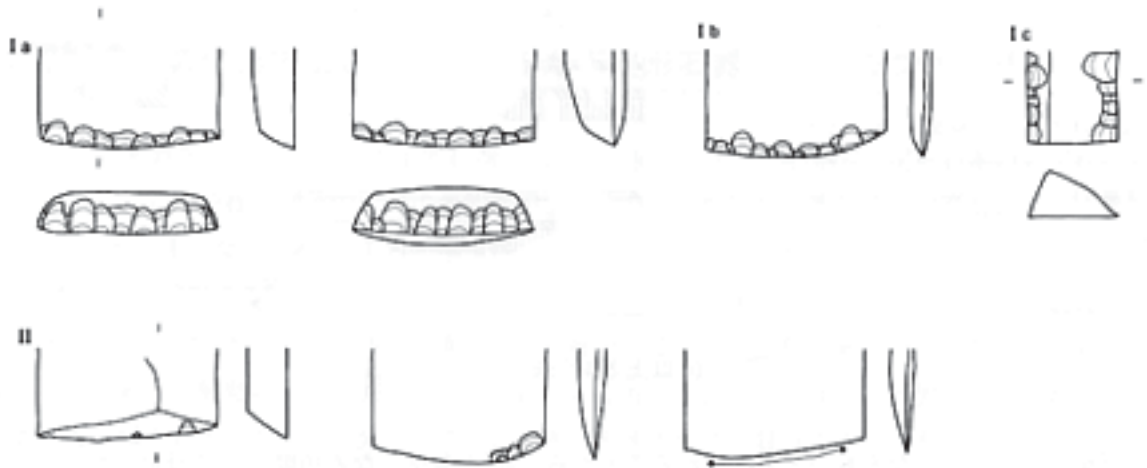
第38図 40° 以上と40° 未満の各数量(類)

40° 付近が両者の境界になるものと考えられることから、40° を基準となる角度として設定した。

分類の結果、表1と図1から読み取れるように、第5号遺物集中ブロック、遺構外のいずれにおいても、bの数量が aの数量の約2倍になるという結果が得られた。そこで、このような傾向がほとんど調整が施されておらず使用にともなう微細剥離がみられる 類にもあてはまるものなのかを調べるため、 類の不定形石器の刃部の角度を測定し、 類を急斜度な刃部をもつものと緩斜度な刃部をもつものに細分したのと同様に刃部が40° 以上のものと40° 未満のものに分類したところ、表2と図2から読み取れるように、刃部の角度が40° 未満のものの数量が40° 以上のものの数量の約2倍になるという結果を得た。

以上のように、 類、 類のいずれにおいても緩斜度な刃部をもつものの数量が、急斜度な刃部をもつものの数量の約2倍になるという結果から、本遺跡から出土した不定形石器に関しては削器的な機能をもつと考えられるものの数量は、搔器的な機能をもつと考えられるものの数量の約2倍であるということがいえよう。削器的な機能をもつものと搔器的な機能をもつものは、いずれも当時の人々の生業においてかなり重要な道具であったことが考えられるが、具体的にどのような作業を行っていたのかということについては、それらの石器を用いて加工されたと考えられる遺物、あるいは、それらの石器を用いて解体されたと考えられる動物遺体などが出土していないため明らかではない。両者の刃部の角度から推測すると、搔器的な機能をもつと考えられるものは、何かを搔き取ったり、削ったりする作業には有効であるが、物を切る作業には適さないと思われる。一方、削器的な機能をもつと考えられるものは、物を切ったり、削ったりする作業にはもちろん有効であると思われるが、何かを搔き取ったりする作業も可能であると考えられる。このようなことから考えると、緩斜度な刃部は、削器的と搔器的という2つの機能を持ち合わせているとすることもできるが、搔器的な機能をもつと考えられる急斜度な刃部をもつものや、緩斜度な刃部と急斜度な刃部を両方持ち合わせているもの(c)の存在から、急斜度な刃部をもつものは搔器的な機能、緩斜度な刃部をもつものは削器的な機能、急斜度な刃部と緩斜度な刃部の両方を持ち合わせているものは、削器的な機能と搔器的な機能の両方を果たすものとして使い分けられていたものと考えられる。

(設楽 政健)



第 39 図 不定形石器各類型模式図

第 3 節 凹みを有する礫石器について

礫石器のなかの敲磨器類は、剥片石器などのように形態や技法的側面などから主に分けられる石器ではなく、石器に残されている使用痕を主眼として分類される石器である。分類において一つの石器のなかに異なる使用痕が共存する例も多いことなどから、特定の用途においての一連の使用状況を想定するケースが多く見られる。

この前提に立っていることは、敲磨器類として分類される石器は、機能を充足し得る自然礫をそのまま利用した結果の痕跡が残されているものであって、素材である自然礫を加工する必要性はほとんどなく、採集の段階で既に製品として完成しているということである。

この前提に立った場合、自然礫が持ち得る形態的屬性（形状・重量等）は、機能を反映する必要条件となり、選択性があったと仮定すると使用者の差異、もしくは特定の用途に対する使用ということも想定され得る。

平成 2 年度から平成 8 年度までの小牧野遺跡出土の敲磨器類のうち「凹石」は、他の敲石・磨石の単独の属性を持つものより数量的に多い。

この「凹石」の用途については、これまで各研究者において諸説が入り乱れている様相を示している。主だったものとして、食物調理におけるくるみ割り、製粉、指かけ、石器製作具、発火具説¹⁾などさまざまな用途が想定されている。

本項では、小牧野遺跡出土の礫石器のうち、「凹み」を有する礫石器について、その形態的屬性を抽出し、さらには「凹み」という使用痕が用途についてどのように関わるかを検討する。

分析方法

平成 2 年度から平成 8 年度まで小牧野遺跡から出土した「凹み」を有する礫石器 132 点のうち、完形品 103 点（完形率 78%）を対象として、長軸幅・短軸幅・厚さ（第 40 図 a）、重量を計測した。また、同時に「凹み」の断面形状、面的利用状況、全体形における部位についても計測し、傾向を抽出した。

結果と考察

a. 形態的属性

完形品 103 点の計測値の平均値、最大・最小値、標準偏差、分散値は、第 40 図 b に示した。この中で注目される点は、重量においてのばらつきが際立ってみられることである。第 40 図 c 重量度数分布においては、401g ~ 500g を頂点に正規分布をみせる傾向にあり、401 ~ 500g の重量が主に使われている傾向がみられる。このばらつきの起因を調べるため形状について Y 軸に長軸幅 / 短軸幅、X 軸に厚さ / 短軸幅を置く相関図を第 40 図 d に示した。相関図において右上がりの直線は、平均値を結ぶ直線であり、直線に近接するものがより平均的な形状に近づくものである。また、Y 軸が上にいくにしたがって形状が細長い形状を示し、0 に近づくにつれ短い形状を示す。X 軸については 0 に近づくにつれ扁平な形状を示し、1.0 に近づくにつれ肉厚な形状を示す。この相関図から得られた石器の形状についての特性は、縦軸 1.4 ~ 1.8・横軸 0.4 ~ 0.9 付近に集中する一つのまとまり(第 1 グループ)とその上位に平均値の線よりも左側にまばらに集中する縦軸 1.95 ~ 2.52・横軸 0.45 ~ 0.9 のグループ(第 2 グループ)と平均値より右側に集中する縦軸 1.0 ~ 1.3・横軸 0.5 ~ 0.9 に集中するグループ(第 3 グループ)と三つのグループに分かれる傾向にある。

すなわち、細長く扁平な形状をもつグループと、短く・より円形に近づくようなグループとその中間をとるグループ三つのタイプを小牧野遺跡では見ることができる。

この相関図に重量をあわせたものが第 40 図 e である。特定の形状に対して特定の重量が見られるという傾向ではなく、各形状のグループの中に各重量が見られる傾向にある。さらにグループごとの重量度数分布の傾向を抽出したものが第 40 図 f である。

第 1 グループについては、平均値と同様 401 ~ 500g に集中する状態ではあるが、第 2 グループについては、平均値より軽量の 301 ~ 400g と、やや重量の 501 ~ 600g に集中する傾向が見られる。また、重量は 800g までで収まっている。第 3 グループについては、401 ~ 600g を中心とし、201 ~ 700g まで広い利用状況である。

このように小牧野遺跡から出土した礫石器には、特定の形状と重量が結び付いたものではなく、形状において重量が幅広い選択性を持っていることが読み取ることができる。

b. 凹みのあり方

凹数に応じた個体数は、第 40 図 g のとおりである。1 個だけのものから階段状に少なくなる傾向にある。前述の形態的属性に比較した場合においても特定のまとまりを示すものでもない。

面的利用状況については、凹数 2 個以上のものについて第 41 図 a ~ e に示した。ここで扁平面を A 面・B 面・C 面(三角柱状形のもの)、側面を D 面という呼称で説明する。なお、各面ごとの新旧関係はつかめず、扁平面においては凹数の多いものを優先的に A 面とした。

凹数 2 個のものについては、A - B が半数を占め、2A がそれに続く、双方あわせて 88% と大部分がこのパターンに含まれる。

凹数 3 個のものについては、2A - B が 75% を占め 3A、A - B - C がそれに続く。ほぼ、凹数 2 個のもので主体である A - B、2A のパターンからの連続的使用によるものであると想定される。

凹数 4 個のものについても同様で、2A - 2B が 76.9% で、以下 3A - B、2A - B - C、A - B - 2D が続く。ここにおいても凹数 3 個のもので主体である 2A - B からの連続的使用が想定される。このパターンの連続性は、凹数 5 個、それ以上のものについてもあてはまる。

この点を考慮した場合、「凹み」が「敲く」や「押し潰す」といった行為において力点の中心点にできることを踏まえると、自然礫の形状における「凹み」痕ができる位置は、使われ方において意味を持つことが推定できる。礫の全体形に対する「凹み」の位置についての相関図を第41図fに示した。Y軸に「凹み」までの長軸距離/長軸幅、X軸に「凹み」までの短軸距離/短軸幅の比を落としたものである。この相関図を見る限りでは、「凹み」の位置は、ほとんどが中心部にはなく、中心部よりやや先端部分に集中する傾向が見られた。また、同一扁平面において2つ目の「凹み」は、1つ目のものに対して対称となるような中心点を越える部分に対して位置する例もみられた。力点の中心点は、すなわち、自然礫の形態的中心部より上の部分になるということである。

このことは、石の形状に対して力点の中心がずれるような使い方を想定することができる。その意味において、握った際に、指に対して対象物が当たらないようなものを敲くといった行為も考えることができる。また、前述した対称的な部分に位置する「凹み」に対しても握り換えといった行為で説明できよう。

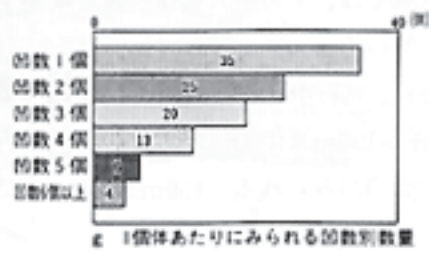
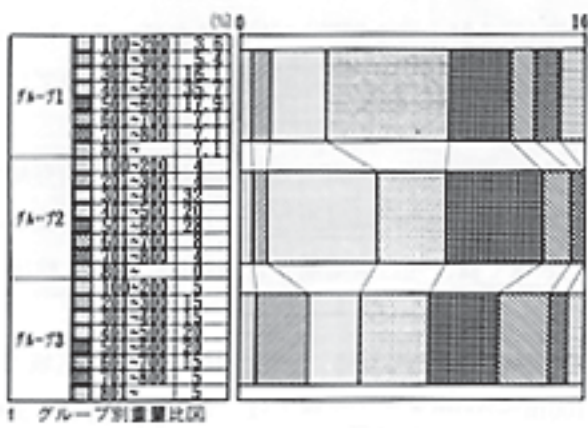
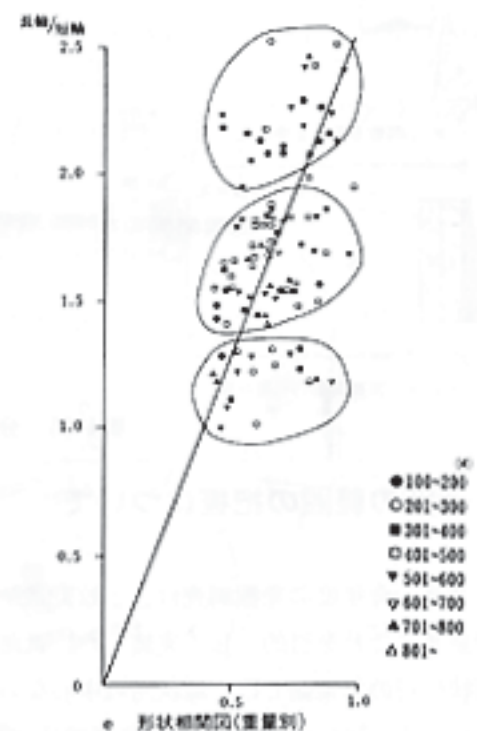
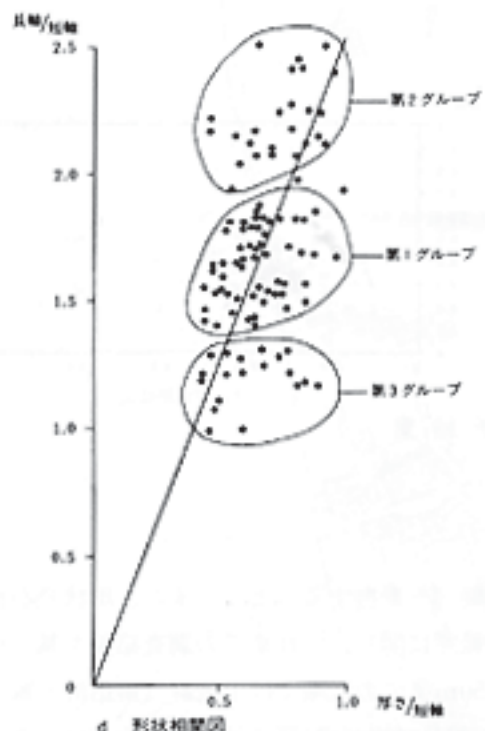
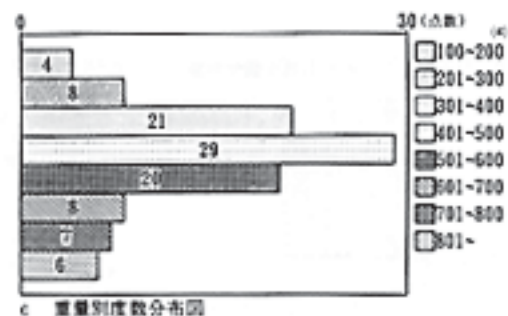
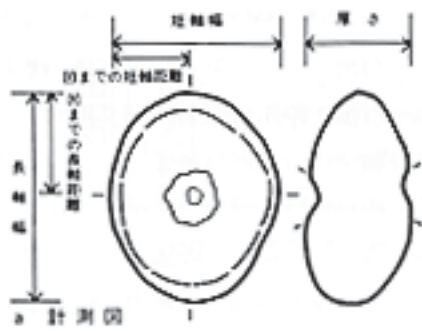
今回の分析において他の使用痕（磨痕・敲痕）が共存する個体については、凹痕単独のものと際立った差異を示すものではなかった。

「凹み」の断面形状については、鋭角なもの、緩やかな凹をとるもの、凹凸面をとるものがみられたが、このうち鋭角なものについては、石器製作の際のハンマー説がある（桃野1982）。しかしながら、鋭角なものと緩やかな「凹み」をとるものが共存しているパターンも多く、間接打法や使用頻度の差によるものであることも推定され、筆者自身それを裏付ける実験的データを持ち合わせていないことから即断については控えたいと思う。

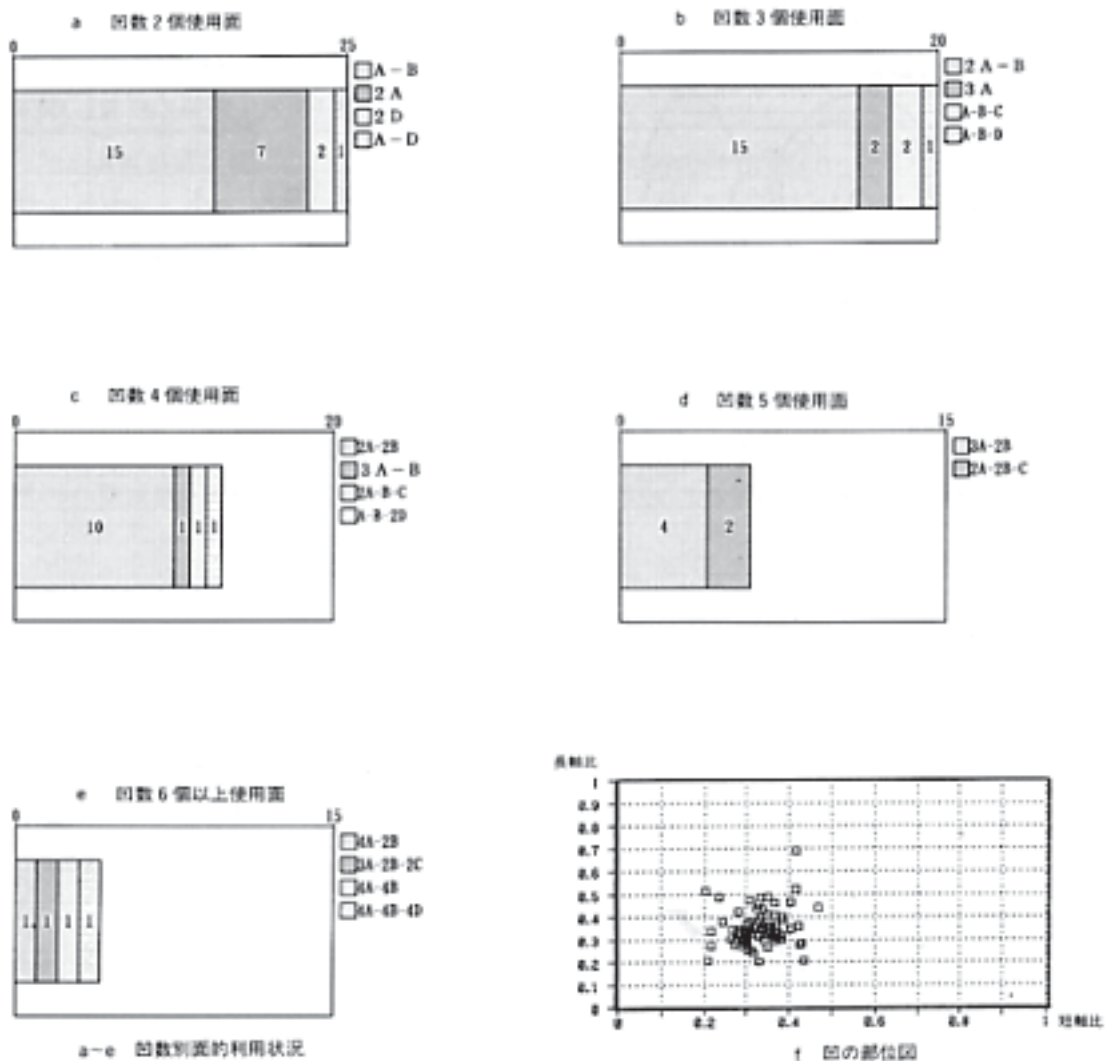
以上のことから、本遺跡における「凹み」を有する礫石器の用途については、直接的な根拠となりうるデータを示すことはできなかった。しかしながら、形態的属性のうち、重量において301～600gは、ちょうど手に持ちやすいものであると推定される。本遺跡出土のものについては槌器として捉えられることは間違いないであろう。今後、想定される用途（石器製作・堅果類）における「凹み」のでき方についての実験的データとの比較についても考慮すべき点である。

（木村 淳一）

1) この説は、鳥居龍蔵氏が北米のダコタ・インディアンに見られる弓錐法で発火する際に錐にする棒の頭で板を押さえたことからヒントを得たものであり、現在では否定されているという（大竹1994）。



第40図 分析結果



第41図 分析結果

第4節 遺跡の範囲の把握について

昨年度と同様、今年度の発掘調査は、小牧野遺跡の範囲を把握することと、また、環状列石構築者の居住区を確認することを目的として実施した。遺跡の範囲に関し、これまでの調査結果を基に検討してみると、環状列石の北東側では、環状列石中心ないし50mまでの区域では土坑群（第 群土器2類期）が検出されている。50m～100mまでの区域では、沢の部分に捨て場（第2号遺物集中ブロック、第 群土器2類期）を形成し、その直下から竪穴式住居跡（第3群土器1類期）が検出されている。100m～150mまでの区域では、その竪穴式住居跡と関連するものと考えられる捨て場（第1号遺物集中ブロック）が検出されている。

北西側では、列石中心から50m～100mまでの区域では、遺構が希薄となり、遺物の出土量も減少してくる。100m～150mまでの区域では、環状列石構築期の遺物が非常に少なくなり、縄文時代晩期の土器が出土する傾向がみられる。150m～200mまでの区域では、列石構築期の遺物並びに遺構は検出されていない。

西側では、列石中心～50mまでの区域では土坑群が確認されている。50m～100mまでの区域では、柱穴状ピットや配石遺構が数基検出されている。100m～200mまでの区域では、北西側と同じく遺構並び

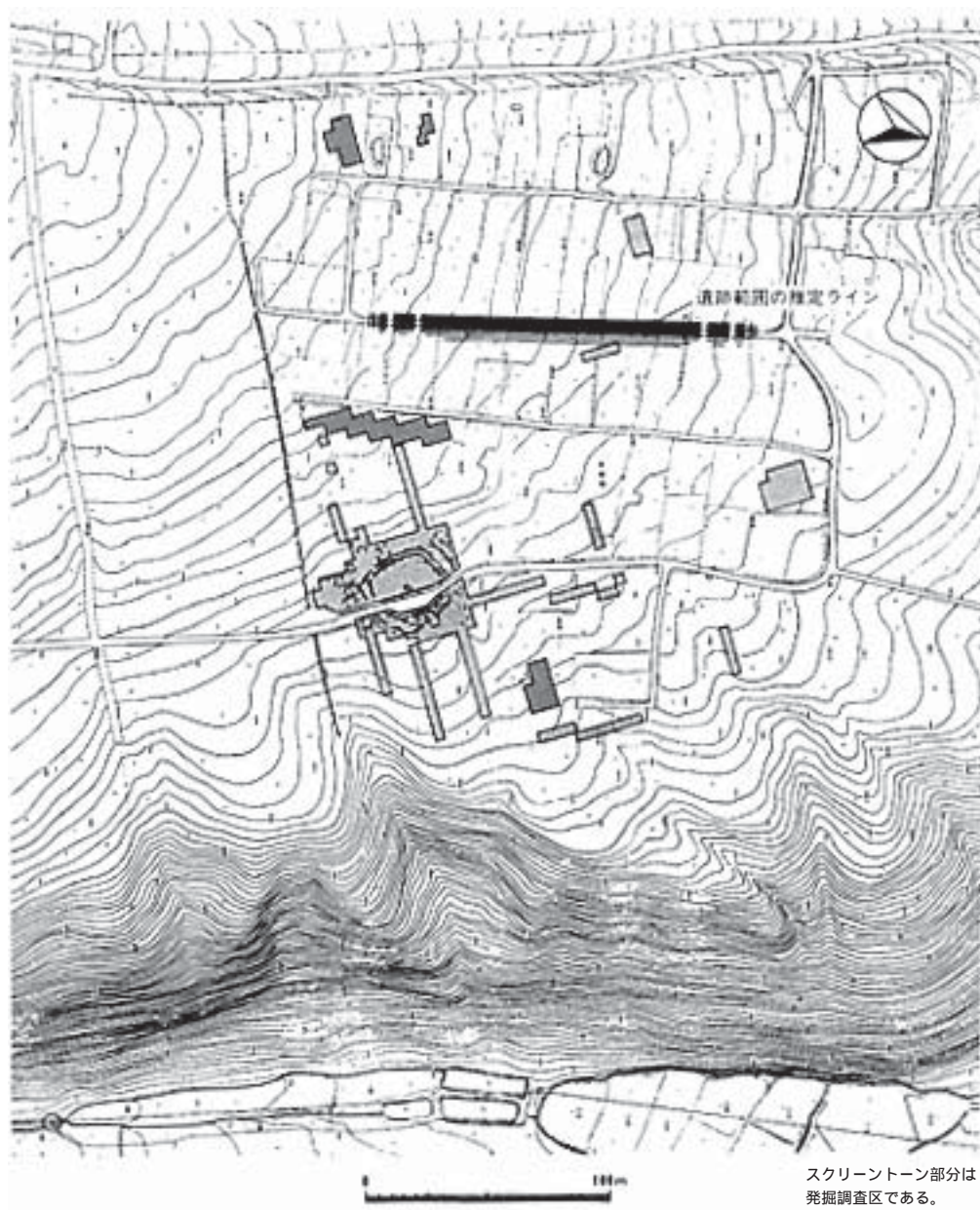
に遺物は検出されていない。

発掘調査による検出遺構並びに出土遺物の面から、環状列石中心からおよそ100m以内の北東ないし西側の範囲には縄文時代後期の遺構・遺物が広がり、100m～200m以内の北西側の範囲には縄文時代晩期の、同じく中心から50m以内の西～南側には続縄文時代の遺構・遺物が広がっているといえる。

以上のような成果と、昨年及び今年度実施した地下レーダー探査の結果と、さらには、平成8年10月30日に開催した「発掘調査会議」での席上において、両者の報告をしたうえでの討議を経て調査指導員並びに調査員のご指導・ご助言を総合し、遺跡範囲について推定できたラインは、下図に示したとおりである。

検討を重ねた結果、その一部ではあるが、環状列石の西側について、概ねの範囲を、列石中心から北東側約150mから西側約120mにかけても推定することができた。残る南・北・東側における範囲についても次年度以降、継続して調査を進めていく予定である。

(担当者一同)



第42図 遺跡範囲の推定ライン

ま と め

小牧野遺跡は、青森市大字野沢字小牧野に所在し、縄文時代後期前葉に構築された環状列石を主体とする遺跡で、八甲田山麓からのびる舌状台地上、標高140～150mに位置している。

本遺跡は、青森市教育委員会が平成2年度から毎年継続して学術調査を実施してきており、今年度の発掘調査は、昨年度と同様に遺跡の範囲の把握並びに環状列石構築者の居住区を確認することを目的に実施した。

今回の調査では、縄文時代後期前葉に構築・形成されたと考えられる土坑4基、小ピット4基、遺物集中ブロック1箇所を検出した。

遺物については、縄文時代後期前葉の捨て場跡と考えられる第5号遺物集中ブロックから、他の遺構や遺構外と比較して多量の土器や石器、土製品・石製品が出土した。

遺跡範囲の把握については、部分的ではあるが、環状列石の西側に概ねの範囲を推定することができた。

遺跡の将来像については、平成8年6月に小牧野遺跡整備基本構想策定委員会から、整備・活用に関する基本構想の提言を受けることができ、構想では、縄文時代の植生などを考慮した環境の復元、縄文人の世界観を視覚的に理解できるような遺構の復元などがあげられ、今後、大人から子供まで、豊かな青森市の縄文世界の一端を肌で体験できるような「史跡公園」としての実現を目指し整備を進めていく予定である。

最後となりましたが、調査から本書刊行に至るまで、ご指導ご協力を賜った多くの方々に、改めて感謝の意を表する次第です。

(担当者一同)

引用・参考文献

- | | | | |
|--------------|------|-------|------------------------------------------------|
| 青森県教育委員会 | 1975 | 第22集 | 『近野遺跡発掘調査報告書()』 |
| 青森県教育委員会 | 1977 | 第33集 | 『近野遺跡発掘調査報告書()三内丸山()遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1984 | 第79集 | 『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1985 | 第90集 | 『大石平遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1986 | 第97集 | 『大石平遺跡 発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1986 | 第101集 | 『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1987 | 第103集 | 『大石平遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1988 | 第115集 | 『上尾駮(2)遺跡 発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1989 | 第119集 | 『館野遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森県教育委員会 | 1991 | 第134集 | 『中野平遺跡・向山(4)遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市教育委員会 | 1993 | 第20集 | 『小牧野遺跡発掘調査概報』 |
| 青森市教育委員会 | 1996 | 第30集 | 『小牧野遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 | 1979 | | 『蛭沢遺跡発掘調査報告書』 |
| 大竹幸恵 | 1994 | | 「凹石」『縄文時代研究事典』 |
| 葛西 励 | 1979 | | 「十腰内 式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号 北奥古代文化研究会 |
| 葛西励・高橋潤 | 1989 | | 『青森市小牧野遺跡調査報告』 |
| 鹿角市教育委員会 | 1995 | 52 | 『大湯環状列石発掘調査報告書(11)』 |
| 加藤晋平・鶴丸俊明 | 1980 | | 『図録 石器の基礎知識 - 先土器(上)』柏書房 |
| 加藤晋平・鶴丸俊明 | 1980 | | 『図録 石器の基礎知識 - 縄文(下)』柏書房 |
| 後藤秀一 | 1979 | | 「敲石・凹石・磨石」『峠下聖山遺跡』七飯町教育委員会 |
| 長崎元廣 | 1970 | | 「凹石不可解論」『さがみの』7 |
| 七飯町教育委員会 | 1979 | | 『峠下聖山遺跡』 |
| 八戸市教育委員会 | 1986 | 第15集 | 『丹後谷地遺跡』 |
| 桃野真晃 | 1982 | | 「石器を作るハンマー - 凹石の用途について - 」『考古学論考小林行雄博士古稀記念論文集』 |
| 成田滋彦 | 1989 | | 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4後期晩期続縄文』小学館 |

写 真 图 版



Kトレンチ近景



Lトレンチ近景



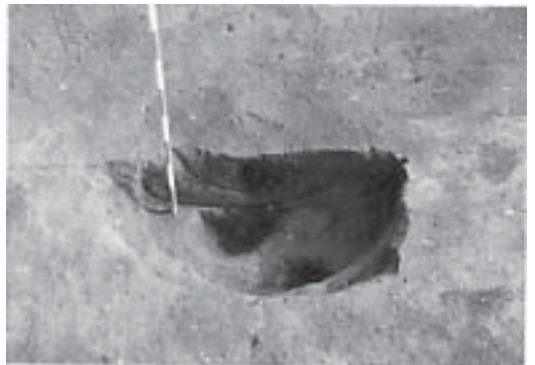
第153号土坑



第154号土坑



第155号土坑



第156号土坑



第5号遺物集中ブロック



同左 土器出土状況

写真1 調査状況

第5号遺物集中ブロック

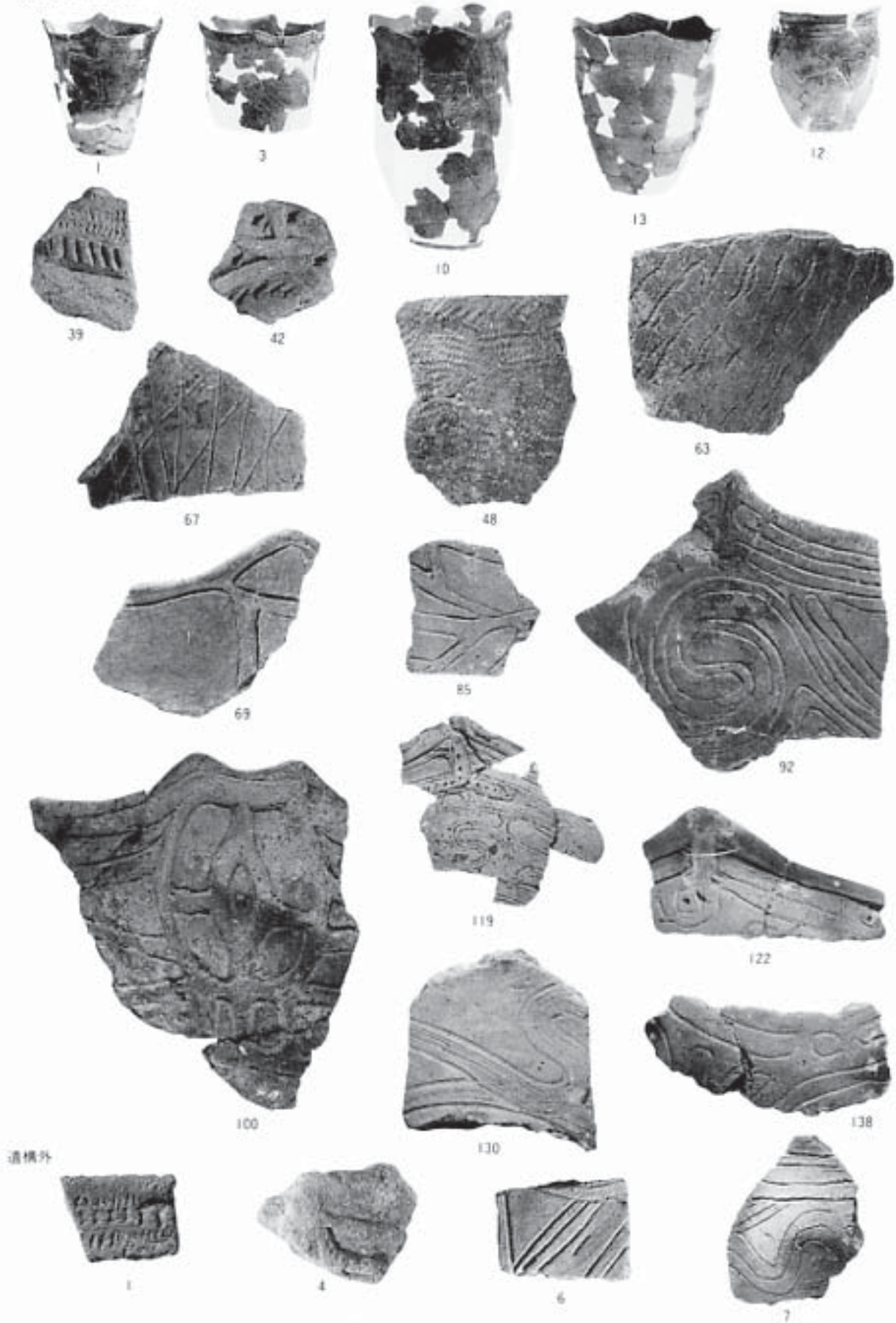


写真2 出土土器

第5号遺物集中ブロック



写真3 出土石器(1)

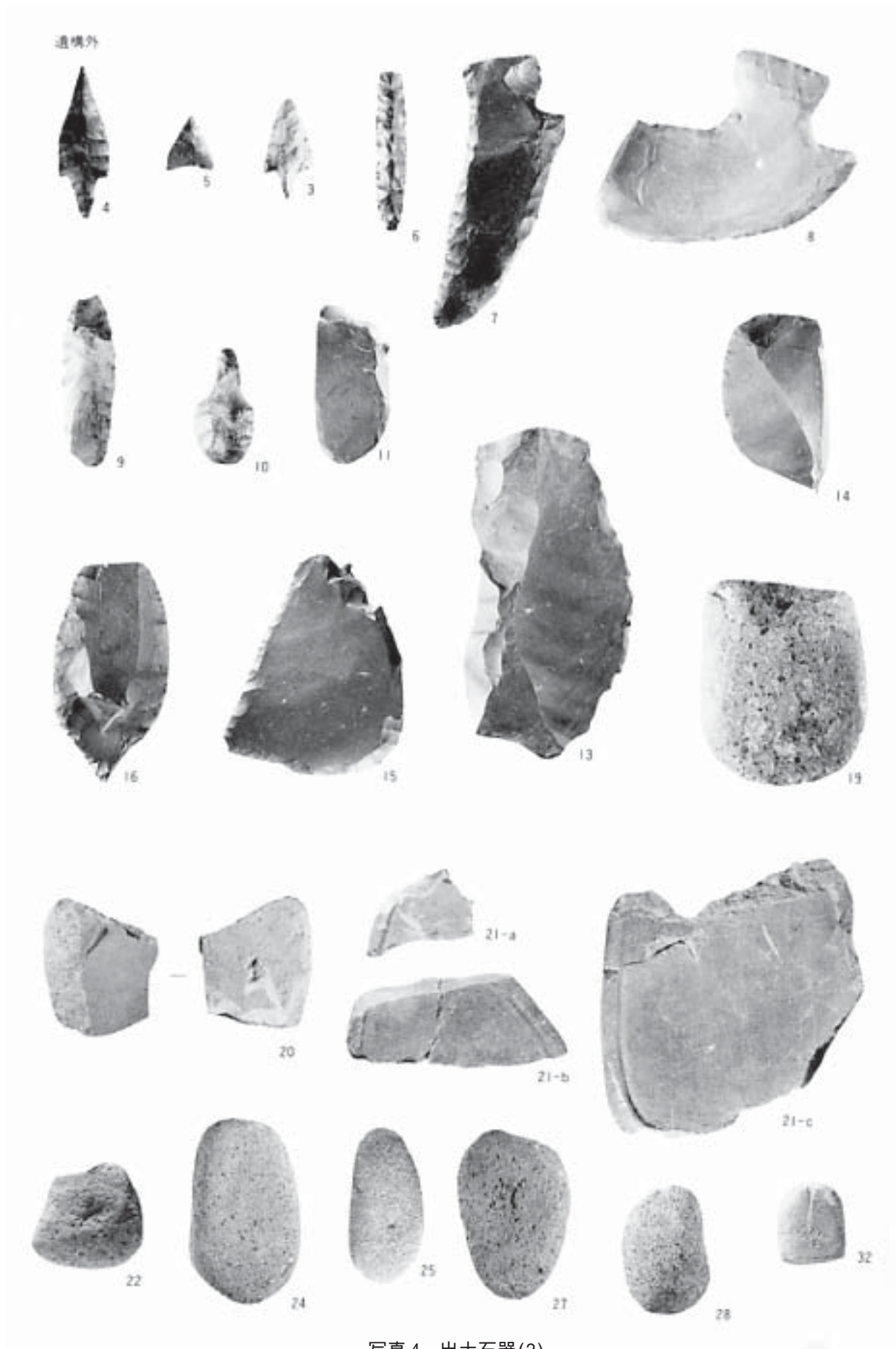


写真4 出土石器(2)

第5号遺物集中ブロック



写真5 出土土製品・石製品

ふりがな	こまきのいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	小牧野遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第35集							
編著者名	田澤淳逸、児玉大成、木村淳一、設楽政健							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL0177-34-1111							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
こまきの 小牧野	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 のざわあざこまきの 野沢字小牧野	02201	176	40° 43 53	140° 44 5	19960701 ~ 19960927	952	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小牧野遺跡	環状列石 墓域	縄文時代	土坑 小ピット 遺物集中ブロック1箇所	4基 4基	土器 石器 土・石製品			

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962 『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965 『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	1967 『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971 『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971 『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979 『螢沢遺跡』
		1983 『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983 『山野峠遺跡』
〃		1985 『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第16集		1991 『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993 『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993 『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1994 『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994 『三内丸山（2）遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995 『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995 『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996 『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996 『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997 『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃	第33集	1997 『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997 『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第35集

小牧野遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 9 年 3 月 31 日

発行 青森市教育委員会

〒030 青森市中央一丁目22-5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 青森オフセット印刷株式会社

〒030 青森市石江字江渡3-1

TEL 0177 - 82 - 2333
